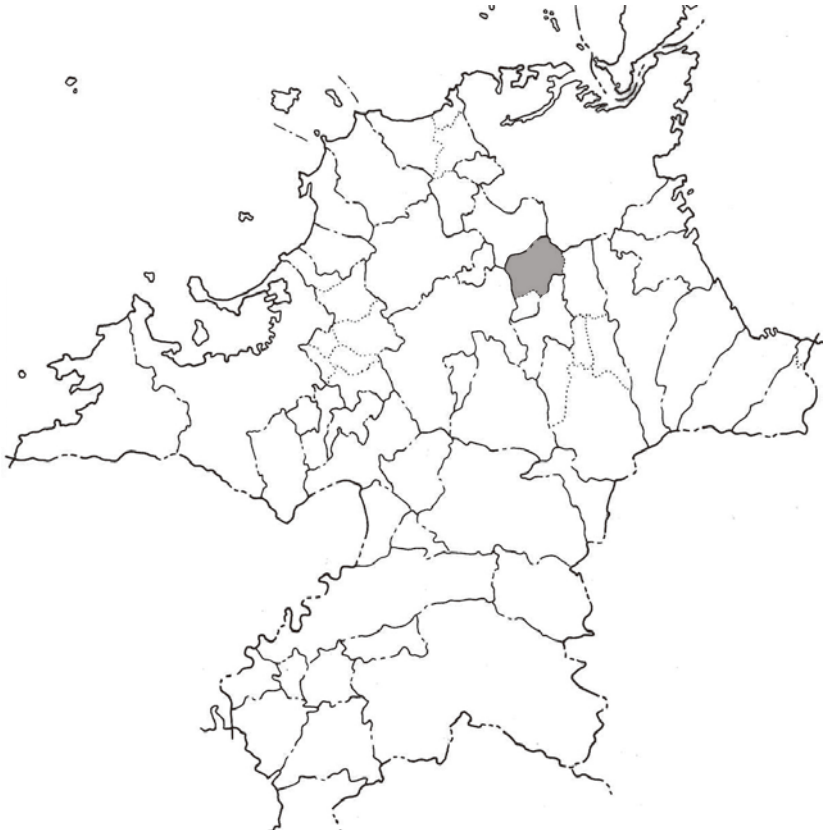
城山横穴群

福岡県田川郡福智町所在横穴群の発掘調査報告

福智町文化財調査報告書

第３集



第１図　福智町の位置

２０１４

福智町教育委員会



1.　城山横穴群全景（黒枠内）



2.　Y94 羨門部（西から）



3.　Y198・Y199 検出状況（左 Y198・右 Y199）（東から）



4.　墳丘確認トレンチ３遺物出土状況（東から）



5.　Y183 遺物出土状況（西から）



6.　墳丘確認トレンチ３出土遺物



7.　墳丘確認トレンチ３出土ハマグリ遺存須恵器坏

序

福智町は、福岡県のほぼ中央にあって、筑豊盆地の北側に位置しており、福智山系を北に仰ぎ、町を二分する彦山川の恩恵を受けている自然豊かな町であります。

また、400 年の歴史と伝統を誇る上野焼に代表される陶芸の里としても古くより知れ渡り、童謡作曲家としても有名な河村光陽先生生誕の地でもあり、文化的にも恵まれた町であります。

本書では、平成 20 年より調査を継続している城山横穴群の明らかになった部分に関して報告をさせて頂きたいと思います。

この遺跡は横穴群を主体とした遺跡ですが、横穴群としては九州の中にあっても最大規模のものであり、歴史的にも価値が高く、調査についても、現在継続中で更なる発見もあると感じています。私どもは、この遺跡を保存することにより、末永く次世代へと継承すべきと考えております。そのことが「ふるさと」の再発見、「町おこし」の一助になるものと確信しているところです。

いにしえの人々の生活に思いを馳せ、文化財保護、文化財愛護思想への意識の向上、並びに地域への歴史を知る意味も含めて、皆様にご活用戴ければ幸いに存じます。

なお、今回の発掘調査、報告書の刊行に際し、ご指導・ご協力をくださいました方々、および、関係機関に対して、衷心より感謝申し上げます。

平成 26 年 3 月 31 日

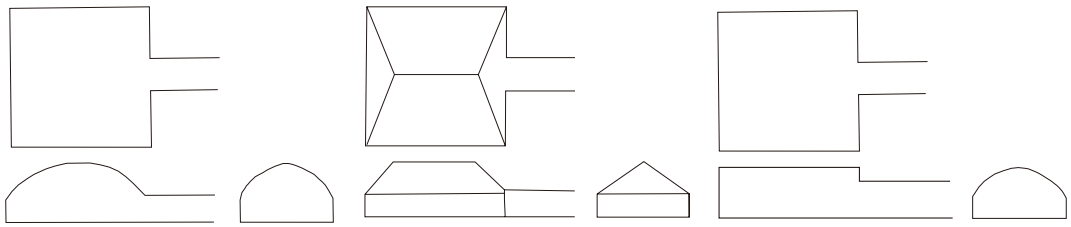
福智町教育委員会
教育長職務代理者　黒土　孝司

例　言

1．本書は、福岡県田川郡福智町金田所在の城山横穴群（JOUYAMA － YOKOANAGUN）における、西金田地区急傾斜地崩壊対策事業の計画に伴い実施した事前確認調査および保存目的のための重要遺跡範囲確認調査の報告書で、福智町文化財調査報告書の第３集にあたる。
2．発掘調査及び整理、報告書作成は、福智町教育委員会が国庫補助事業として実施した。
3．本書に掲載した遺構図は、井上勇也・石本和也・岡寺良（九州歴史資料館）・太田信行・奥村ひろみ・木村玉美・高田由美子・中野恵美子・平嶋寿敏・藤川岳久・吉岡淳子が作成した。
4．掲載した遺構写真及び遺物写真は、井上、長谷川清之が撮影した。遺物実測図及び図面の浄書は井上・高田・長谷川・桃崎祐輔（福岡大学教授）が作成した。空中写真は九州航空株式会社による。
5．本書に使用した座標は世界測地系であり、方位は全て座標北である。
6．本書の執筆はⅢ章６を岡寺、Ⅳ章５を岩橋由季（九州大学大学院）、Ⅳ章６を加藤和歳（九州歴史資料館）、その他は井上が行った。編集については斉藤亮磨の協力を得て井上が行った。

・天井部形態

なお、天井部の形態については、佐田茂による分類（1975「九州横穴の形式と時期」『考古学雑誌』61 巻第１号　日本考古学会）をもとに以下の三形態に分類した。天井部が半球形を呈するものをドーム形、天井部が家形もしくは軒先線の表現があるものを家形、奥壁・前壁側がほぼ垂直に立ち上がり、断面形がかまぼこ形に近い形態をアーチ形とした。



天井部形態模式図

・遺構の時期比定

遺構の時期比定は主に出土した須恵器を使用した。年代観は船山良一編年（船山良一編 2008『牛頸窯跡群 - 総括報告書Ⅰ -』大野城市文化財調査報告書 77 集　大野城市教育委員会）による。

目　次

Ⅰ　調査にいたる経緯と経過・・・

図版 7　1. 墳丘確認トレンチ 4 堆積状況中央（西から）、2. 墳丘確認トレンチ 4 堆積状況南側（西から）、3. 墳丘 9 東テラス、Y181（左）・Y109（右）（東から）
図版 8　1.Y110 墓道遺物出土状況（東から）、2.Y181 墓道（東から）、3.Y181 墓道堆積状況（東から）
図版 9　1.Y181 玄室奥壁（東から）、2.Y181 玄室右側壁（東から）、3.Y181 玄室左側壁（東から）
図版 10　1.Y181 玄門部（内から、西から）、2.Y41 羨門部（西から）、3.Y46 羨門部（西から）
図版 11　1.Y88 羨門部（西から）、2.Y133 玄室奥壁（北から）、3.Y133 玄室右側壁（北から）
図版 12　1.Y133 玄室左側壁（北から）、2.Y133 玄室玄門部（内から、南から）、3.Y133 羨門部（北から）
図版 13　1.Y138（左）・Y139（右）墓道（西から）、2.Y138 墓道（西から）、3.Y138 墓道堆積状況（南から）
図版 14　1.Y139 墓道（西から）、2.Y139 墓道堆積状況（北から）、3.Y147 墓道接続状況（南から）
図版 15　1.Y147 墓道（西から）、2.Y147 墓道堆積状況（北から）、3.Y148 羨門部（西から）
図版 16　1.Y220（左）・Y149（右）墓道 (西から)、2.Y149 墓道（西から）、3.Y220 墓道（西から）
図版 17　1.Y156 玄室奥壁（西から）、2.Y156 玄室右側壁（北から）、3.Y156 玄室左側壁（西から）
図版 18　1.Y156 敷石状況（左側壁側玄門部、東から）、2.Y156 天井部工具痕（左側壁上部、東から）、3.Y156 羨門部（西から）
図版 19　1.Y160 墓道（西から）、2.Y164 玄室堆積状況（北から）、3.Y164 玄室奥壁（西から）
図版 20　1.Y164 玄室右側壁（西から）、2.Y164 玄室左側壁（西から）、3.Y164 玄門部（内から、東から）
図版 21　1.Y164 羨門部（外から、西から）、2.Y180 墓道（西から）、3.Y180 墓道堆積状況（南から）
図版 22　1.Y219 墓道（西から）、2.Y219 墓道堆積状況（北から）、3.Y199 羨道左側壁遺物出土状況（東から）
図版 23　1.Y199 羨門部（東から）、2. 北側丘陵南端西側斜面横穴墓分布状況（南から）、3. 南側丘陵北端西側斜面横穴墓分布状況（北から）
図版 24　出土遺物 1
図版 25　出土遺物 2
図版 26　出土遺物 3
図版 27　出土遺物 4
図版 28　出土遺物 5

挿図目次

第 1 図　福智町の位置 ・・・

第 10 図　墳丘確認トレンチ 1（北から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第 11 図　墳丘確認トレンチ 2（西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第 12 図　墳丘確認トレンチ 3（南から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第 13 図　墳丘 5 縦断図・墳丘土層図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
第 14 図　墳丘確認トレンチ 1 ～ 3 実測図（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第 15 図　墳丘確認トレンチ 3 遺物出土状況（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第 16 図　Y124 横穴墓実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27・28
第 17 図　墳丘確認トレンチ 3 遺物実測図 1（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第 18 図　墳丘確認トレンチ 3 遺物実測図 2（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
第 19 図　墳丘確認トレンチ 3 遺物実測図 3（1/6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第 20 図　墳丘確認トレンチ 3 遺物実測図 4（1/6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第 21 図　Y124 遺物実測図 1（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
第 22 図　Y124 遺物実測図 2（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第 23 図　墳丘 9・9' 実測図（1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第 24 図　墳丘確認トレンチ 4（南から）・墳丘確認トレンチ 4 実測図（1/40）・・・・・・・・ 36
第 25 図　Y181 横穴墓実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37・38
第 26 図　Y181・墳丘 9 出土遺物実測図（1/3・1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第 27 図　Y25 出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
第 28 図　Y25 墓道接続状況実測図（1/60）・Y25 墓道接続状況（東から）・・・・・・・・・ 42
第 29 図　Y16・23・25・33・35 位置図（1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第 30 図　Y3・5 平面図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
第 31 図　Y16・23・33・35 平面図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
第 32 図　Y40・41・46・47・58・67・71・75・76・88 位置図（1/200）・・・・・・・・ 45
第 33 図　Y41 墓道接続状況実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
第 34 図　Y40・46・47・58・67・71・75・76・88 平面図（1/60）・・・・・・・・・・・・ 47
第 35 図　Y41・47 出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
第 36 図　Y88 出土遺物実測図（2/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第 37 図　Y94 羨門部実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第 38 図　Y103・105 横穴墓実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第 39 図　Y90・106・107・108 平面図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
第 40 図　Y133・138・139・147・148・149・156・220 位置図（1/200）・・・・・・・・ 53
第 41 図　Y133 横穴墓実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
第 42 図　Y133 出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第 43 図　Y138・139・147 地山整形状況（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
第 44 図　Y138・139・147 墓道接続状況（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第 45 図　Y148 入口部実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
第 46 図　Y149・220 墓道接続状況（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
第 47 図　Y156 横穴墓実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62

第 48 図　Y148・156・220 出土遺物実測図（2/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
第 49 図　Y138・147・149・220 出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
第 50 図　Y160・164・180・183・219 位置図（1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
第 51 図　Y160 墓道接続状況（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
第 52 図　Y164 横穴墓実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
第 53 図　Y180・219 墓道接続状況（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
第 54 図　Y183 遺物出土状況図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
第 55 図　Y183 出土遺物 実測図（1/3・2/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
第 56 図　Y198・199 入口部（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
第 57 図　Y199 出土遺物 実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
第 58 図　その他の出土遺物実測図（1/3・2/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
第 59 図　城郭遺構縄張り図（1/1,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
第 60 図　城山横穴群玄室規模分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
第 61 図　城山横穴群時期変遷図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79
第 62 図　城山横穴群群構造模式図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80
第 63 図　城山横穴群丘陵西側斜面横穴墓垂直分布状況（1/500）・・・・・・・・・・・・ 81・82
第 64 図　地域区分図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
第 65 図　1 北部九州と城山の横穴墓数の推移、2 遠賀川流域各地域と城山の横穴墓数の推移　84
第 66 図　1 北部九州と城山の横穴墓の玄室規模、2 遠賀川流域各地域と城山の横穴墓の玄室規模 84
第 67 図　1 北部九州各地の玄室天井形態の存在比・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
　　2 中津平野・京都平野の玄室天井形態の時期的推移・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
　　3 北部九州各地域の羨門部石組の有無の比率・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
　　4 北部九州各地域の墳丘の有無の比率・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
第 68 図　各地における時期ごとの横穴墓数と割合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
第 69 図　1 各地の横穴墓玄室奥行の箱ひげ図、2 各地の横穴墓玄室幅の箱ひげ図・・・・・ 87
第 70 図　1 全国各地の玄室天井形態の存在比、2 屍床形態分類概念図・・・・・・・・・・・ 88
　　3 全国各地の埋葬施設の存在比・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
第 71 図　1 全国各地の羨門部石組の有無の比率、2 全国各地の墳丘の有無の比率・・・・・ 89
第 72 図　雲珠の三次元像・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
第 73 図　鋲部分の三次元像・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
第 74 図　鋲頭部分の蛍光 X 線スペクトル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
第 75 図　赤色顔料の蛍光 X 線スペクトル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
第 76 図　遠賀川流域の古第三紀層分布状況と地域区分・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
第 77 図　遠賀川流域主要横穴系墓制分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97

表目次

表 1　横穴墓群の規模比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
表 2　横穴式石室墳・横穴墓一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98 ～ 107

Ⅰ　調査にいたる経緯と経過

1. 調査にいたる経緯と経過

(1) 調査の経緯

田川市郡では、毎年福岡県土木部局より次年度の事業計画に基づき、事業予定箇所における埋蔵文化財の取り扱いについての照会が行われる。その回答をもとに当該年度の工事予定について、福岡県田川土木事務所（現田川県土整備事務所）と管内の市町村文化財担当者の間で連絡会議が設けられている。平成 20 年 6 月の連絡会議の席上、福智町金田の西金田地区急傾斜地崩壊対策事業が提示された。事業対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「城山横穴墓群」であったため、遺跡の事前確認調査及び本調査が必要であると回答した。その後、平成 20 年 11 月に確認調査に入り、本調査費用積算のための表土厚の確認、遺構の分布調査を行った。その結果、事業予定地である丘陵西側及び東側の一部斜面において、総数 200 基以上の横穴墓と、それに伴うと考えられる墳丘 9 基を確認した。また、丘陵頂部では中世城郭の可能性が考えられる土塁、平坦面を確認した。さらに事業予定範囲外の丘陵東側斜面においても、西側斜面同様横穴墓の存在を確認した。この成果をもとに福岡県教育庁総務部文化財保護課を交え、田川土木事務所と今後の取り扱いに関する協議を行った。協議の席上、記録保存のための発掘調査を短期間で実施し、事業計画通り早期に工事に着手するのは非常に難しく、一方、遺跡の規模や内容の面で歴史的価値が非常に高いと思われることから、工事計画を見直し現状保存の方向での再検討を打診した。また、遺跡の重要性について文化庁にも報告し、助言を仰ぐこととした。福智町としては、記録保存調査後の工事着工も念頭に置いて、工事影響範囲の確認、本調査費用の積算等も併行して行った上で、県文化財保護課、田川土木事務所、福智町町長部局と協議を続けた。文化庁への状況報告後、遺跡の評価に関して、より詳細な確認調査を早急に進めることとした。遺跡の現状保存の可能性も見据えながら、平成 21 年度より 2 ヵ年工事着工を延期し、その間に国庫補助事業における確認調査を行うことで関係部局と調整、合意に達した。その後、平成 21 年 3 月には金田 1 区公民館において、これまでの経緯に関する住民説明会を行った。

平成 21 年 6 月､地元との協議も整い､国庫補助事業を受けて確認調査を開始した。調査期間中には、文化庁調査官による現地指導を仰いだ。その中で、保存、史跡指定を図るうえで、調査方針、調査成果について客観的評価を受ける必要があり、有識者による調査指導の必要性があることを指摘された。また、次年度以降については正式な調査指導委員会としての位置づけが必要であるとの指摘を受けた。調査中、3 名の有識者による調査指導を受け、平成 21 年度の調査を終了した。

平成 22 年 5 月､再び文化庁調査官による現地視察及び協議を行い､その後調査指導委員会を設置した。土木事務所との工事着工、保存についての回答期限が迫っていたため、指導委員会後の 7 月、文化庁にて保存に向けた協議を行い、協議の結果を基に町内部で調整を図った。最終的には 11 月に県文化財保護課を交え保存へ向けた協議を行った。その結果、町として史跡指定を目指すとの方針が決定し、これを受けて平成 23 年 2 月の調査指導委員会で、保存に向けた今後の方針が協議された。平成 22 年度までは開発を前提とした確認調査であったが、次年度以降保存目的の確認調査として調査、協議を継続することとなった。平成 23 年度より保存目的の確認調査を開始、平成 24・25 年度の調査の継続と調査指導委員会及び国、県の調査指導を経て、平成 25 年度には整理作業及び報告書を作成した。

（2）現在までの協議の経過

平成 20 年度	
6 月	福岡県教育庁文化財保護課及び田川市郡文化財担当と福岡県田川土木事務所（現田川県土整備事務所）の連絡会議 ・西金田地区の急傾斜地崩壊対策事業の提示
11 月	福智町教育委員会による確認調査 ・200 基以上の横穴墓とそれに伴う墳丘 9 基を確認
11 月	県文化財保護課現地視察　県土木事務所との協議 ・遺跡の重要性から、詳細な確認調査が必要であることを指摘
12 月	町長及び町教育委員会と県文化財保護課による遺跡の保存に向けた協議
1 月	町関係課長及び教育委員会の協議 ・確認調査後に保存か工事着工かの方針決定を行うことを確認
1 月	県文化財保護課及び町教育委員会と県土木事務所との協議 ・工法と影響範囲の確認
2 月	県文化財保護課と町教育委員会の協議 ・住民説明会後、平成 21 年度確認調査を行うことを確認
2 月	地元住民と町教育委員会の協議 ・地元区長に確認調査について説明
3 月	住民説明会 ・県土木事務所より工法説明　町教育委員会より確認調査について説明
平成 21 年度	
5 月	住民説明会
7月~3月	確認調査
9 月	文化庁文化財調査官現地視察
10 月	小田富士雄先生、藤田等先生、亀田修一先生現地指導
11 月	広瀬和雄先生現地指導
3 月	確認調査終了
平成 22 年度	
5 月	文化庁主任文化財調査官現地視察
5 月	平成 22 年度第 1 回調査指導委員会の開催　現状保存すべき遺跡であるとの見解
7 月	文化庁にて調査指導委員会の見解及び現在までの経過を説明
8 月	教育長と県文化財保護課協議
9 月	定例教育委員会で教育委員会として保存の方向性を目指すことを確認
10 月	町長より記録保存の方向性を提示 ・県土木事務所は工事に先立つ調査費の負担は困難であるとの見解
11 月	平成 23 年度国庫補助事業計画において保存目的の確認調査を計画 町内部協議及び県文化財保護課との協議 ・町として国指定史跡を目指すことを方針決定　県土木事務所へ説明

2月	平成 22 年度第 2 回調査指導委員会開催 ・保存を目指す方針の説明　次年度の保存目的の確認調査の方針を説明
3月	文化庁にて今後の方針について協議 町建設課と協議 ・住民説明会後、急傾斜地崩壊対策事業の要望取り下げを行うことを確認 緊急目的の調査について調査概要報告書を作成、刊行
平成 23 年度	
6月	文化庁文化財調査官現地視察
7月	住民説明会 ・町の方針（平成 25 年度をめどに国指定史跡を目指す）を説明 ・追加の確認調査の依頼を行う
12 月	平成 23 年度第 1 回調査指導委員会開催 ・当該年度の調査内容と今後の計画について説明
1月～3月	確認調査
3月	平成 23 年度第 2 回調査指導委員会開催 ・当該年度の調査内容と成果、今後の計画について説明 文化庁協議 ・事業経過と調査指導委員会の指摘事項について説明 ・福智町の体制について、現体制ではスケジュールが厳しいとの指摘を受ける
平成 24 年度	
5月～10月	確認調査
7月	平成 24 年度第 1 回調査指導委員会開催 ・当該年度の調査の状況と今後の調査について説明
1月	平成 24 年度第 2 回調査指導委員会開催 ・報告書の目次案とその内容について説明
3月	文化庁文部科学技官現地視察 ・報告書の目次案とその内容について協議 文化庁協議 ・報告書の目次案とその内容について報告 ・今後の日程について協議
平成 25 年度	
4月～3月	整理作業・報告書作成
5月	平成 25 年度第 1 回調査指導委員会開催 ・報告書の内容について説明
9月	文化庁文化財調査官現地視察　国指史跡範囲の協議
12 月	史跡指定同意のための住民説明会 指定意見具申に向けた文化庁ヒアリング
1月	意見具申書提出
3月	報告書刊行

2. 調査組織

平成 21 年度調査指導（敬称略・五十音順）

小田　富士雄（福岡大学名誉教授）
亀田　修一（岡山理科大学教授）
広瀬　和雄（国立歴史民俗博物館教授）
藤田　等（静岡大学名誉教授）

西金田城山横穴群調査指導委員会（敬称略・五十音順）平成 22 年度設置

任期　平成 22 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

委員長　小田　富士雄（福岡大学名誉教授）
委員　亀田　修一（岡山理科大学教授）
広瀬　和雄（国立歴史民俗博物館教授、現在国立歴史民俗博物館名誉教授）
藤田　等　（静岡大学名誉教授）
福智町文化財専門委員会委員長
平成 22 ～ 23 年度　永末　宏之　平成 24 ～ 25 年度　熊谷　信孝

福岡県田川土木事務所（平成 21 年 10 月より田川県土整備事務所）

河川砂防課砂防係

係長　橋目　隆雄　（平成 20 年度～ 21 年度）
奥永　毅　（平成 22 年度～ 23 年度）
担当　小川　正和　（平成 20 年度）
中江　克公　（平成 21 年度～ 23 年度）

福智町

町長　浦田　弘二
教育長　桑野　隆泰　（平成 22 年 7 月まで）
嶋野　勝　（平成 22 年 8 月～平成 25 年 7 月まで）
教育長職務代理者　黒土　孝司　（平成 25 年 7 月より）

生涯学習・人権同和教育課（平成 22 年 7 月より生涯学習課）

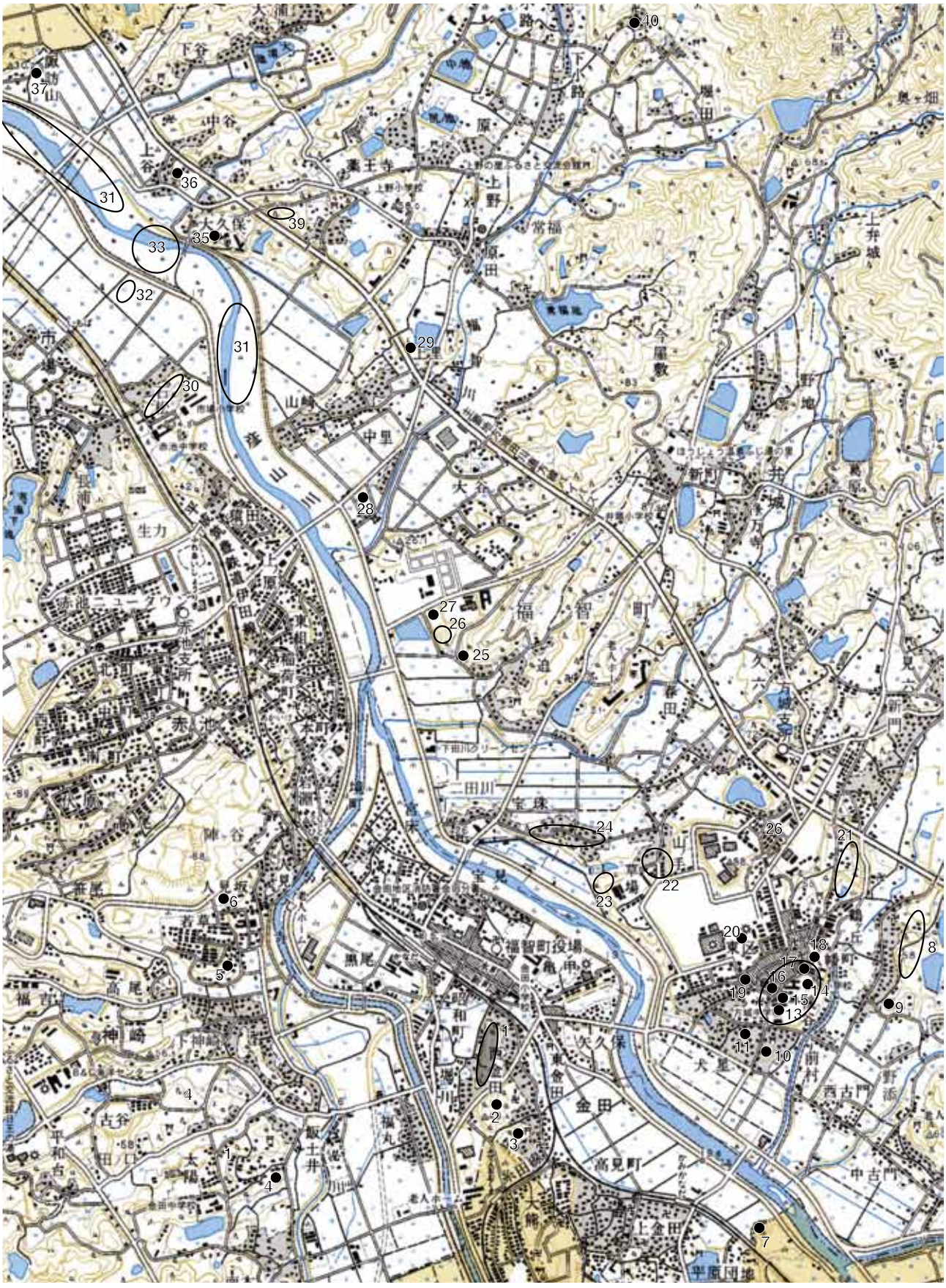
課長　森山　豊　（平成 20 年度）
辻村　哲弥　（平成 21 年度～ 24 年度）
森野　和彦　（平成 25 年度）
主幹　原口慎一郎　（平成 21 年度～ 22 年度 6 月まで）
中村　英二　（平成 23 年度～ 24 年度）

係長	原口慎一郎（平成 21 年度）
	中尾　勉　（平成 22 年度）
	八代　賢一（平成 23 年度～ 25 年度）
主査（経費執行事務・担当）	長野　士郎（平成 22 年度～ 23 年度）
	井上　勇也（平成 25 年度）
主任主事（経費執行事務・担当）	井上　勇也（平成 21 年度～ 24 年度）
	仲村　浩美（平成 23 年度～ 25 年度）
主事（担当）	井上　勇也（平成 20 年度）
	斉藤　亮磨（平成 25 年度）

発掘調査、整理作業に参加された方々は下記のとおりである。記して感謝いたします。
発掘作業員・整理作業員（敬称略・五十音順）
相原勲、池田太一郎、石井岳信、石井康文、石本和也、衛藤直実、太田信行、奥村ひろみ、木村玉美、楠木清高、桑野軍治、小松五十鈴、坂田純平、櫻木裕子、紫原香代、高田由美子、寺田勝義、中嶌邦雄、永末篤司、永末良一、中野恵美子、奈木野由佳、久冨飛雄馬、平嶋寿俊、藤江理智、藤川岳久、藤林純、藤林俊文、堀川幸敏、松浦尚恵、松田哲幸、松田福子、松田泰昌、松本和代、松本成玄、森五十男、森野千代利、八隅定雄、吉岡淳子、和田正人

調査にあたって、西金田城山横穴群調査指導委員会の先生方をはじめ、文化庁文化財部記念物課、福岡県教育庁総務部文化財保護課においては調査、協議に際し有益な御助言・御教示をいただいた。筑豊、北九州両教育事務所管内文化財担当者の皆様には調査、報告書作成において有益な御助言・御教示をいただいた。

現地調査においては、九州歴史資料館　岡寺良氏、地元住民ほか関係各位に多大な御理解と協力を得た。また、整理・報告書作成において、宮崎大学　柳沢一男名誉教授、福岡大学人文学部　桃崎祐輔教授、九州歴史資料館　加藤和歳氏、九州大学大学院　岩橋由季氏をはじめ多くの方々に有益な御助言・御教示をいただいた。感謝いたします。



第 2 図　城山横穴群周辺遺跡分布図（1/25,000）国土地理院 1/25,000「金田」を使用

1. 城山横穴群　2. 東金田横穴　3. 玉穂山古墳　4. 飯土井古墳　5. 神崎遺跡　6. 人見古墳群（神崎 1 号墳）7. 和田山横穴群
8. 野添遺跡群　9. 高崎山古墳　10. 法華屋敷遺跡　11. 前村遺跡　12. 伊方遺跡群　13. 伊方城園遺跡　14. 伊方小学校遺跡第 1 地点
15. 伊方小学校遺跡第 2 地点　16. 伊方小学校遺跡第 3 地点　17. 伊方石丸遺跡　18. 伊方古墳　19. 後谷遺跡
20. 九州日立マクセル赤煉瓦記念館　21. 長谷横穴墓群　22. 三本松古墳群　23. 草場遺跡　24. 宝珠遺跡　25. 迫遺跡
26. 迫横穴墓群　27. 迫古墳　28. 板取遺跡　29. 宮ノ馬場遺跡　30. 石松遺跡　31. 市津川床遺跡　32. 市場平石遺跡
33. 鋤木田川床遺跡　34. 草場川床遺跡　35. 蔵元遺跡　36. 鋤木田古墳　37. 諏訪山遺跡　38. 国境石　39. 那岐野丘遺跡
40. 上野興国寺

Ⅱ　位置と環境

（1）地理的環境（第 1 図）

福智町は福岡県の中央部、田川郡の北端に位置し、平成 18 年 3 月 6 日赤池町、金田町、方城町の三町が合併し誕生した。北は福智山系を挟んで北九州市、南は田川市、糸田町、東は香春町、西は直方市、飯塚市に隣接する。町の北側は福智山を中心とする山岳地帯であり、起伏に富んだ地形である。南側には福岡県第二位の河川として知られる一級河川遠賀川の支流、中元寺川と彦山川が合流し、西へ流れ出る。現在の人口は約 26,000 人、観光、教育をはじめとする人の活力を生かした町作りを展開している。文化的には、400 年の歴史を誇る上野焼に代表される陶芸の里、童謡作曲家の河村光陽生誕の地として全国的に有名である。

城山横穴群は、中元寺川の右岸、標高 21m から 39m ほどの独立丘陵上に位置する。遠賀川の中流域に含まれる地域であり、福岡県下でも横穴墓集中地帯として知られている地域である。城山横穴群は、40 ～ 50 基程度の横穴墓群として、古くからその存在が知られ『金田町史』には赤色顔料の記載もあり、装飾を持つ横穴墓が存在する可能性も指摘されていた(1)。

（2）歴史的環境（第 2 図）

福智町は、国の登録文化財 1 件、県指定文化財 8 件、町指定文化財が 15 件と指定、登録文化財だけでも 24 件を数え、他にも多くの文化財が所在し、地域の歴史に触れる材料が豊富な土地である。

町内でもっとも著名な文化財は、登録文化財の九州日立マクセル赤煉瓦記念館や、県指定文化財を 3 件所有する上野興国寺である。前者は旧三菱方城炭鉱時代の建物であり、築 100 年を越え、内部は社員用の喫茶室、展示場として現在も活用されている。この建物は敷地内に残る他の赤煉瓦建物とともに、かつて炭坑で栄えた筑豊の近代化遺産を象徴する存在となっている。上野興国寺は足利尊氏が九州へ逃れた際に隠れたとも伝えられ、尊氏、直義兄弟発願の安国寺の一つである。古文書、仏殿（観音堂）、木造玄晦禅師坐像は県指定文化財に指定されている。また、町内には県下でも著名な天然記念物であるエドヒガンの虎尾桜、定禅寺境内の迎接の藤と呼ばれる藤がある。虎尾桜は福智山の中腹にあり、そこにいたる道は幾分険しいものの、毎年盛りになると多くの見物客が訪れている。エドヒガンは希少種の桜であるが、福智山山麓には九州でも例がない密集地帯として有名である。

福智町には、縄文時代から人々が生活していた痕跡が残されている。明確な集落は未確認であるが、金山遺跡、長浦遺跡では縄文時代の遺物、遺構が確認されている。数点ではあるが、縄文時代早期から前期の土器も出土し、古くからこの地で人々が暮らした事が分かっている。特に金山遺跡では縄文時代後期から晩期の石器製作跡と考えられる遺構が確認され、周辺に当該期の集落が存在した可能性がある。

弥生時代は、遠賀川流域では立岩遺跡や立屋敷遺跡といった学史に残る遺跡が多く確認されている。立岩遺跡では 10 面の前漢鏡が出土した集団墓が確認され、弥生時代のクニの存在が明らかとなっている。また、そこで生産された石包丁は北部九州に広く分布し、生産地としても立岩遺跡は全国的に有名である。彦山川流域では、北部九州の弥生時代研究の資料として知られる下伊田式土器の由来となった、下伊田遺跡群などが存在する。町内では彦山川、中元寺川の河岸段丘に生活の

場が移り、伊方丘陵やその周辺、神崎地区などで生活の痕跡や墓地が確認されている。特に伊方丘陵やその周辺は、弥生時代から古墳時代にかけて主要な生活の場であったと考えられ、町内でも有数の遺跡密集地帯である。弥生時代後期末から弥生時代終末と考えられる宝珠遺跡の石棺墓からは内行花文鏡が出土し、ほぼ同時期と推定される三本松古墳群からも同じく内行花文鏡が出土している。このことは、有力者の存在を連想させ、後の伊方古墳と並びこの一帯の中心地であったことがうかがわれる。青銅器は弥生時代においては有力者層の存在を想定できる資料である。彦山川流域では上流域の大任町で銅剣が、隣の糸田町では銅戈が、香春町では宮原遺跡で銅鏡が出土し、それぞれの地域において有力者層の存在が想定されている。

古墳時代前期から中期にかけては、各地で前方後円墳が首長墓に採用される時期である。遠賀川流域においても上流の嘉麻市所在の沖出古墳や下流の遠賀町所在の島津・丸山古墳群などの前期の前方後円墳が築造される。町内の前期の古墳は迫古墳が知られる。主体部は粘土郭で覆われた木棺で、副葬品等は出土していないが、形態から前期古墳と位置づけられている。町内では以後目立った古墳の造営は行われていないようである。神崎遺跡では前期と考えられる石棺墓が確認されている。

古墳時代中期は前方後円墳が各地で築かれるとともに巨大化していく。また、横穴系の墓制が日本に導入された時期に当たる。流域の田川市ではセスドノ古墳、猫迫古墳という 2 つの古墳が営まれる。セスドノ古墳は朝鮮半島との関連が伺える横穴式石室を持ち、猫迫古墳は古墳時代中期の資料が少ない遠賀川流域の中でも九州最古級の馬形埴輪などが出土し、全国的にも有名である。また、5 世紀後半には豊前北部で横穴墓の築造も開始される。行橋市の竹並横穴群や中津市の上の原横穴墓群に、5 世紀代にさかのぼると考えられる横穴墓が確認されている。町内では古墳時代中期には目立った古墳の造営もなく、現在確認できる横穴墓は 5 世紀末～ 6 世紀前半であり、不明な点が多い。

古墳時代後期になると各地で群集墳が築造される。遠賀川流域は地質的な影響からか横穴墓が群集墳として数多く造営される。町内でも例外ではなく数多くの横穴墓が造営され、今回報告を行う城山横穴群も主体は横穴墓群である。横穴墓群の数に反比例して横穴式石室を内部主体にもつ古墳の数は少ない。町内で確認されている後期古墳はわずか数基である。遠賀川流域においても、横穴式石室を内部主体とする古墳群は横穴墓群に比べ数は少ない。一部、宮若市のように横穴式石室墳が群集墳の主流となる地域もあるが、これは地質環境を背景に形成されたものと理解される。町内にある県指定史跡伊方古墳は墳丘径約 32m、内部の横穴式石室は全長 12m を超え、福岡県下でも有数の規模を持つ巨石墳である。保存整備に先立つ発掘調査の結果、少ないながらも金銅装の馬具等が確認され、地域首長の古墳であると考えられる。また町内では、神崎 1 号墳からの獅噛環柄頭という優れた副葬品が出土している。獅噛環柄頭は全国的にも類例が少なく貴重な遺物である。神崎 1 号墳は周辺の状況から横穴墓の可能性もあり、そうであるなら首長墓に準ずる階層の横穴墓採用という横穴墓集中地域としての地域性の現れとして重要である。上流域の飯塚市では金銅装の帯金具などの豪華な副葬品が出土している櫨山古墳が横穴墓と考えられている(2)。遠賀川流域では、横穴墓という墓制が有力者層にも採用されていたことが想定できる。

古墳時代の集落については、現在のところ目立った遺跡は発見されていない。町内だけでも古墳時代後期の群集墳は、横穴墓を中心に数百基存在すると考えられるが、現在までのところ、これら

群集墳の造墓主体となる集落は確認されていない。古墳時代の土器が伊方丘陵の裾部や赤池地区の川底で発見されている。今後調査が進めば伊方の丘陵部や赤池の河岸段丘上などで集落が発見される可能性がある。

古代では伊方城園遺跡で掘立柱建物等が確認されている。また伊方という地名はその後伊方荘として文献にも登場する。伊方城園遺跡では鎌倉時代の建物も確認され、伊方石丸遺跡でも同時期の井戸が確認されている。伊方周辺は中世まで地域の中心地として人々が生活していたことが伺える。また上野興国寺は、室町時代に安国寺として創建され現代に続く古刹である。先に述べたように、足利尊氏の伝承も残り、近世豊前に入封された小笠原藩ゆかりの寺でもある。幕末には小笠原藩９代藩主の葬儀もここで行なわれた。

近世の城山横穴群周辺は細川氏、小笠原氏によって治められた豊前の地であった。彦山川流域では手永（大庄屋）と呼ばれる家が周辺の年貢の管理などを行っていた。その中でも金田手永六角家は有名である。現在の母屋は後世のものであるが、六角家には藩主が通る専用の門である、御成門のある白壁、土蔵などが残り往時の姿をとどめている。城山横穴群はこの六角家の裏山であり、敷地の一角として手付かずのまま残されたといえる。横穴群の頂部には累代の近世墓も残っている。

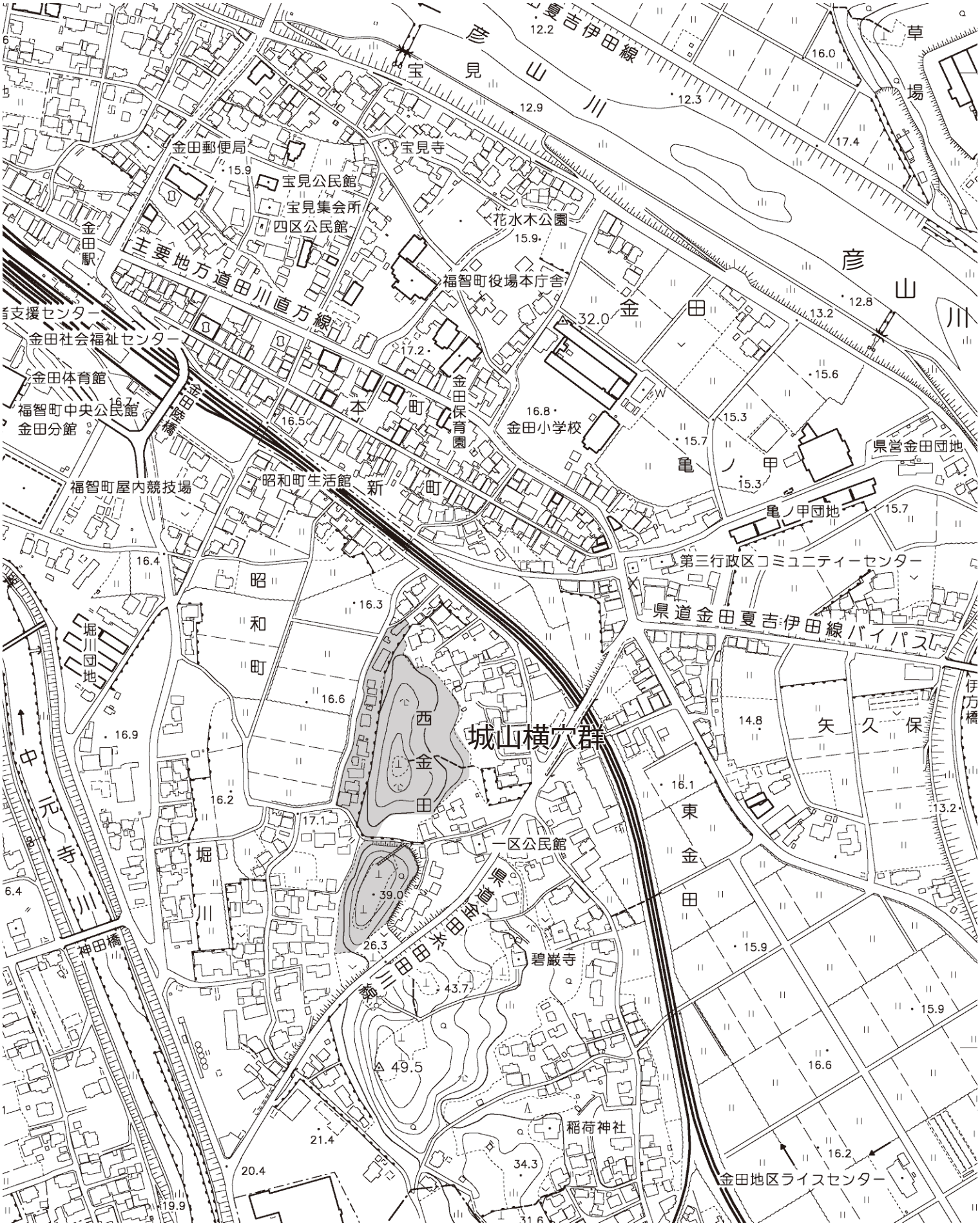
現在も町の特産品として 400 年の歴史を持つ上野焼は、文禄・慶長の役により日本へやってきた朝鮮陶工を招いた細川氏により始められ、細川、小笠原の時代に藩窯として栄えた。町内には開窯である釜の口窯をはじめ、岩屋高麗窯、皿山本窯という古窯址も存在しその歴史の深さを今に伝えている。この上野焼の故地とされる韓国泗川市とは、上野焼 400 年祭を契機に現在も小学生の交流が続いている。

近代は、筑豊地区全体が炭鉱とともに発展して行った経緯がある。町内でも三菱方城炭鉱、明治赤池鉱業所など大手資本による大規模炭鉱をはじめ、数多くの中小炭鉱が創業し、活気にあふれていた。現在ではボタ山等にわずかにその面影を残すのみとなっている。その中でも三菱方城炭鉱の赤煉瓦建物群は、現在日立マクセル株式会社九州事業所の敷地内に数棟残り、国登録文化財の九州日立マクセル赤煉瓦記念館を始め、今でも活用され、筑豊の近代化を物語る資料として筑豊の歴史を見守っている。

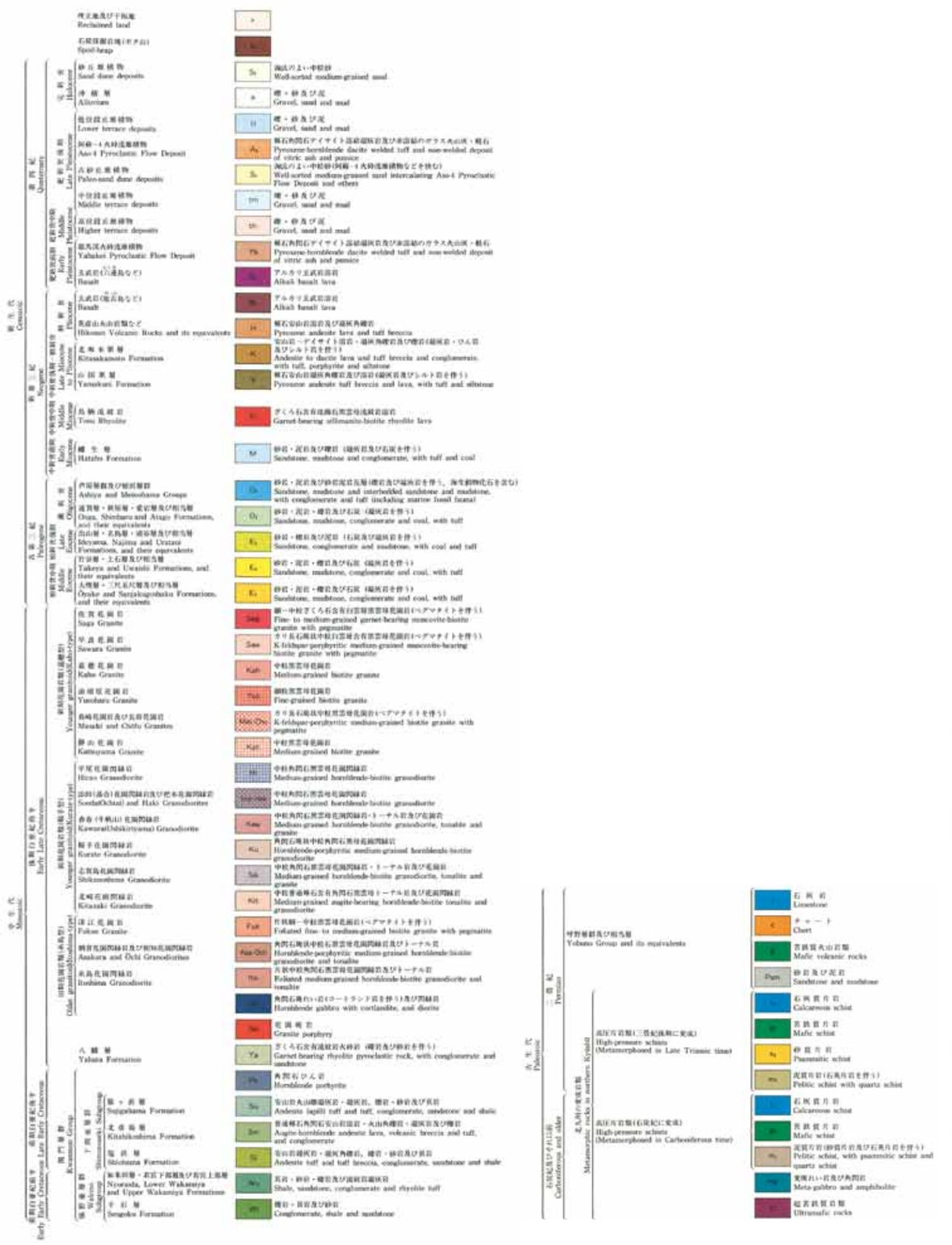
註

（1）金田町教育委員会編 1990『金田町史』

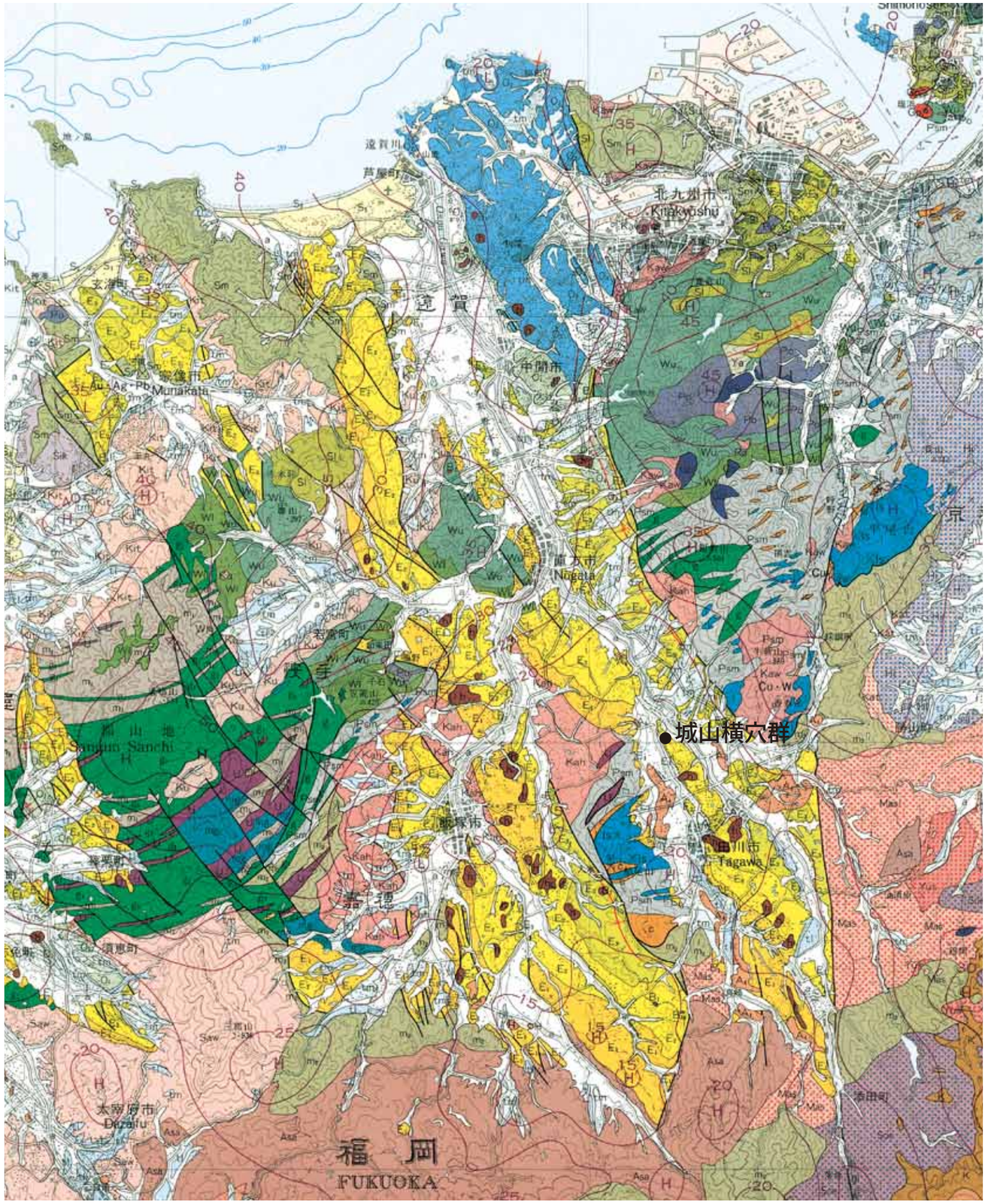
（2）嶋田光一 1991「福岡県櫨山古墳の再検討」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集



第 3 図　城山横穴群周辺地形図（1/5,000）



第４図　遠賀川流域地質図（1/200,000）



（産業技術総合研究所　地質調査総合センター発行　20 万分 1　地質図幅「福岡」を使用　承認番号 第 60635130-A-20130611-001 号）

Ⅲ　調査の内容

1. 遺跡の概要

城山横穴群は、福岡県の中央を流れる遠賀川の支流のひとつ中元寺川の右岸、標高 21m ～ 39m の独立丘陵上に存在する。以前より斜面上に横穴墓が分布することが知られており、また、彩色を持つ横穴墓が存在する可能性も指摘されていた。

今回の調査では、222 基の横穴墓と横穴式石室墳 1 基、中世城郭を確認した。横穴墓の中には墳丘を有する横穴墓も含まれ、地域史解明の糸口となる貴重な遺跡である。

確認された横穴墓及び横穴式石室には発見順に Y の略号を付け番号を振った。墳丘も同じように発見順に番号を振った。各遺構の数値は残存部および推定値を含み、追加調査等で変更される場合がある。

2. 調査の方法と概要

（1）平成 20 年度の調査

a 目的

・急傾斜地崩壊対策事業に先立つ事前調査として、丘陵上の遺構分布状況の把握。

b 方法

・福岡県田川土木事務所提供の地形測量図に確認された遺構を記入。

・部分的に確認トレンチを設定し、表土厚及び遺構内容を確認。

c 調査成果

・表土厚はボーリング調査の結果と大差はなく、掘削土量を算定し本調査費の積算を行った。

・確認トレンチから、埋没遺構が多数存在し、横穴墓数は増加する可能性が考えられた。

・確認調査概要報告を作成、福岡県田川土木事務所へ提出した。

（2）平成 21 年度の調査

a 目的

・詳細な城山横穴群についての内容把握。

・丘陵全体及び各墳丘の地形測量による形状把握。

・遺構の部分的な発掘調査および簡易調査による横穴墓の構造、時期変遷の把握。

・横穴墓の分布空白域における横穴墓の有無確認。

・上部に存在する中世城郭の基礎的情報の把握。

b 方法

・墳丘を持つ横穴墓である Y124 の玄室内部構造の把握、及び Y124 上部の墳丘 5 の盛土状況確認。トレンチによる墓道部の確認。

・現状で石材が散乱し石室墳の可能性が考えられるため、墳丘 10 に伴う Y122 について、陥没部分のトレンチによる内部構造確認。

・『金田町史』に赤色顔料の記載がある南側丘陵の Y133 について、内部構造の把握と赤色顔料の

確認。トレンチによる墓道部の確認。
・前方後円形を呈し埴輪片が採集される墳丘 9 について、トレンチによる墳形確認。
・Y122 北側斜面において、表土除去およびトレンチによる横穴墓の分布状況確認。
・横穴墓の構造確認のため、進入可能な横穴墓における略測、写真撮影。

並行して基礎資料となる丘陵全体の地形測量を 1/500 で行い、それに調査成果を反映させることで横穴墓の分布状況を図化した。併せて墳丘について 1/200、20cm コンタにて図化を行った。

また横穴墓群上部に存在する中世城郭について、九州歴史資料館岡寺良氏の協力のもと縄張図を作成した。

(3) 平成 23 年度の調査
a 目的
・城山横穴群についての構造把握。
・遺構の部分的な発掘調査および簡易調査による横穴墓の構造、時期変遷の把握。
b 方法
・墳丘規模確認のため、墳丘 5 のトレンチ調査。
・墳丘 9 主体部と考えられる Y181 墓道部のトレンチ調査。
・横穴墓の構造確認のため進入可能横穴墓における略測、写真撮影による簡易調査。

(4) 平成 24 年度の調査
a 目的
・城山横穴群についての構造把握。
・遺構の部分的な発掘調査および簡易調査による横穴墓の構造、時期変遷の把握。
b 方法
・Y181 横穴墓の玄室内部構造確認の為の床面の発掘調査。
・斜面上の横穴墓の墓道構造解明のためのトレンチ調査。
・横穴墓の構造確認のため進入可能横穴墓における略測、写真撮影による簡易調査。

3．横穴式石室墳

墳丘 10（1 号墳）・Y122

墳丘 10（1 号墳）（第 6 図、図版 1）

墳丘測量結果より、直径約 14m、高さ約 3m の円形の墳丘と考えられる。墳丘盛土はトレンチの壁面観察の結果、黒色土と赤褐色土の互層が確認できる。盛土の方法は横穴墓の墳丘盛土とは明らかに異なり、構築技法に明確な差が認められる。

基底面は赤褐色の粘性土で成形し、腰石を据えている。この基底面は貼床状でかなり硬い。墳丘の断ち割りなどは行っていないため、石室の掘り方は明確には検出していない。腰石から 2 段目の石材の下部にかけて、裏込に赤褐色の粘性土を充填し、その上に墳丘盛土を積んでいる。



第５図　城山横穴群遺構配置図（1/1,250）

Y122（1 号墳）（第 6・7 図、図版 1）

墳丘中央部に陥没部分が確認でき、陥没部分の形態から当初東側に開口する構造であると考えられた。石材が散乱し石室部分想定部の西半部分を A、B、東半部分を C、D として A ～ D の 4 区画に分割し、奥壁想定部分である A 区から掘り下げを開始した。

トレンチ調査結果、奥壁と考えられる腰石及び敷石を部分的に検出、石材の裏込を確認した。A 区の石材検出時点ではプラン、主軸は確定できていない。その後石室のプラン確定のため、陥没部分を掘り下げた。C 区では袖石と考えられる石材を検出、その後石材より東側で陥没部分の開口部方向（東側）へ延びる硬化面を確認した。この時点では羨道部の床面と想定し、調査を継続した。左側壁推定部分には石材が検出できる可能性があったため、検出に努めたところ、袖石と推定した石材の南側に石材を確認し、石室隅部を検出した。その後に、南側開口の可能性について指摘を受け、石室南側の更なる確認を行い、南西方向に開口する玄門部を確認した。

玄門部確認後、ようやく石室のプランを確定する事ができた。プランは右側壁がやや膨らむ単室の横穴式石室である。残存状況は悪く、全体の 1/3 程度しか残存していない。石室規模は幅約 2.2m、長さは石材の抜き取り跡から推定し 2.6m ほどである。羨道部は未調査である。主軸方位は N-19° -W であり、南東方向に開口する。

敷石は現状で 2 面確認できる。下層（一次敷石上）より須恵器坏身、耳環、鉄鏃等を検出している。これらの遺物は、石室は石材の抜き取り等で荒らされているものの、出土状況より初葬時に近い遺物と考えられる。

遺物（第 8 図、図版 24）

1 は須恵器坏身である。口径 10.8cm、受部径 13.6cm、器高 4.3cm を図る。焼成は良好で全体的に暗灰色を呈する。外面は一部自然釉の剥落の為か風化した様になる。胎土は微細砂粒を多く含むものの比較的精良である。調整は外面の底部から 2/3 程度まで回転ヘラ削りがみられ、それ以外の部分はヨコナデを施す。形態より 6 世紀後半～末の特徴を持ち、初葬はこの時期と考えられる。

2 は土師器の壺である。復元口径 9.4cm、残存高 6.3cm を図る。焼成は良好であり、内外面共に橙褐色を呈する。胎土は細砂粒と小礫を含みやや粗い。頸部付近まで内外面共にミガキが確認できる。

3 ～ 11 は鉄鏃である。全て長頸類である。4、10 の茎部分には木質が残存する。

12 は耳環である。開口部には折込皺はなく開口部の状況から鍍金と考えられる。心材は緑錆に覆われることから銅芯であろう。外径 2.5 ～ 2.8cm、内径 1.4 ～ 1.5cm、断面 0.6 ～ 0.7cm である。

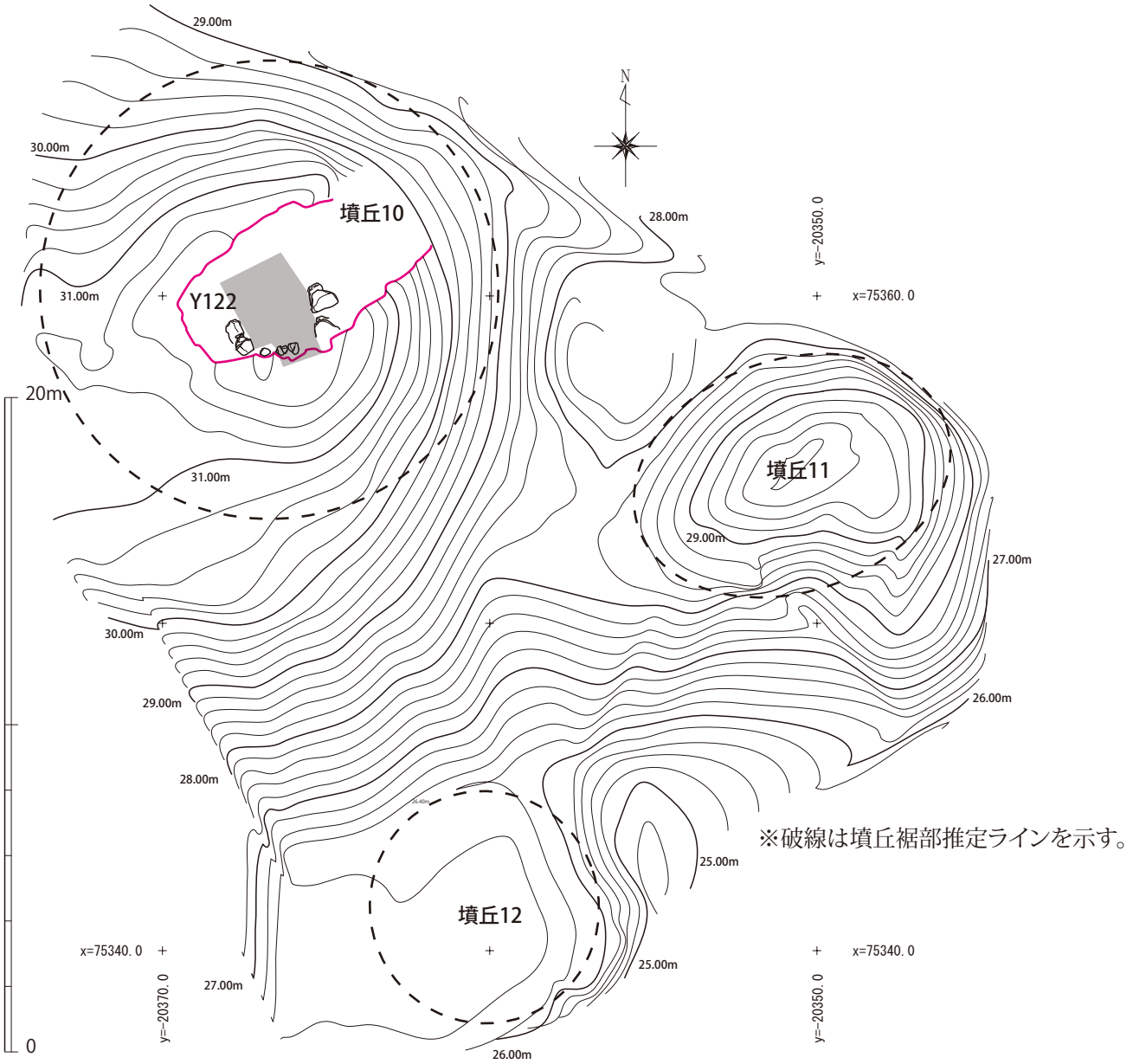
4. 墳丘を持つ横穴墓

墳丘確認トレンチ 1・2・3（第 9 ～ 12、14・15 図、巻頭図版 3 － 4、図版 2・3）

墳丘 5 の墳裾確認を目的として、3 本のトレンチを設定し掘削を行った。

トレンチ 1 では、1 層とした黒色土が厚く堆積していた。この層を除去したところトレンチ中央付近で溝状に落ち込む部分を、トレンチの南北で 2 層とした盛土を確認、北側を墳丘 4 の墳裾、南側を墳丘 5 の墳裾と判断した。トレンチ内には小ピットが多数見られ、中世城郭にともなう遺構の可能性も想定される。

トレンチ 2 でも薄いながらも 2 層とした盛土を確認し、墳丘 5 の墳裾を確定した。



第 6 図　墳丘 10・11・12 実測図（1/200）

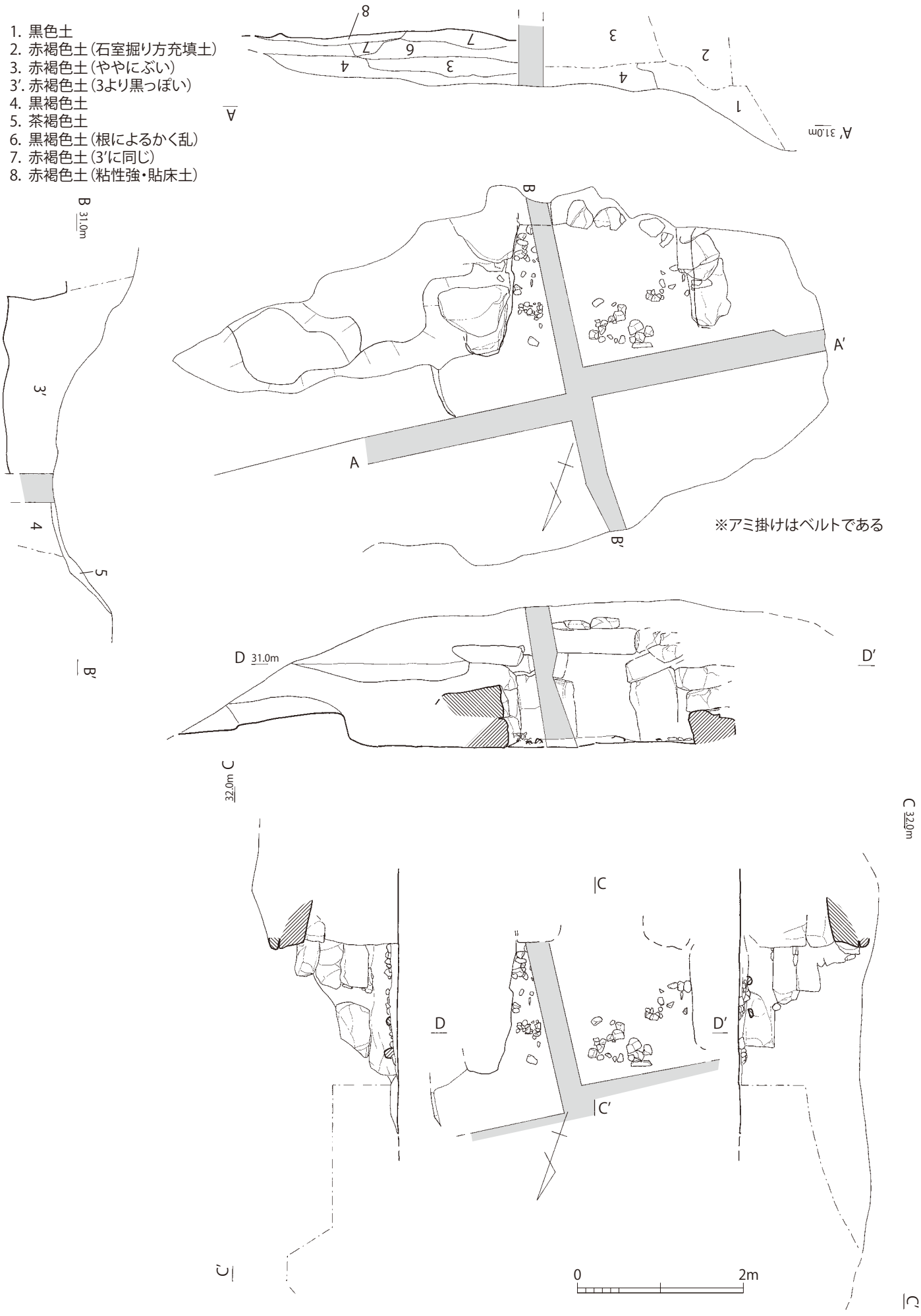
トレンチ 3 北半では 2 層とした盛土を検出し、墳丘 5 の墳裾を確定した。

このトレンチ 3 からは、表土中より多量の甕片が出土している。接合個体数で 11 のグループにのぼり、これらの甕片の下部より須恵器坏蓋、坏身、短頸壺が出土した。そのうちの一つの須恵器坏蓋、坏身のセットの中からハマグリが出土した。トレンチ 3 の南半、墳丘 5 の墳裾端から南側は地山が 1 段上がり、テラス状となる。先述した須恵器坏蓋、坏身、短頸壺が出土したのはこのテラス上面である。トレンチ北側で確認した 2 層の盛土はテラス上までは延びていない。

遺物（第 17 ～ 20 図、巻頭図版 4 － 6・7、図版 24・25）

すべて墳丘確認トレンチ 3 より出土している。ハマグリが遺存していた坏身は九州歴史資料館が撮影した CT 画像から実測図を作成した。

1 ～ 13 は須恵器坏蓋である。4 の天井部内面には円形の沈線状のヘラ記号が施される。1、7、8、10、11 では天井部内面に当て具痕が残る。4、11、13 の口縁端部は段が残り、丁寧なつくりである。



第7図　Y122（1号墳）石室実測図（1/60）

天井部外面の調整は 4 と 6 のみ回転ヘラ削りを行った可能性があるが、ほかはヘラ切り未調整かヘラ切り後ナデ調整を施すのみである。

14 ～ 26 は須恵器坏身である。20 の底部内面には円形の沈線状のヘラ記号が施される。20 や 23 は受部のつくりがあまい。20 は底部外面に回転ヘラ削りを施し、ややつくりが丁寧である。

底部外面の調整は 18 と 20 のみ回転ヘラ削りを行った可能性があるが、ほかはヘラ切り未調整かヘラ切り後ナデ調整を施すのみである。

27 ～ 30 は須恵器の高坏である。27 の坏部は体部と底部の境目にくし描きによる刻目を施す。脚部は 2 段の透かし孔を施し、3 方向に入ると考えられる。28 は脚部片である。体部と底部の境目には、くし描き波状文の痕跡が確認できる。脚部の中ほどに沈線が確認できる。29 は脚端部であり、透かし孔が認められる。

31、32 は須恵器の蓋付短頸壺である。31 は天井部外面に回転ヘラ削りが 2/3 程度施され、他の坏蓋よりつくりが丁寧である。32 は口径 8cm、器高 8.7cm、胴部最大径 13.9cm を測る。底部外面は 2 /3 程度回転ヘラ削りが施され、蓋同様丁寧なつくりである。焼成はやや不良であり灰褐色を呈する。胎土はやや粗い。

33、34 は須恵器提瓶である。33 は口縁端部から体部にかけて一部欠失するが、口径 5.9cm、器高 15.8cm、胴部最大径 12.5cm を測る。体部はカキメ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。焼成は良好であり、灰褐色、部分的に灰色を呈する。胎土は粗い。34 は口縁端部を欠失するが、残存高 17.4cm、胴部最大径 15.4cm を測る。体部はカキメ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。把手はカギ状である。焼成は良好であり、灰褐色、部分的に灰色を呈する。胎土は比較的精良である。

35 は土師器高坏の脚部である。外面は縦方向の削り、内面にはしぼりの跡が残る。

36 ～ 45 は須恵器甕である。特徴的なものは 44 の四耳付甕である。復元口径 17.8cm、器高 45.2cm、胴部最大径 48.6cm を測る。口頸部は他の甕に比べ開かず、直に立ち上がる。肩も他の甕に比べ張る。調整は平行タタキに青海波文の当て具痕と一般的に見られる調整である。四耳は半環状である。

36 は頸部外面にヘラ記号を施す。41 は頸部外面にくし描きによる文様を施す。

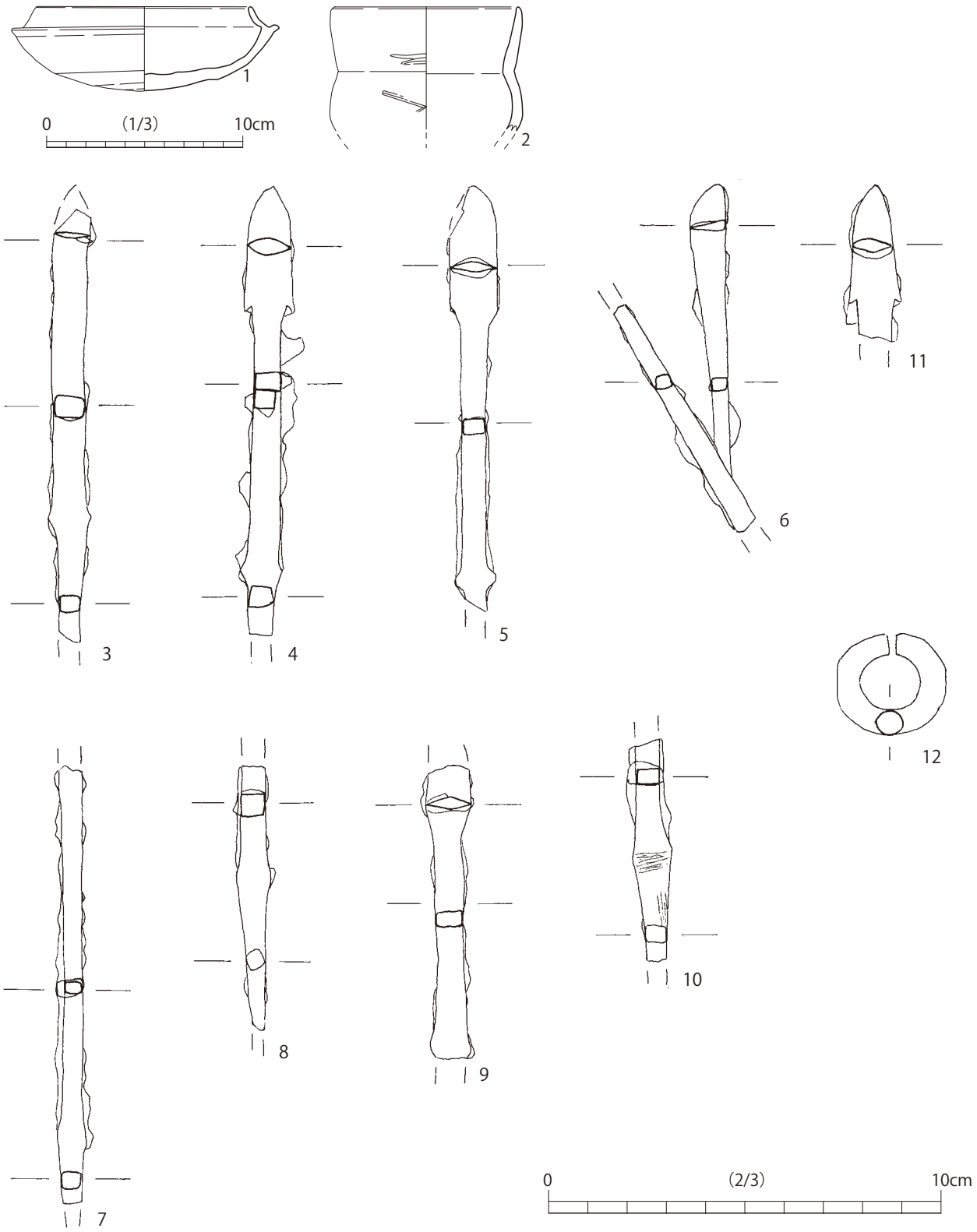
墳丘 5・Y124

墳丘 5（第 9・13 図、図版 2・3）

後世の削平面を清掃し墳丘盛土の土層状況を確認した。調査の結果、墳丘の盛土は 2 層で横穴墓掘削地盤である黄色もしくは赤黄褐色砂岩層からなる 1 層の盛土であり、明確な版築等は行われていないことが確認できた。上層の 1 層は表土層である。上部盗掘孔及び墳丘確認トレンチ 1 から 3 において墳裾部を確認している。墳丘規模は東西 10.2m、南北 11.6m である。

Y124（第 16 図、図版 2・4・5・6）

主体部前面のトレンチにおいて墓道を確認し、横穴墓入口部の掘り下げを行った。主体部前面のトレンチでは、表土層（古墳時代以降の堆積層）が墓道部まで堆積しており、近世陶磁器片、中世の青磁片などを包含していた。この層を除去し、地山面を検出したため墓道部の部分的掘下げを行



第 8 図　Y122（1 号墳）出土遺物実測図（1/3・2/3）

った。トレンチ西壁（横穴墓入口部側）では若干堆積の違いが認められ、改めて土層観察を行った。表層とその下に続く黒色層、3 層の暗褐色土は後世の堆積と考えられる。最下層は 3 層と同質であるが、やや暗い色調のため 4 層として分離した。また、3 層からは古代末から中世の土器片が出土している。

墓道部半裁の結果、墓道部にはトレンチ西壁で確認した 4 層が続き、墓道床面まで同一層が続く。この 4 層は古墳時代以降にかく乱を受け、堆積した可能性もあるが、この層中から出土する遺物は古墳時代のものがほとんどである。出土遺物には時期幅があり、初葬時の遺物、追葬時の遺物等の明確な分離は不可能だが、最も古いもので 5 世紀末～ 6 世紀前半と考えられる須恵器を確認している。墓道は深さ 0.8m、幅は上端付近で約 2.0 ～ 2.6m である。一墓道一墓室の形態をとると考えられる。墓道部の堆積状態からも追葬の確認はできていない。

玄室内については、入口部は閉塞石が残存しており進入ができなかったため、上部の盗掘孔より内部に進入した。

玄室内の状況では、床面から 1m 程度まで崩落土により埋没していたため、崩落土を除去し玄室内の調査を行った。玄室は壁面及び天井部の崩落、床面の部分的かく乱等はあるものの比較的残存状態は良い。玄室プランは 2.06m × 2.07m のほぼ正方形で、床面は四周に排水溝が巡る。中央部は 2 段の壇上になり敷石は検出していない。天井部、壁面共に軒先線等はなく、天井部形態はドーム形である。玄室内から遺物は出土していない。主軸方位は S-76° -W であり、東向きに開口する。

羨道部は玄門部で幅 0.4m、長さ 1.0m と推定される。閉塞状況については板石による閉塞が確認でき、1 枚の板石を用い間隙を拳大よりやや大きめな礫を用い充填している。板石上部は盗掘のため欠失する。板石は羨道の入口部分にある梱石上の石材の上に置かれている。

遺物（第 21・22 図、図版 25・26）

出土遺物は全て墓道埋土より出土している。

1 は須恵器𤭯である。頸部から口縁部にかけては欠失する。胴部最大径 10.15cm、残存高 8.4cm を測る。胴部下半は削り、内面底部は不定方向のナデ、ほかの部分はヨコナデによる調整がみられる。胴部上位にくし描き波状文を施す。焼成は良好であり、全体的に淡青灰色、一部明黄灰色を呈する。胎土は精良である。

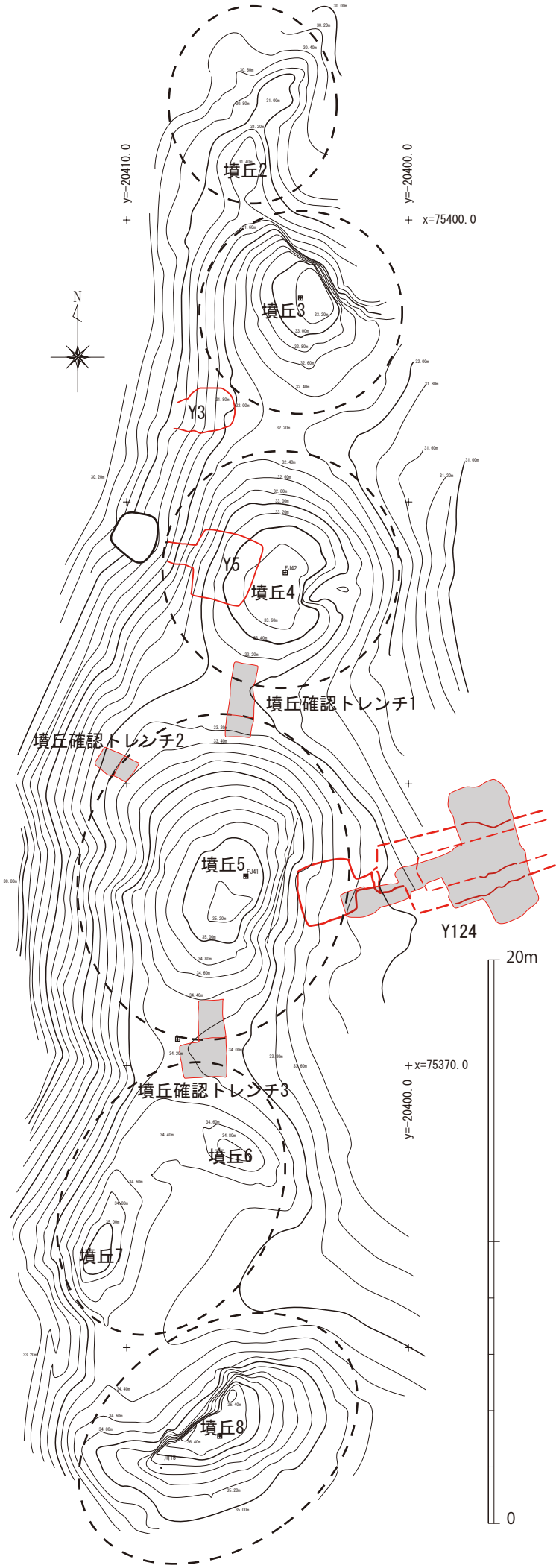
2 は須恵器平瓶である。口縁部は欠失する。全体にカキメ調整が施される。焼成は良好であり、灰色から黒灰色を呈する。胎土はやや粗い。

3、4 は須恵器提瓶である。3 は体部と口縁部を一部欠失するが、残存高 22.1cm、胴部最大径 21.5cm を測る。体部はカキメ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。把手は半環状である。焼成は良好であり、外面は暗灰色、内面は灰色を呈する。胎土は比較的精良である。4 は口縁部と体部下半を欠失するが、残存高 18.4cm、胴部最大径 23.6cm を測る。体部外面はタタキ後カキメ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。把手はカギ状である。焼成は良好であり、灰色、部分的に黒灰色を呈する。胎土は比較的精良である。他の提瓶に比べ口頸部は直立し、口縁端部の形状も外側に折り返したような形態をとる。体部の作りも表裏とも丸みを帯び、やや異質な印象を受ける。

5、6 は須恵器甕片である。5 の体部には平行タタキが施され頸部から口縁部の内外面はヨコナデを施す。6 の頸部から口縁部はヨコナデ調整、体部外面は縦方向の平行タタキを施す。

7、8 は黒色土器の高台付近である。外面はナデ調整、内面はミガキ調整を施す。共に焼成は良好であり、内面は黒灰色、外面は 7 は明るい黄灰色、8 は暗い黄灰色を呈する。

9、10 は龍泉窯系の青磁碗である。9 は体部から口縁部にかけて欠失する。高台径 6.3cm、残存高 4.0cm を測る。釉は高台下部までかかる。底部は削り調整、高台は貼り付けである。焼成は良



第 9 図　墳丘 2・3・4・5・6・7・8 実測図（1/200）



第 10 図　墳丘確認トレンチ 1（北から）



第 11 図　墳丘確認トレンチ 2（西から）



第 12 図　墳丘確認トレンチ 3（南から）

好であり、淡緑茶色を呈する。胎土は精良である。10 は体部から口縁部にかけて欠失する。高台径 6.2cm、残存高 3.4cm を測る。釉は高台下部までかかる。底部はヘラ削りによる調整、高台は貼り付けである。焼成は良好であり、外側は明青灰色、内面は薄青灰色を呈する。胎土は比較的精良である。

11 は滑石製石鍋である。復元口径 25.0cm、残存高 6.5cm を測る。内面調整は不明瞭、外面は削りの後ミガキ調整を施す。

古代末から中世の遺物は、墓道埋土の 3 層中から出土している。

墳丘 9・Y181

墳丘 9（第 23・24 図、図版 6・7）

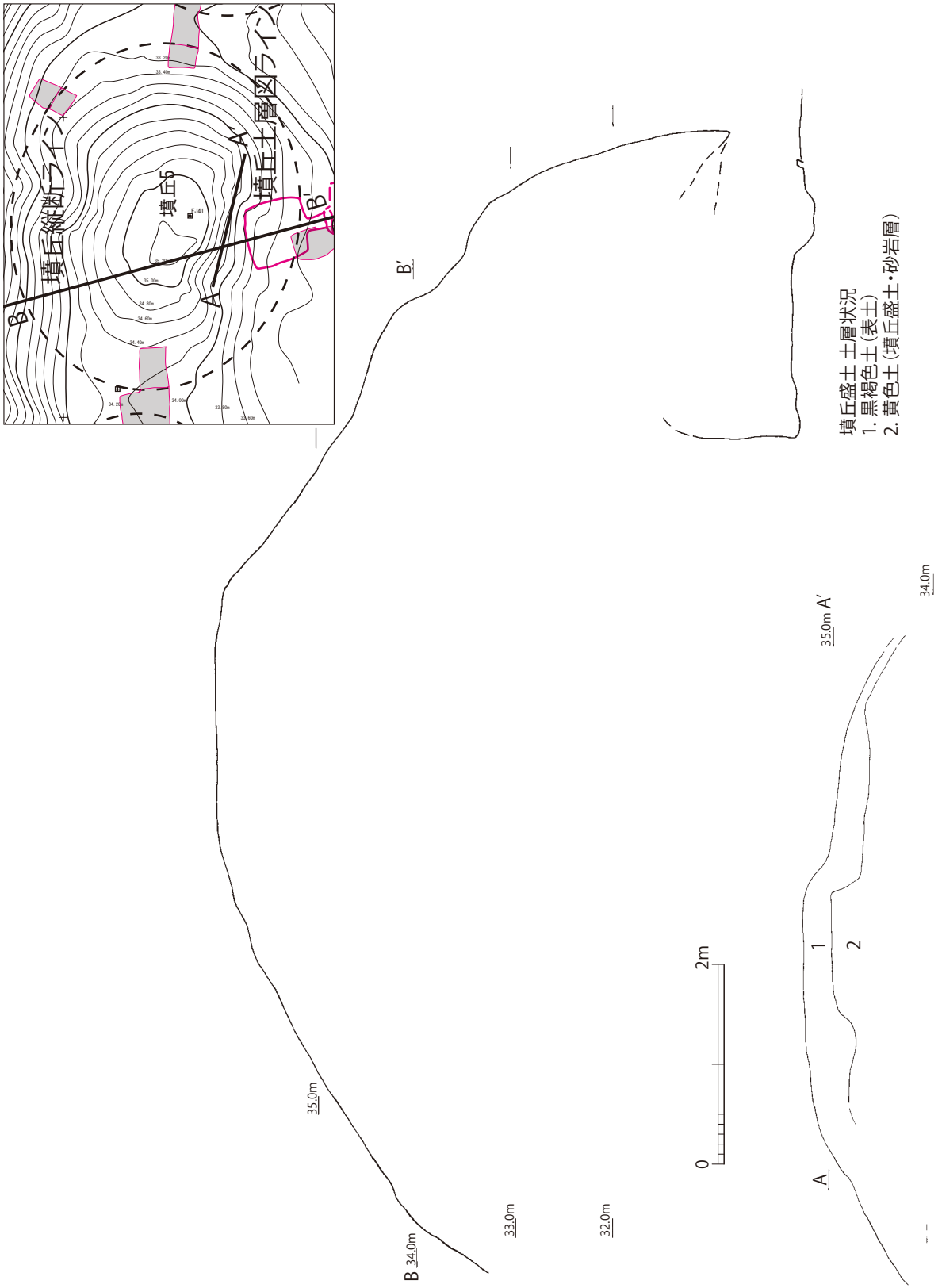
現地踏査、墳丘測量図から当初は前方後円墳の可能性も考えられた。また、周辺で円筒埴輪片が採集されたことから、墳丘の重要性を考慮し、墳丘確認のためトレンチ調査を行った。

トレンチの設定箇所は、北側の墳丘の裾部から南側の墳丘の頂部にかけてである。トレンチ番号は墳丘確認トレンチ 4 とし、幅 0.6m、長さ 7m の範囲である。北側の墳丘の裾部付近で地山と同質の土である 3 層を検出した。その前後は表層と同じ褐色土であるが、ややしまりがある。この北側の墳丘の裾部は溝状に低くなり、この低い部分からは円筒埴輪片が出土した。円筒埴輪は墳丘上から流れ落ちた可能性もある。溝状に地山が切れる部分には盛土はなく、地山成形面を確認したため、ここまでが墳丘の範囲であり、前方後円形の墳丘にはならないと判断するに至った。墳丘径は東西 13.4m、南北 16.6m である。一方、南側の墳丘では、頂部で地山の落ち込み部分を検出し、もう一つ墳丘が存在する可能性がある。後世の改変のため、現状で一つに見える墳丘は、二つの墳丘がつながったものとも思われるが、現時点では判断材料に欠ける。以上のことから、北側を墳丘 9、南側を墳丘 9’とした。円筒埴輪片は 9 号墳丘の東側のテラスや斜面下部でも表採しており、墳丘上に樹立された可能性もある。

Y181（第 25 図、図版 7 ～ 10）

墳丘 9 の主体部と考えられる。並列して主体部は未調査であるが Y109、110 が開口する。

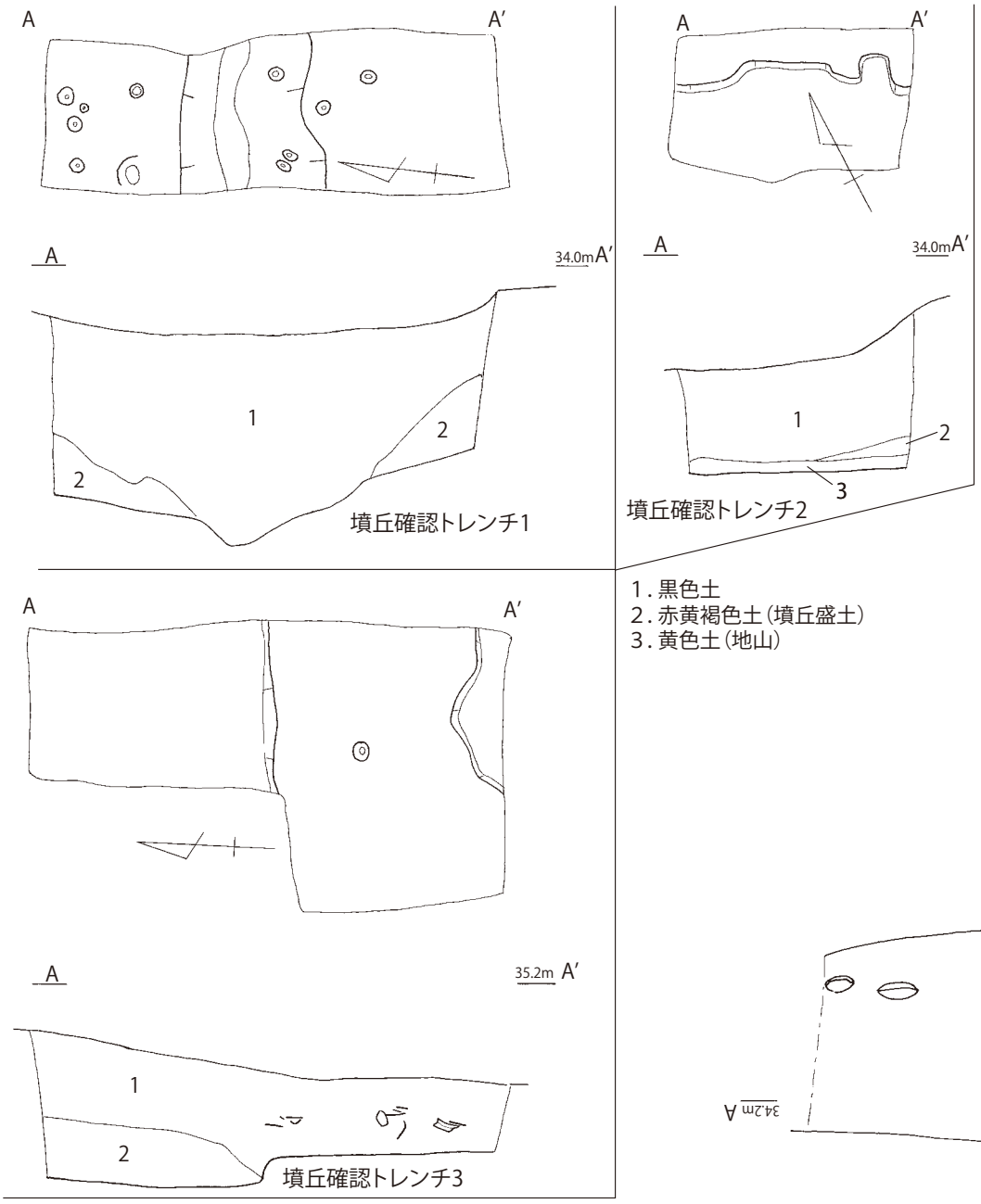
墓道部の状況確認の為、横穴墓入口部前面に東西方向のトレンチを設定し掘削を行った。結果、Y181、Y109 へ続く墓道と、Y181 墓道南側に Y111 を検出した。Y110 は南側の Y107 と同レベルに並ぶと考えられる。



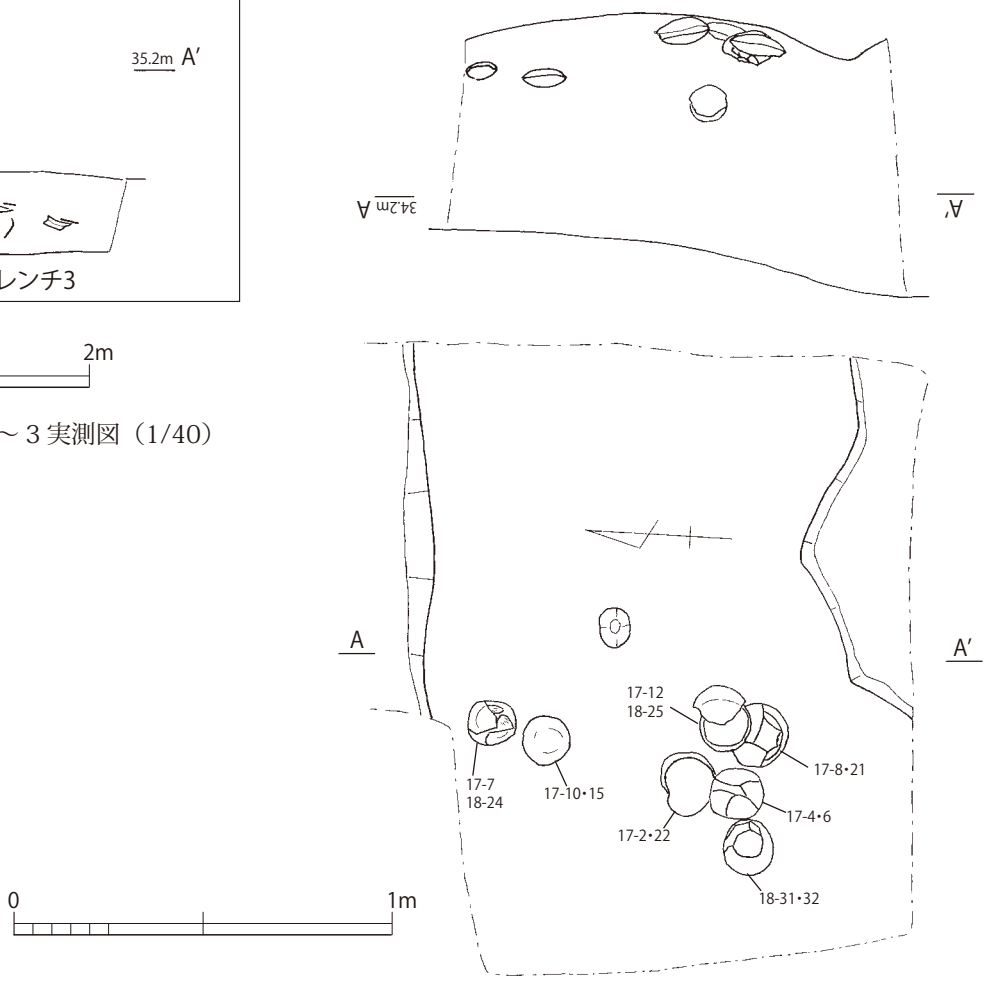
第 13 図　墳丘 5 縦断図・墳丘土層図（1/60）

墓道は、上端 1.6 ～ 2.1m、下端幅 1.0m ～ 1.8m、深さ 0.5m を測る。調査範囲内では長さ 2.1m 程度を検出し、玄室へ向かい階段状のテラスを設ける。Y181、109、110 前面はテラス状の広場が認められることから、墓道部を共有する横穴墓の可能性を考え、調査を行った。その結果、墓道を共有する状況は確認できず、一つの横穴墓に対し 1 本の墓道を持つ状況を確認した。

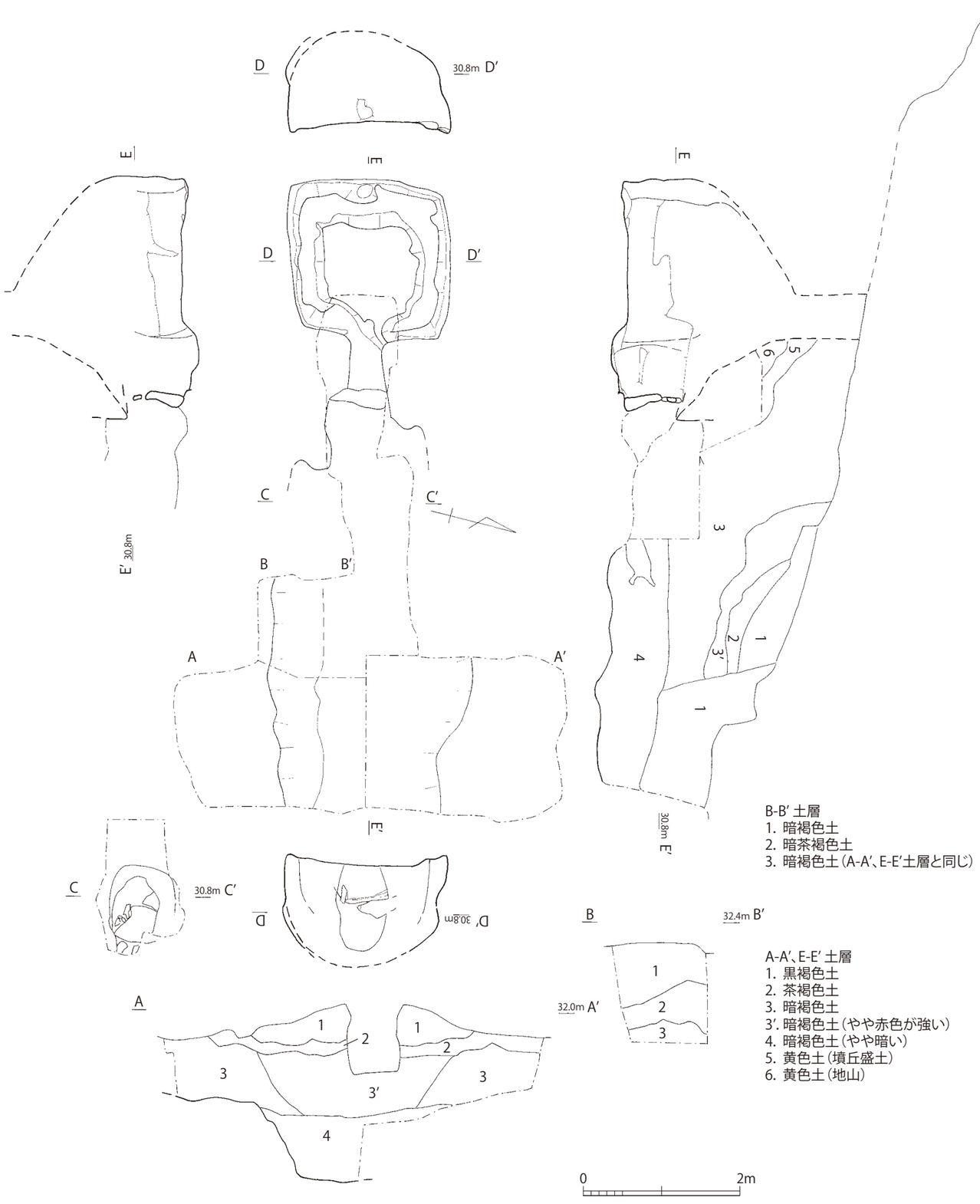
玄室は、後世の改変が著しいが現状で幅 2.44m、長さ 2.46m の方形のプランである。玄室の



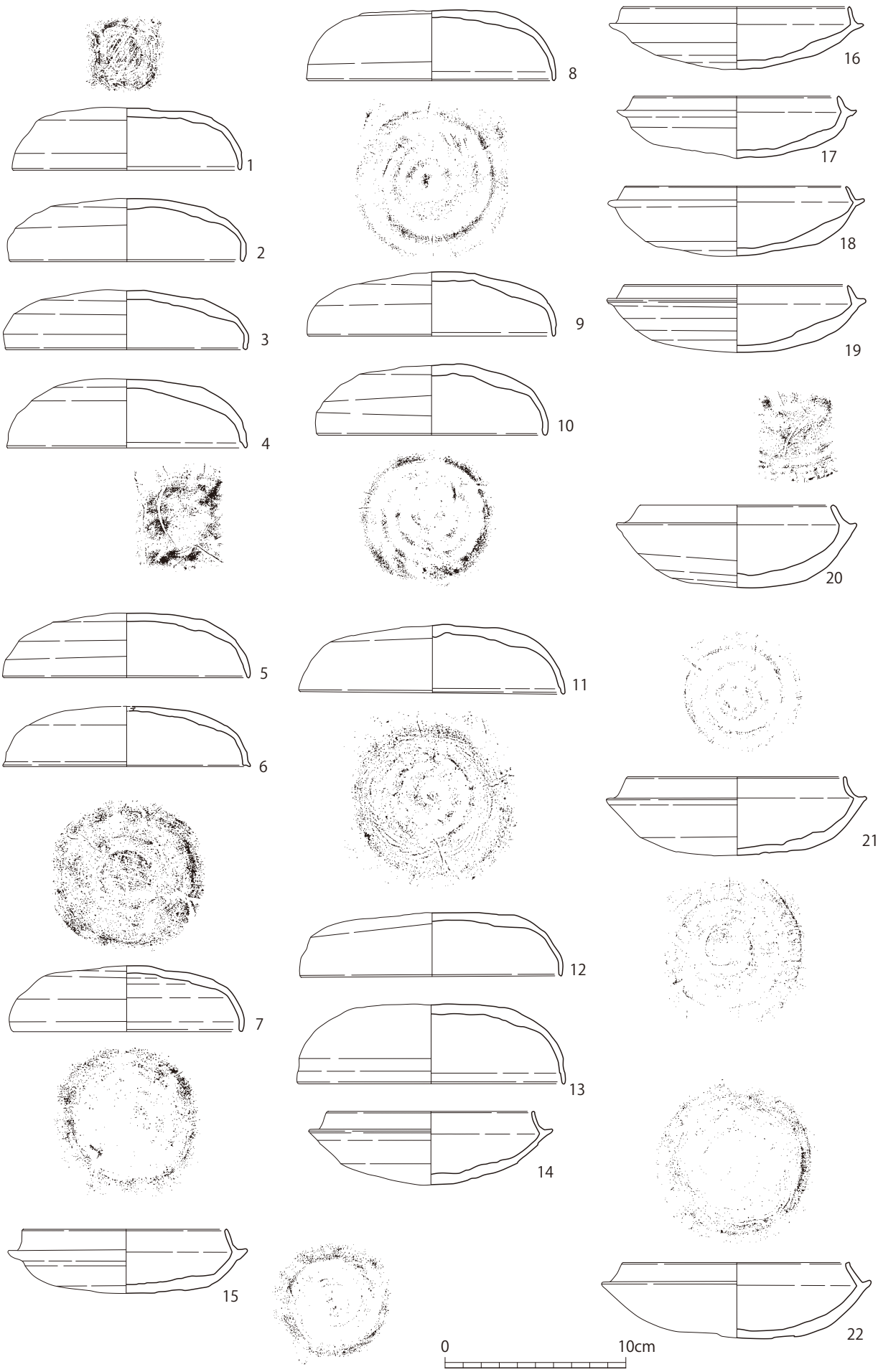
第 14 図　墳丘確認トレンチ 1 ～ 3 実測図（1/40）



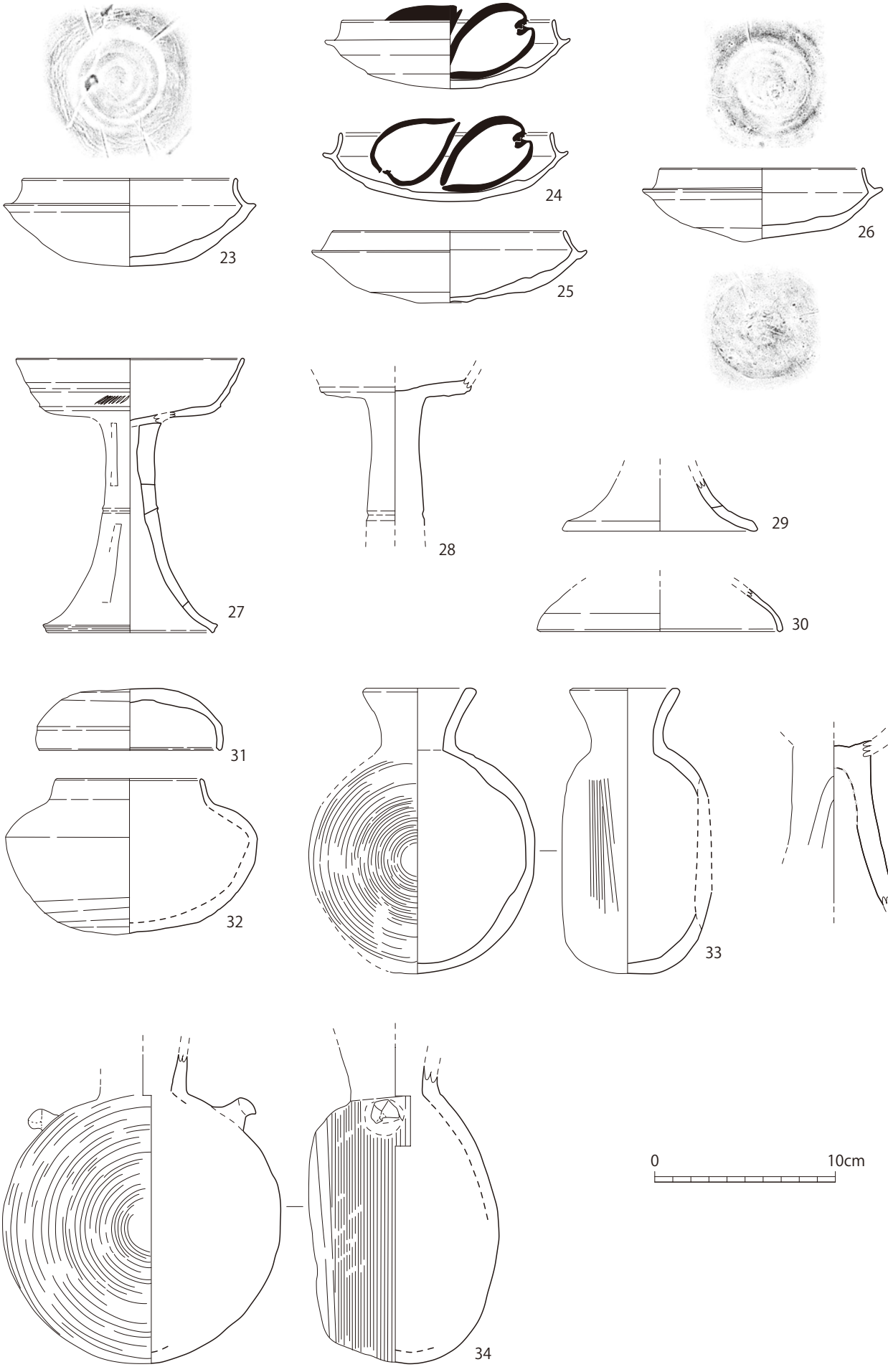
第 15 図　墳丘確認トレンチ 3 遺物出土状況（1/20）



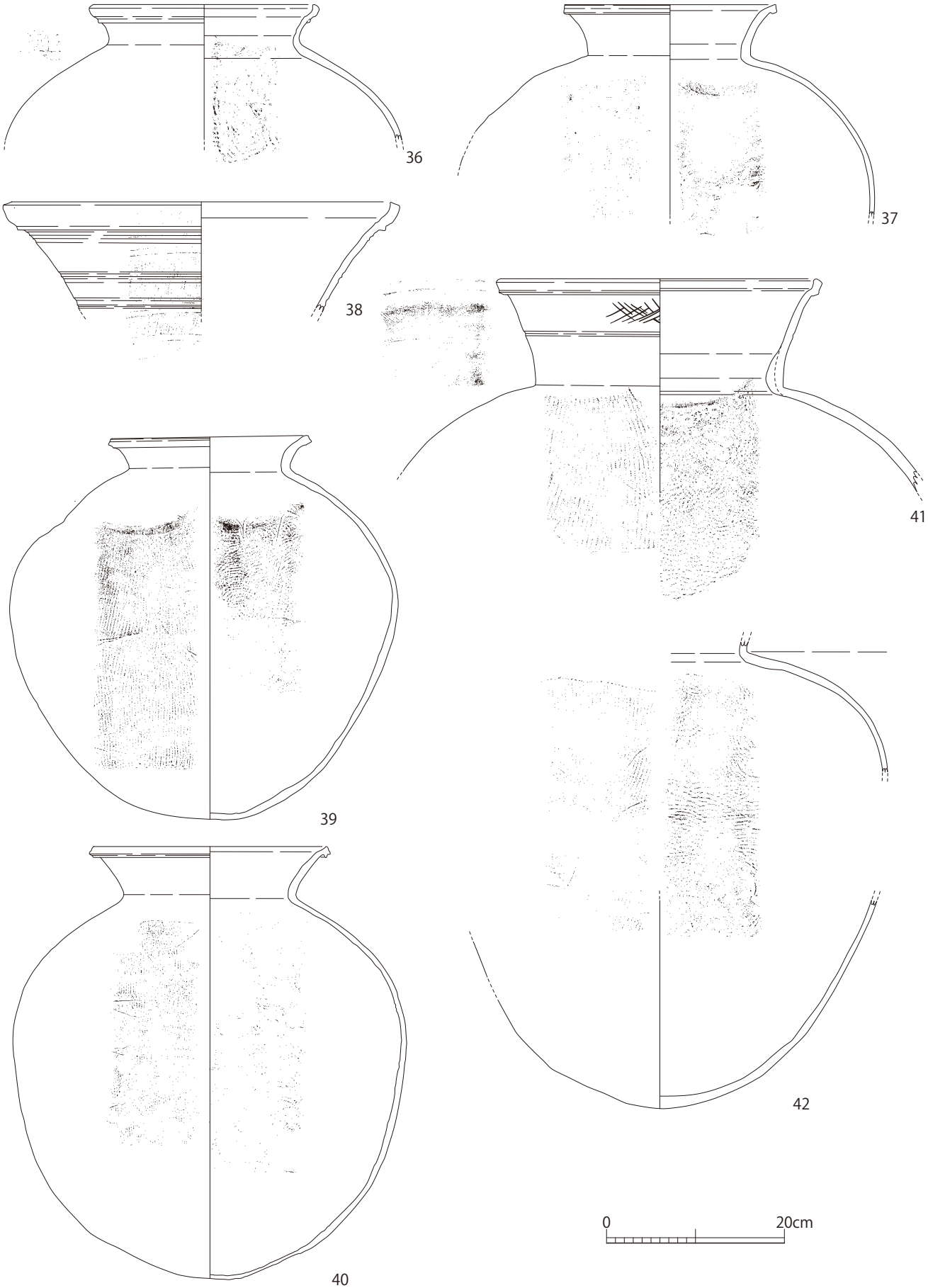
第 16 図　Y124 横穴墓実測図（1/60）



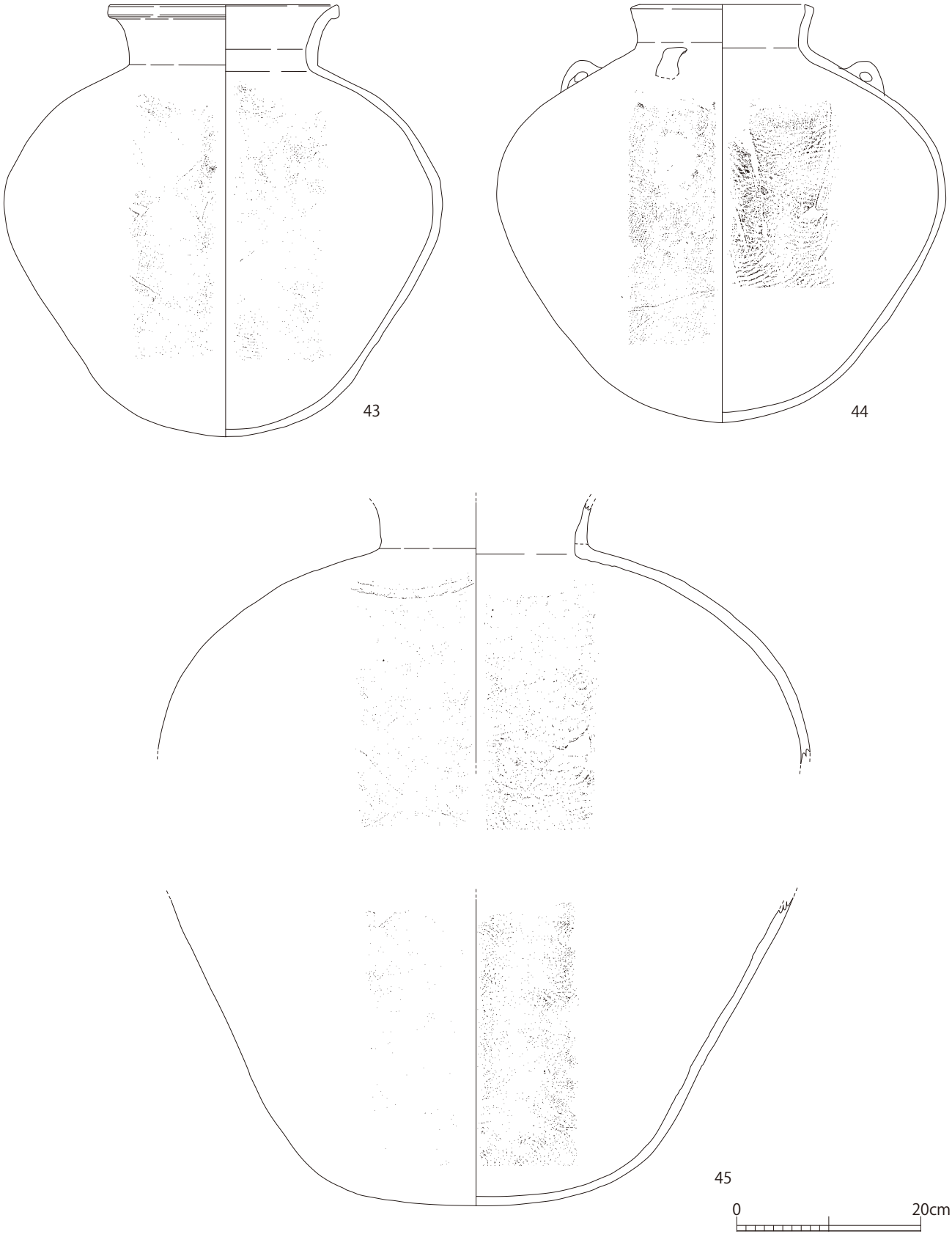
第 17 図　墳丘確認トレンチ 3 遺物実測図 1（1/3）



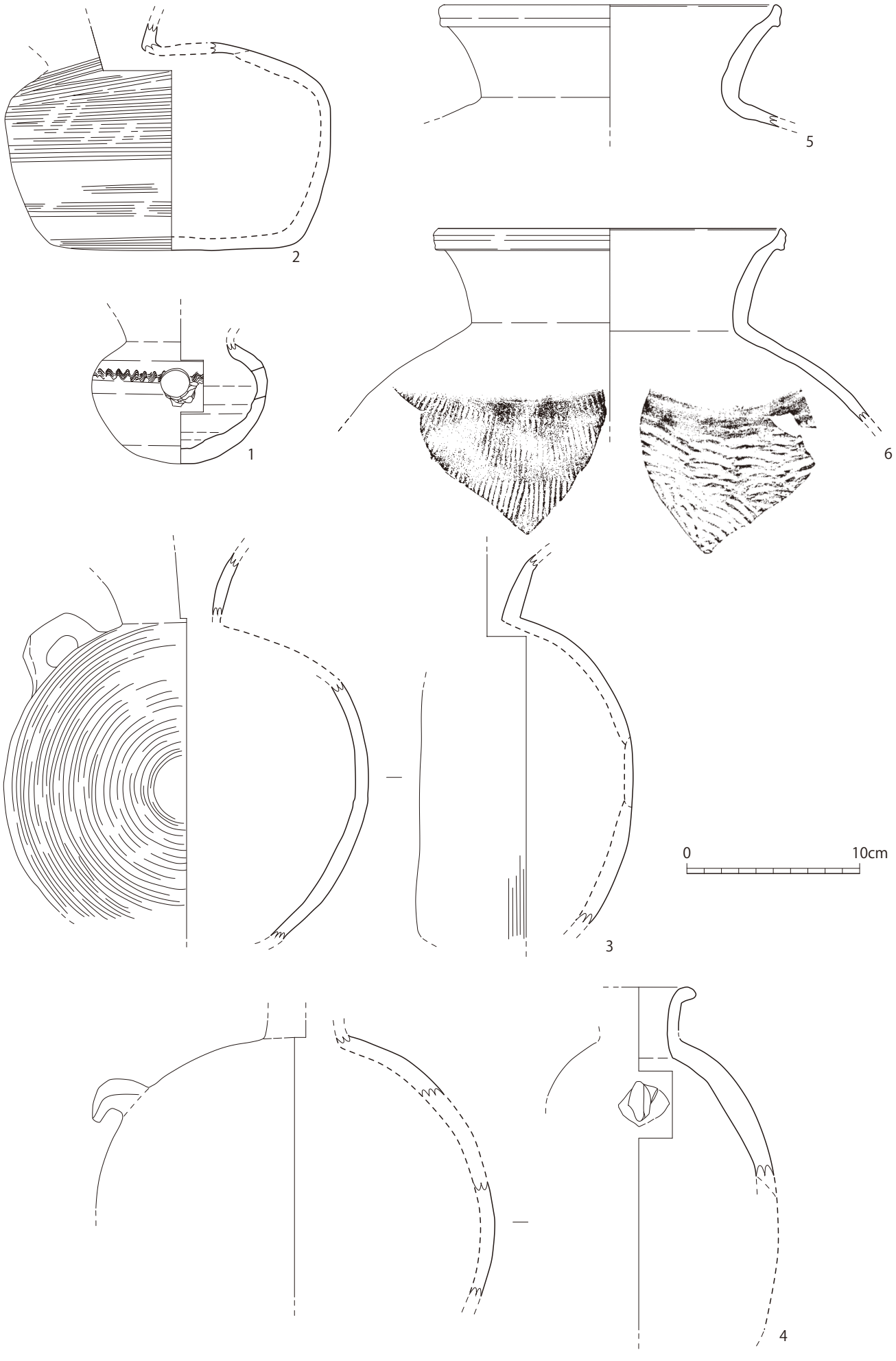
第 18 図　墳丘確認トレンチ 3 遺物実測図 2（1/3）



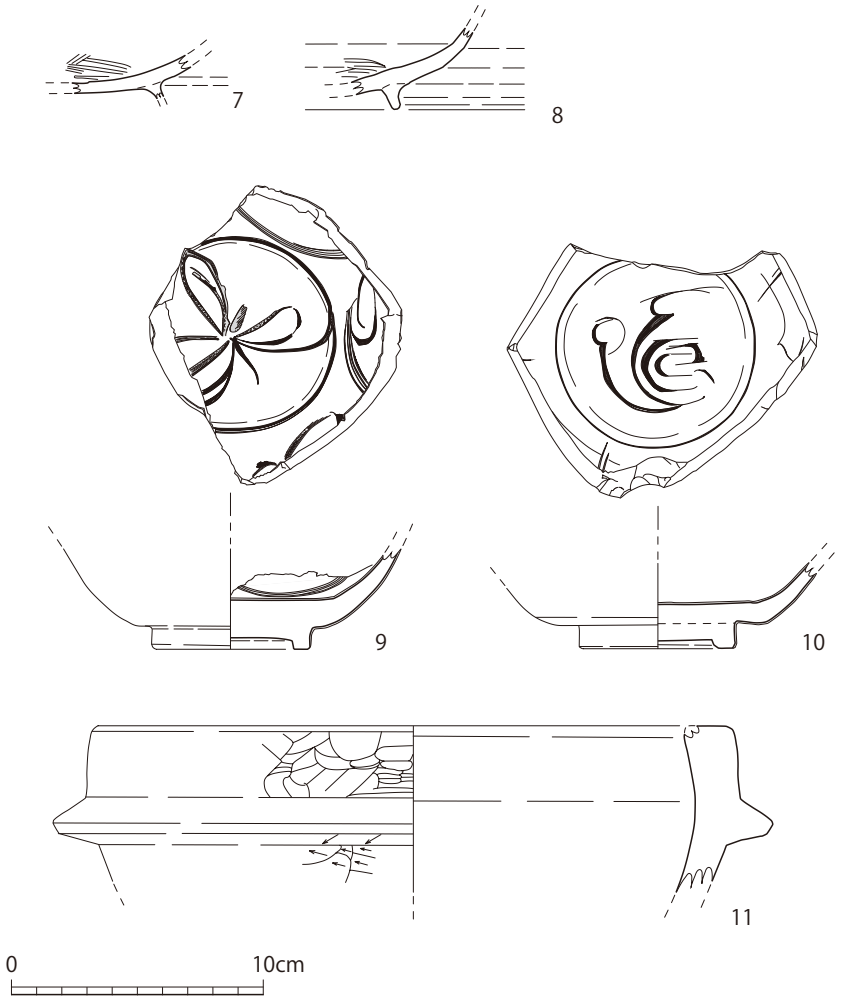
第 19 図　墳丘確認トレンチ 3 遺物実測図 3（1/6）



第 20 図　墳丘確認トレンチ 3 遺物実測図 4（1/6）



第 21 図　Y124 遺物実測図 1（1/3）



第 22 図　Y124 遺物実測図 2（1/3）

高さは、中央付近で 1.16m を測る。床面は玄門部へ向かい緩やかに傾斜する。羨道は玄門部で幅 1.39m、長さ 0.63m を測る。天井部、壁面共に軒先線等はなく天井部形態はドーム型である。玄室内から遺物は検出していない。主軸方位は N-66° -W であり、東向きに開口する。

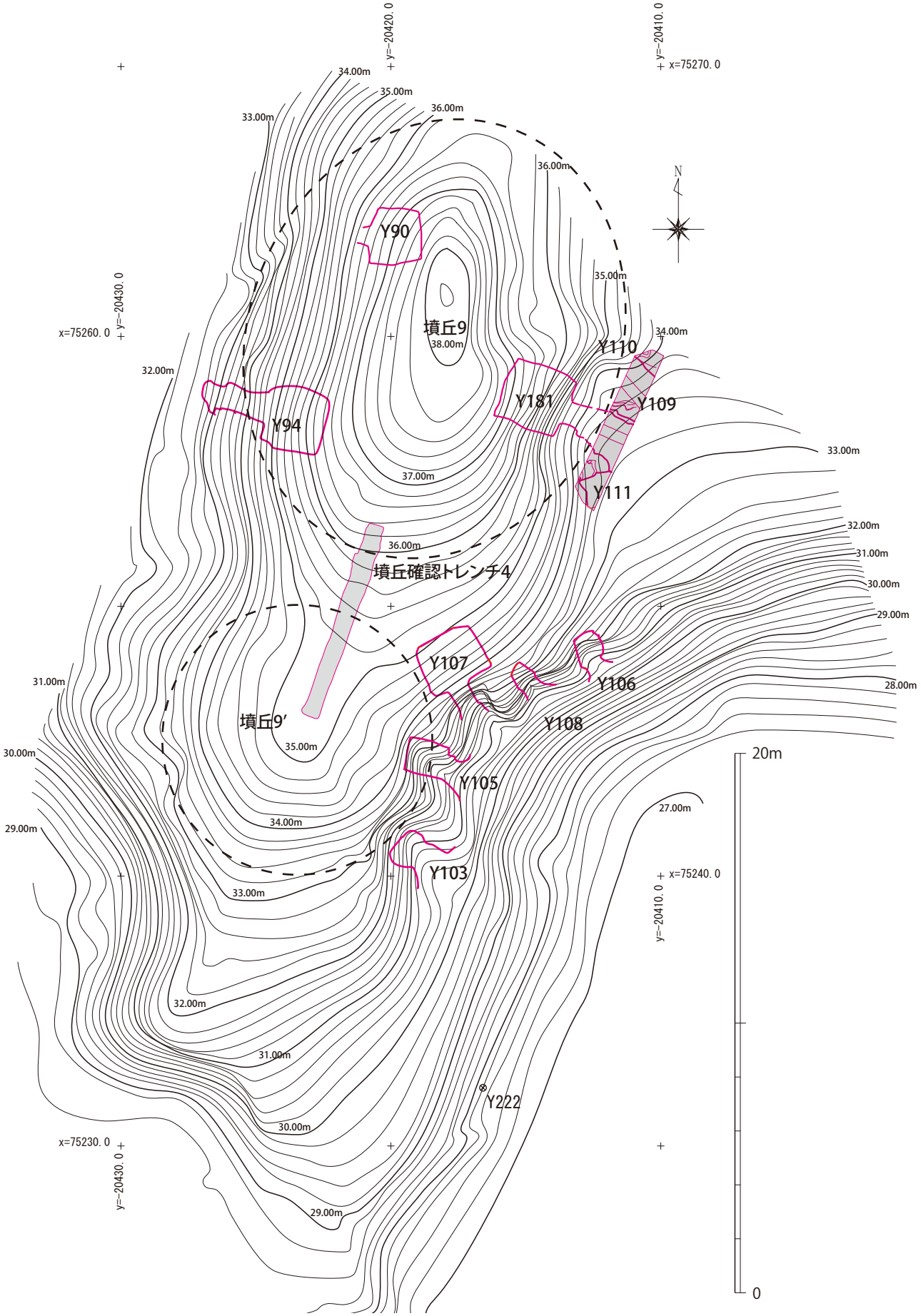
墓道の堆積状況については、縦断土層の 7、7' 層は中世の城郭にともなう盛土と考えられる。2、3 層は玄室内まで続くものの、玄室内が後世に改変されていることから、横穴墓開口後に流入したものと考えられる。以上のような状況から、6 層のみが 1 次堆積による埋土と考えられる。

遺物（第 26 図、図版 26）

1 ～ 10 は埴輪である。図化したもの以外も含め 40 点ほど出土しているが、器種が判明するものについては、すべて円筒埴輪である。外面は 2mm 程度の縦方向の粗いハケ目、内面はナデの痕跡が残る。特徴として底部より一段目突帯までの間隔が長い。

11、12 は隣接する Y110 の墓道で出土した。11 は須恵器の特殊器台と考えられる口縁部片である。外面は波状文、内面はカキメ調整を施す。特徴として口縁部は上部が平坦になり、穿孔が一箇所認められる。焼成前の穿孔と考えられ、何かを貼り付けた痕跡と思われ子持ちの特殊器台と考えられる。

12 は須恵器横瓶である。口径 10.9cm、胴部最大幅 34.1cm、胴部最大径 25.5cm を測る。頸部から口縁部にかけてはヨコナデ調整、外面は粗いカキメ調整を施す。

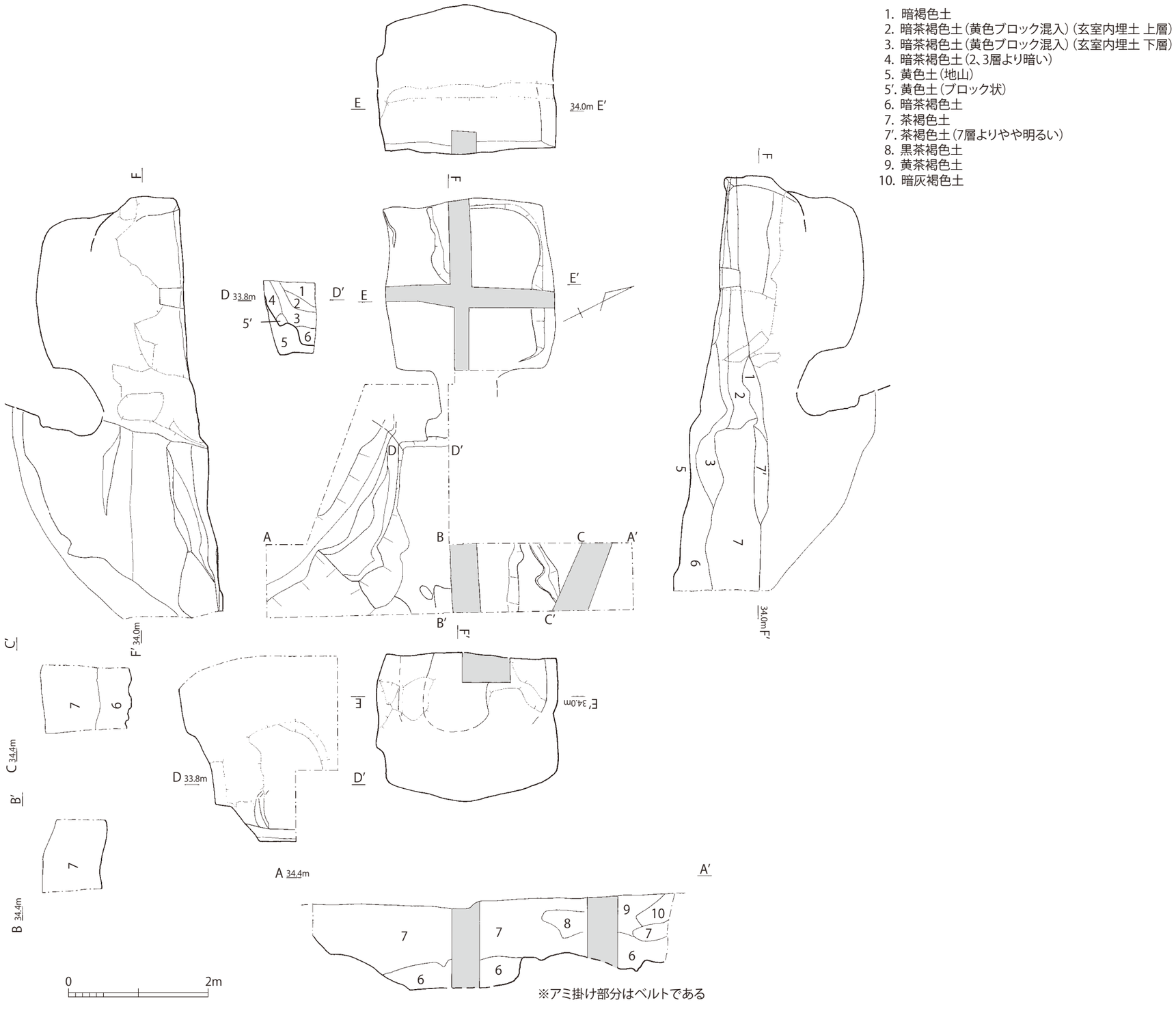


第 23 図　墳丘 9・9′ 実測図（1/200）





第 24 図　墳丘確認トレンチ 4（南から）・墳丘確認トレンチ 4 実測図（1/40）



第 25 図　Y181 横穴墓実測図（1/60）

5．横穴墓

Y3（第 9・30 図）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。羨門石組は無く、玄室は他の横穴に比べ不整形である。羨道はやや右寄りに接続する。玄室規模は最大幅 1.5m、長さ 1.5m のやや横長方形に近いプランであり、天井部形態はドーム形である。現状で玄室高 1.2m を測る。主軸方位は N-91° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 1.2m、長さ 0.4m である。

Y5（第 9・30 図）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室は幅 2.4m、長さ 2.4m の方形であり、天井部形態はドーム形である。現状で玄室高は 1.3m、羨道高 0.4m を測る。主軸方位は N-110° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 0.8m、長さ 0.8m を測る。

Y16（第 29・31 図）

玄室内は大半が崩落し埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室規模は幅 1.5m、長さ 1.1m の小形不整形の横穴墓である。現状で玄室高は 0.9m を測る。主軸方位は N-118° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 0.8m、長さ 0.4m を測る。

Y23（第 29・31 図）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室規模は玄室中央付近で幅 2.2m、長さ 1.6m のやや横長方形に近いプランであり、天井部形態はドーム形である。現状で玄室高は 0.7m を測る。主軸方位は N-89° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 0.8m、長さ 0.7m、羨道高 0.35m を測る。

Y25（第 28・29 図）

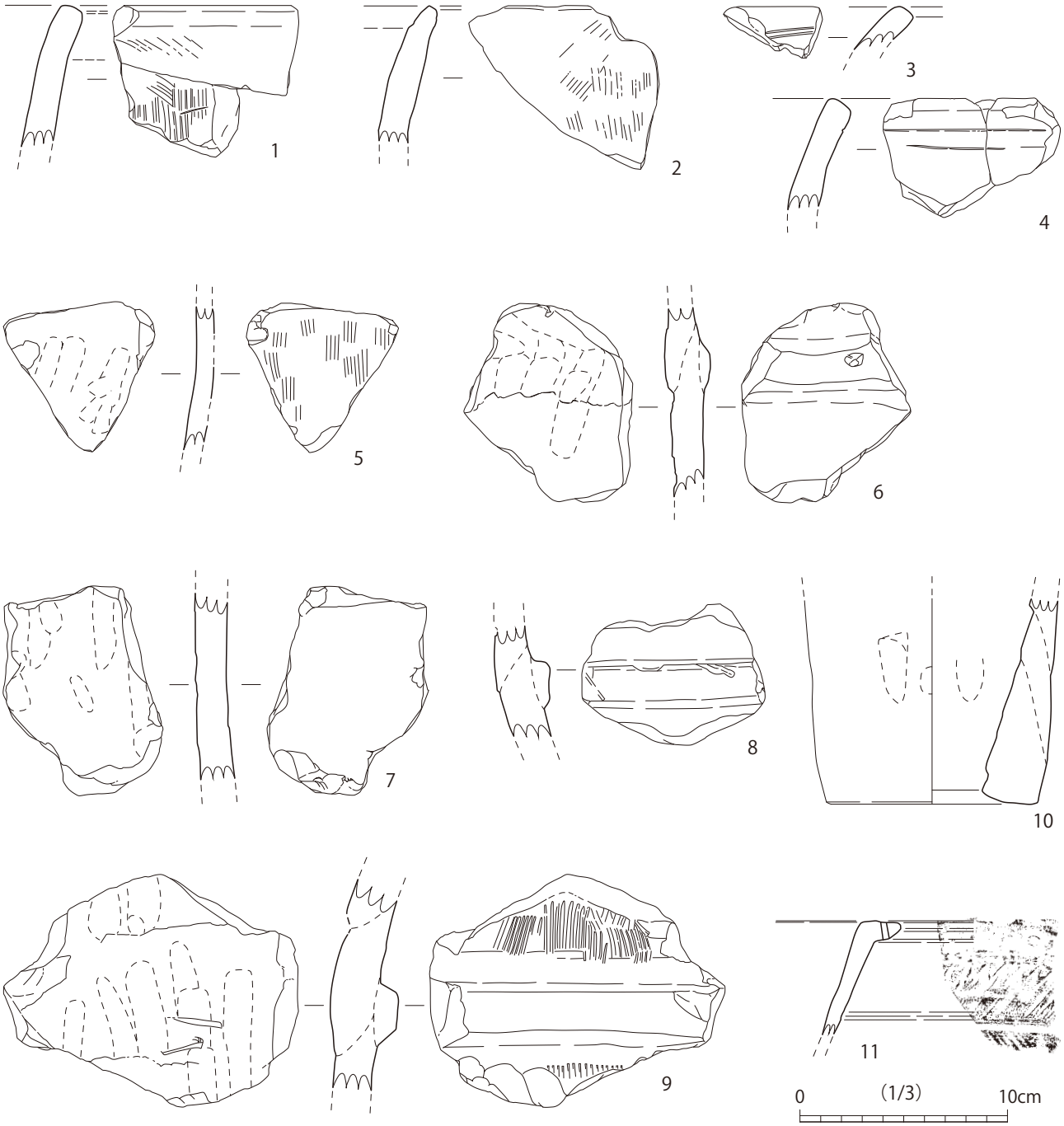
南側丘陵で確認した横方向の墓道を確認するため、墓道部のトレンチ調査を行った。結果、等高線に直行する墓道を検出した。南側丘陵で確認したように、墓道端は急激に落ちるため確認はできないが、等高線に平行な墓道とそれに接続し直行する横穴墓への墓道が推定される。墓道は最も深いところで深さ約 1.2m、幅は推定で墓道上端 1.0m、下端幅 0.8m であり、長さ 1.8m を検出している。主軸方位 N-79° -E であり、西向きに開口する。

墓道の堆積状況であるが、後世の堆積層あるいは中世の盛土と考えられる 1 層が厚く堆積する。2 層から下は遺物を包含し、2 層中には閉塞石が混入することから横穴墓に関係する埋土と考えられる。2 層は 1 層と同質であるが、3 層を切り込むことから追葬行為の痕跡とも捉えることができる。また、4 層を閉塞に充填した層と考えるなら、3 層も追葬の痕跡と捉えることもできる。墓道埋土の状況からは、少なくとも 2 回、多くて 3 回の埋葬行為が想定される。

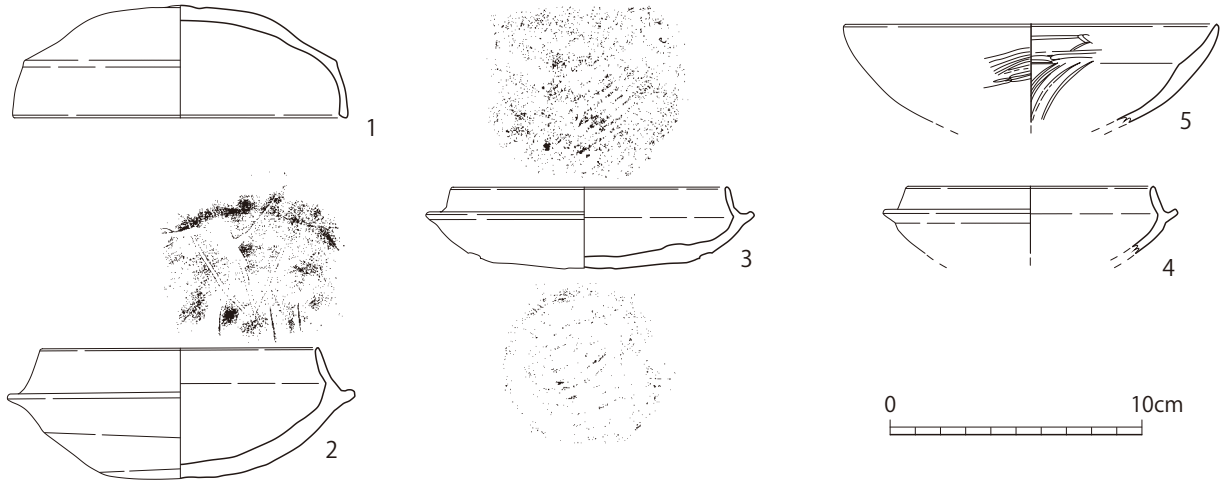
墓道床面で須恵器坏身を検出している。

遺物（第 27 図、図版 26）

1 は須恵器坏蓋である。復元口径 13.2cm、残存高 4.5cm を測る。焼成は甘いが天井部と口縁部



第 26 図　Y181・墳丘 9 出土遺物実測図（1/3・1/4）



第 27 図　Y25 出土遺物実測図（1/3）

の境には段がある。口縁端部には段は見られないものの丁寧なつくりである。天井部は回転ヘラ削りを施す。焼成は不良であり、内面、外面ともに黄灰色を呈する。

2、3、4 は須恵器の坏身である。2、3 ともに口径 11cm 程度、2 は受部径 14cm、3 は 13cm 程度である。4 は口径が 10cm 程度であり若干小さい。2 は底部内面にヘラ記号を施し、底部外面は体部の 2/3 程まで回転ヘラ削りを施す。焼成は不良であり、赤褐色を呈する。3 は底部内面に当て具の痕跡、外面にはタタキ状の圧痕が残る。

5 は土師器埦である。焼成は良好であり、暗橙褐色を呈する。外面から口縁部内面にかけてミガキ、内面下部は暗文による調整を施す。

Y33（第 29・31 図）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室規模は中央付近で幅 2.0m、長さ 1.8m のやや横長方形の横穴である。現状で玄室高 0.2m を測る。主軸方位は N-99° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 1.1m、長さ 1.2m、羨道高 0.4m を測る。

Y35（第 29・31 図）

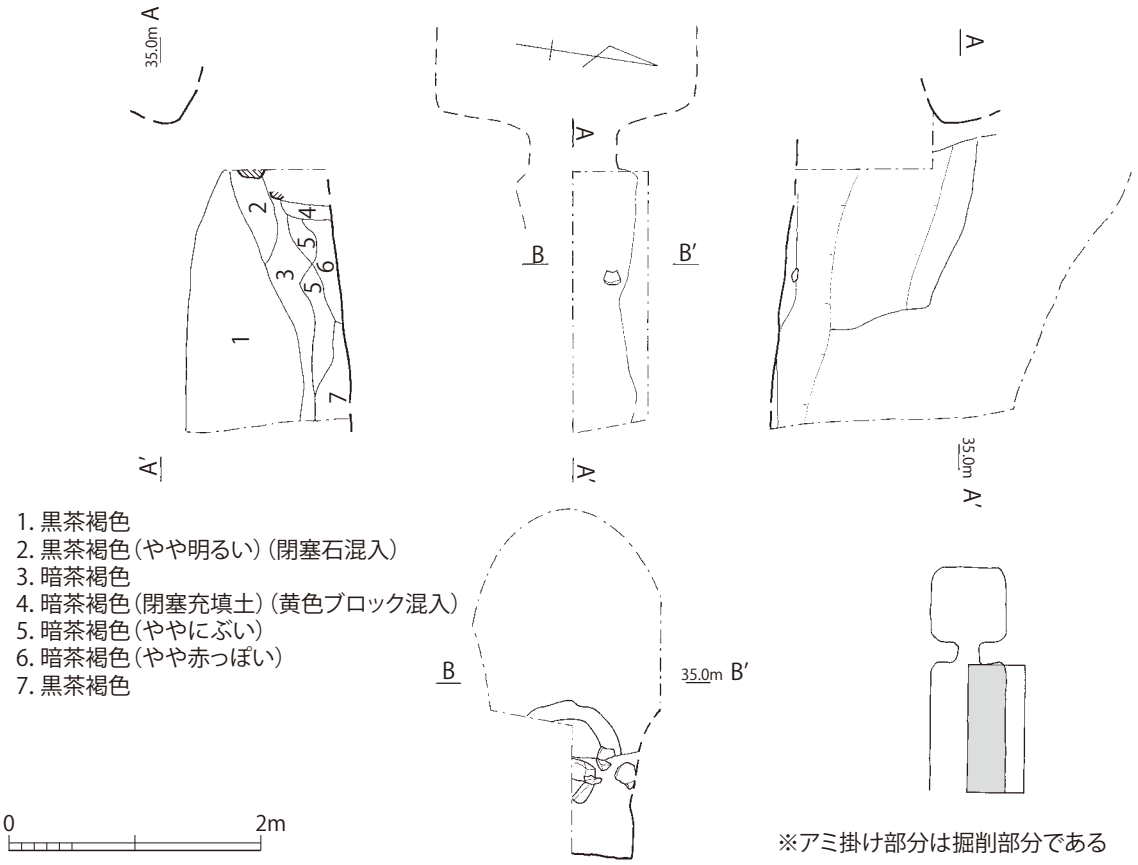
玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室規模は奥壁付近で幅 1.7m、長さ 0.6m を測り、不整形の袋状の横穴である。現状で玄室高 0.2m を測る。主軸方位は N-93° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 1.1m、長さ 1.0m、羨道高 0.4m を測る。

Y40（第 32・34 図）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室規模は奥壁付近で幅 1.9m、長さ 1.8m のやや横長方形の横穴である。現状で玄室高は 0.7m を測る。玄室左袖は不明瞭である。主軸方位は N-93° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 1.5m、長さ 1.0m、羨道高 0.5m を測る。

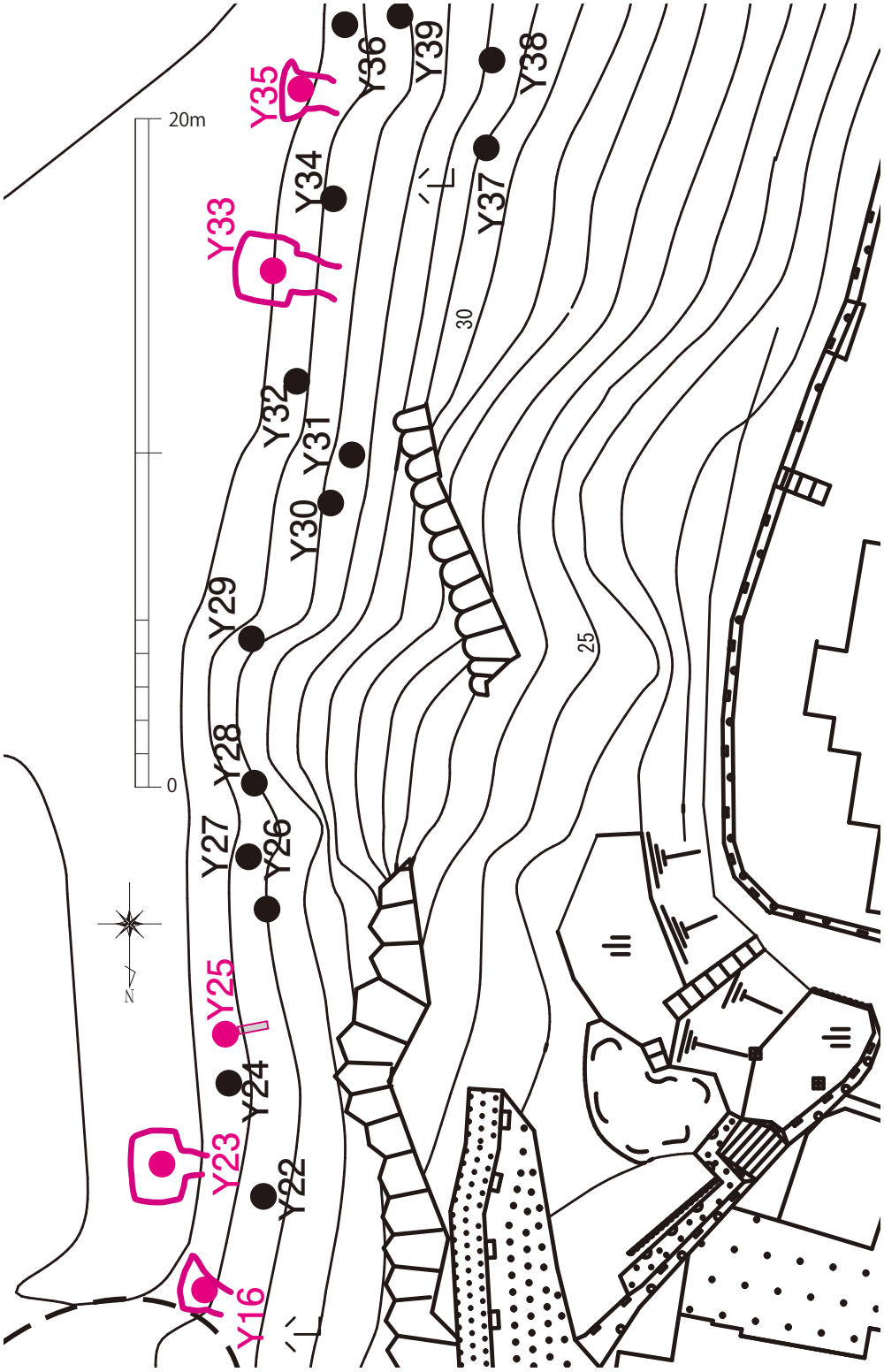
Y41（第 32・33 図、図版 10）

南側丘陵で確認した横方向の墓道を確認するため、墓道部のトレンチ調査を行った。結果、等高



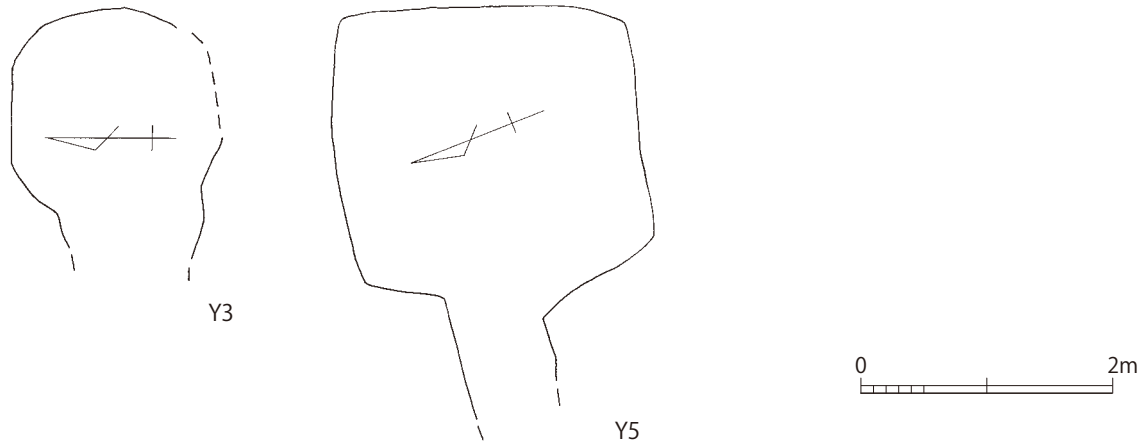


第 28 図　Y25 墓道接続状況実測図（1/60）・Y25 墓道接続状況（東から）

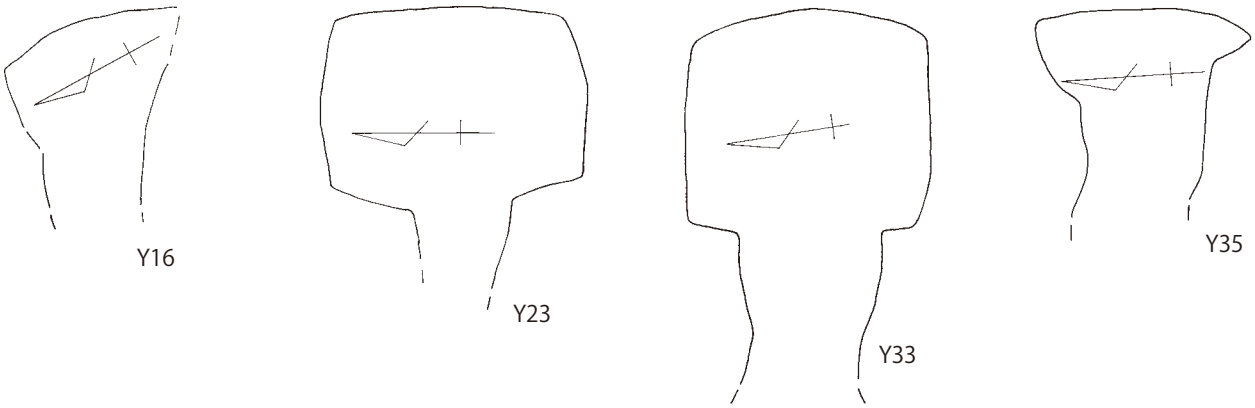


第 29 図　Y16・23・25・33・35 位置図（1/200）

線に直行する墓道を検出した。南側丘陵で確認したように、墓道端は急激に落ちる為確認はできなかったが、等高線に平行な墓道と接続する横穴墓への墓道が推定される。墓道は最も深いところで深さ 1.2m、幅は下端で 2.5m であり、長さ 1.75m ほど検出している。墓道端は一段下がる様子が確認でき、横方向の墓道へ接続する可能性がある。



第 30 図　Y3・5 平面図（1/60）



第 31 図　Y16・23・33・35 平面図（1/60）

墓道の堆積状況については、Y25 同様に 1 層が厚く堆積する。2 層は 1 層の堆積前に混入した堆積であろう。その下 3、4、5 層はほぼ同質であるが、崩落した砂岩塊のため玄室入口部への接続状況は明確にはできなかった。4 、5 層は不規則に堆積し、3 層と共に後世に堆積した層であろう。

玄室内は大半が埋没しており、進入が可能なため略測のみ行った。玄室には軒先線の表現が見られる。羨門石組が見られ、床面から石積みを行うのではなく、下部は地山整形を行い石材を積み上げている。石材は小型で、最前面の庇石は地山の砂岩を使用している。

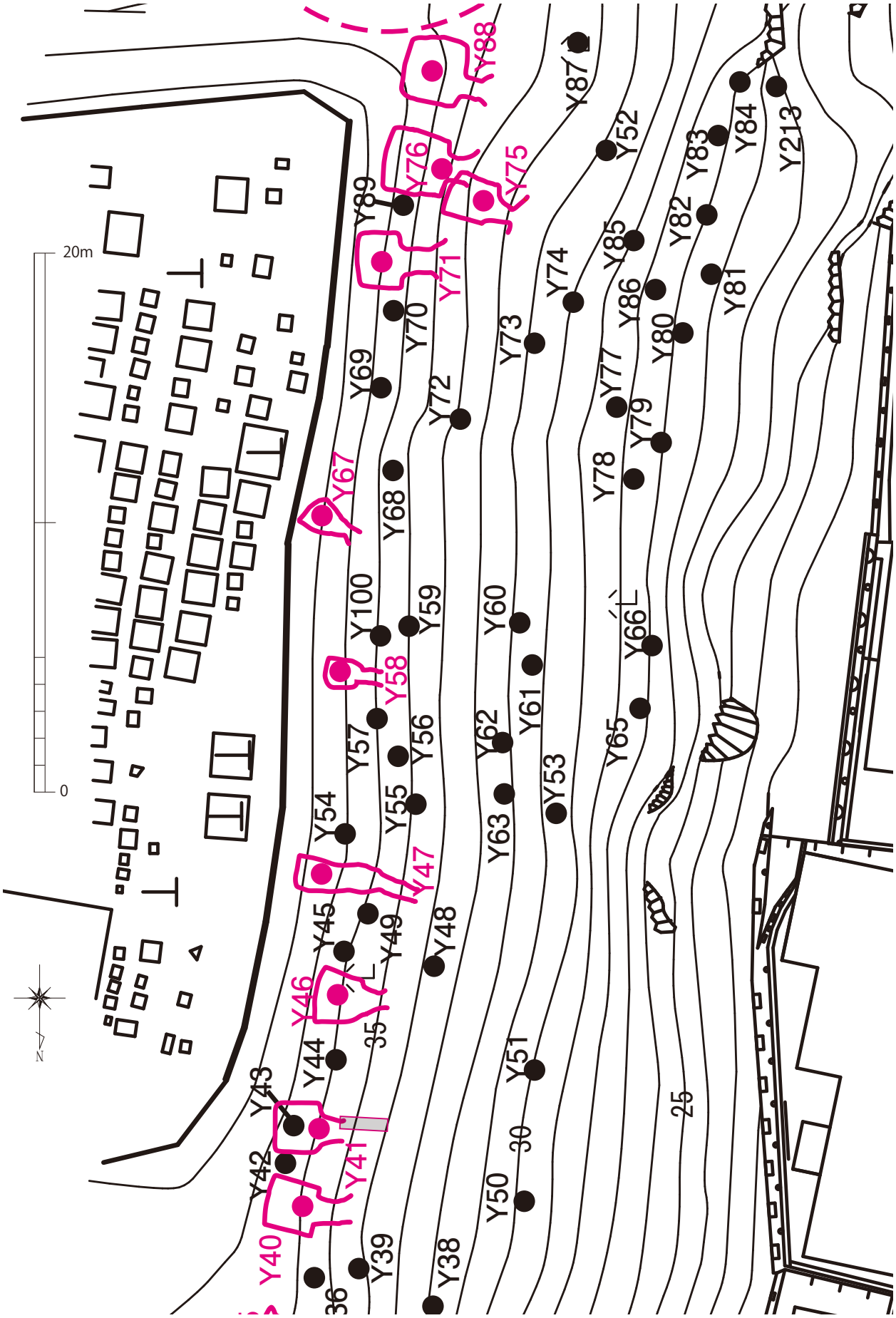
玄室規模は中央付近で幅 1.8m、長さ 1.7m のほぼ方形の横穴である。現状で玄室高 0.6m、羨道高 0.5m を測る。主軸方位 N-93° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 1.2m、長さ 0.7m を測る。

墓道埋土より、糸切り底の土師器皿、瓦器埦等を検出している。

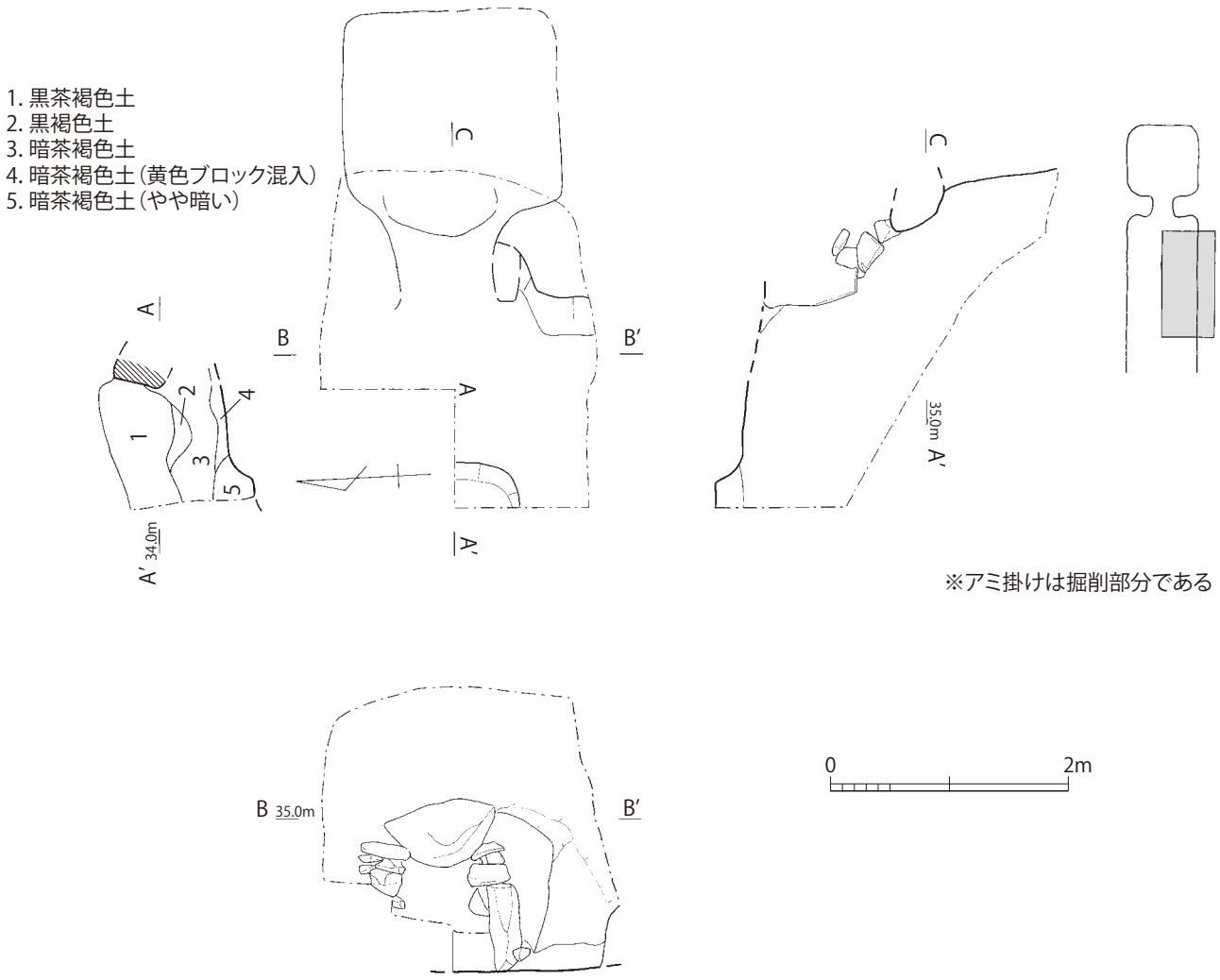
遺物（第 35 図、図版 26・27）

1、2 は須恵器坏蓋である。1 の天井部外面は回転ヘラ削り、口縁内外はヨコナデ、内面底部にかけてナデ調整を施す。焼成は良好であり、内外面ともに暗灰色を呈する。胎土は粗い。内面底部に 2 条の直線のヘラ記号を施す。2 の調整は不明瞭である。焼成はやや不良であり、内外ともに黄灰色を呈する。 1 mm 大の砂粒が目立ち、胎土は粗い。

3 ～ 6 は土師器埦の口縁である。復元口径 14 ～ 15cm 後半の幅に収まり、残存部分の調整はヨコナデを施す。3 の胎土はやや粗いものの、焼成は良好である。



第 32 図　Y40・41・46・47・58・67・71・75・76・88 位置図（1/200）



第 33 図　Y41 墓道接続状況実測図（1/60）

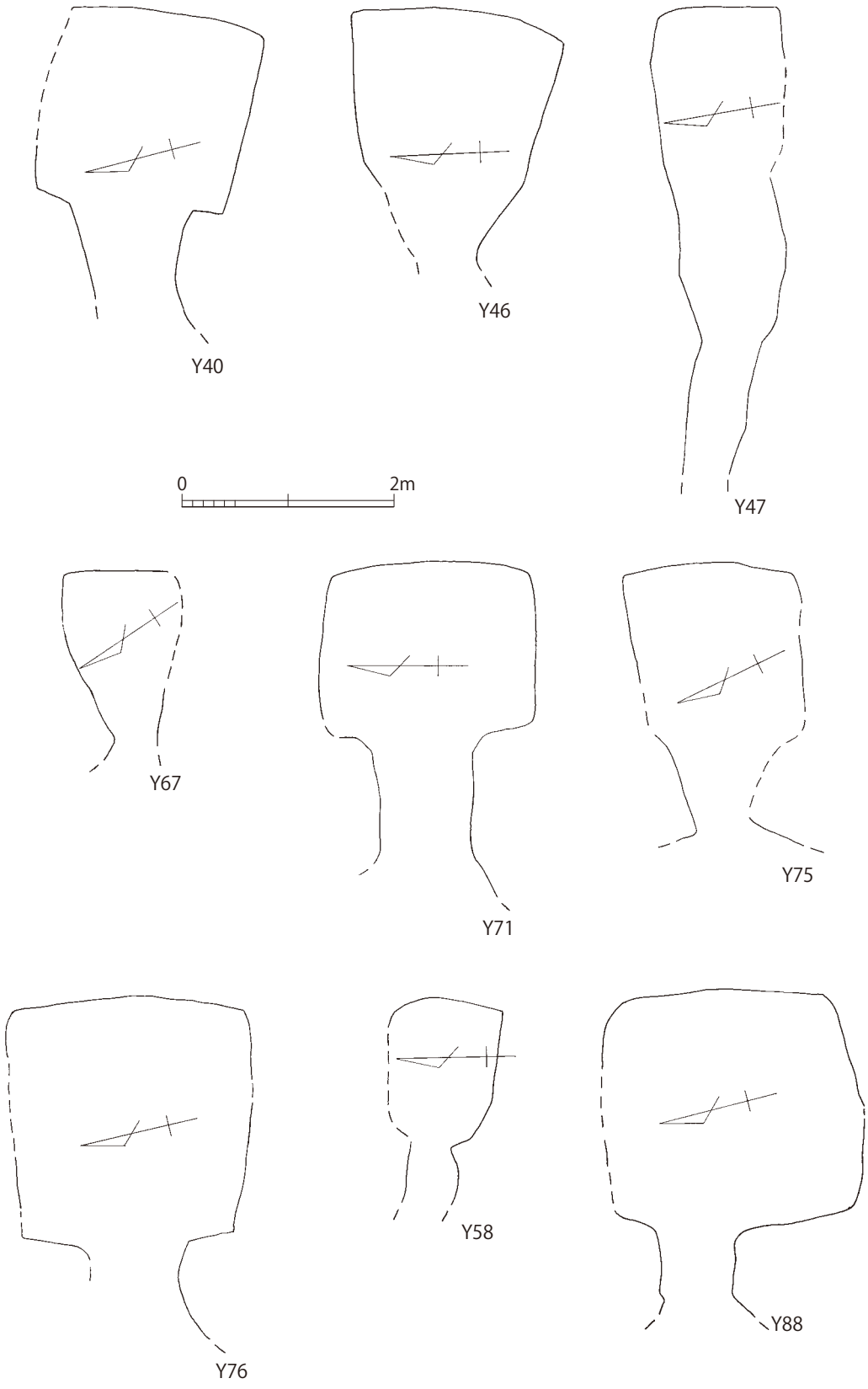
7 ～ 18 は土師器皿である。全体的に焼成はよく、胎土も精良である。口径は 7cm 台、8cm 台、9cm 台のものがある。17 は内面に黒い有機物が付着している。調整は不明瞭なものもあるが内外面ともにヨコナデ、ナデ調整が主体であり、底部は糸切りがほとんどである。

19 ～ 22 は瓦器である。19、20 は口縁部片である。復元口径は 19 は 15.6cm、20 は 18.4cm を測る。外面の口縁下部にはミガキ調整が見られ、ほかはヨコナデ調整を施す。焼成はともによく、胎土はやや粗い。21、22 は底部片である。復元高台径は、22 は 6.8cm を測る。ともに高台は貼り付けを行い、その後ナデ調整を行う。焼成はともによく、胎土はやや粗い。

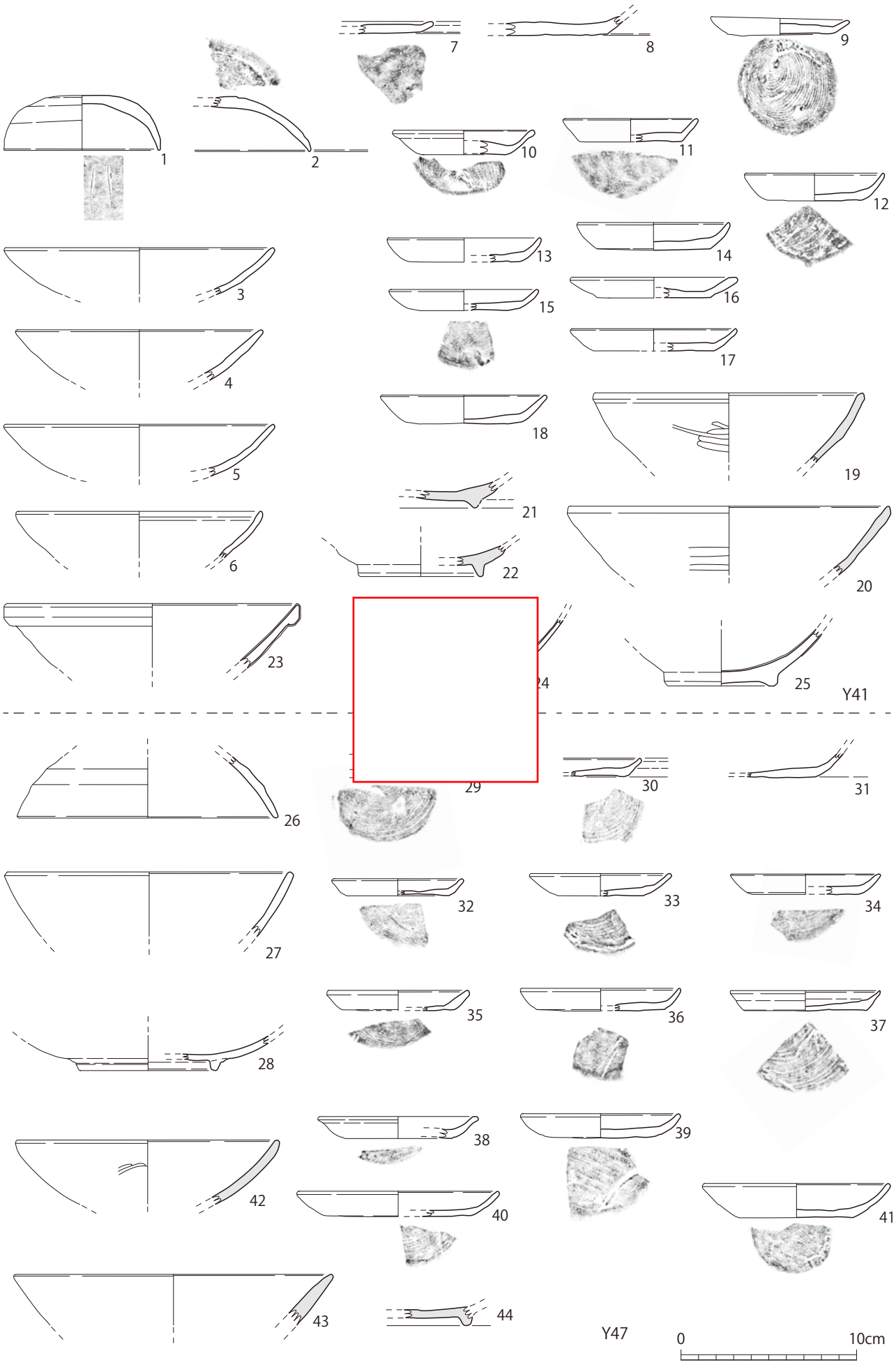
23 ～ 25 は白磁である。23 は口縁部片、24、25 は高台部分である。いづれも薄い緑の釉がかかる。23 は口縁端部が玉縁状となる。24、25 の見込部分には、円形の圏線を施す。

Y46（第 32・34 図、図版 10）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室規模は奥壁付近で幅 2.0m、長さ 2.4m で、玄門部にかけて幅を減じる逆台形状の平面である。現状で玄室高は 0.7m を測る。玄室右袖は不明瞭である。主軸方位は N-93° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 0.6m、長さ 0.3m、羨道高 0.6m を測る。



第 34 図　Y40・46・47・58・67・71・75・76・88 平面図（1/60）



第 35 図　Y41・47 出土遺物実測図（1/3）

羨門部に横長の石材が残存し、比較的厚みがある石材である。閉塞、庇石両方の可能性がある。

Y47（第 32・34 図）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室規模は中央付近で幅 1.2m、長さ 1.6m のやや縦長方形の横穴である。現状で玄室高は約 0.5m を測る。玄室袖は不明瞭である。天井部はアーチ形になる。主軸方位は N-100° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 1.0m、長さ 1.6m、羨道高 0.4m を測る。

遺物（第 35 図、図版 27）

26 は須恵器坏蓋である。復元口径 14.8cm を測る。残存部分ではヨコナデ調整を施す。焼成は不良であり、黄灰褐色を呈する。胎土は精良である。

27、28 は土師器埦である。27 は復元口径 16.3cm を測る。外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整を施す。焼成は良好であり、暗橙褐色を呈する。胎土は精良である。28 は底部片である。復元高台径は 7.8cm を測る。高台は貼り付け後ナデ調整を行う。焼成はよく、胎土は精良である。

29 ～ 41 は土師器皿である。全体的に焼成はよく、胎土も精良である。口径は 7cm 台、8cm 台、9cm 台のものがある。調整は不明瞭なものもあるが内外面ともにヨコナデ、ナデ調整が主体であり、底部は糸切がほとんどである。

42 ～ 44 は瓦器である。42、43 は口縁部片である。復元口径は 42 が 15.0cm、43 が 18.2cm を測る。焼成はともによく、胎土は精良である。44 は底部片である。高台は貼り付け後ナデ調整を行う。焼成はよく、胎土は精良である。

Y58（第 32・34 図）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室規模は中央付近で幅 1.0m、長さ 1.4m のやや縦長方形の横穴である。現状で玄室高は 0.2m を測る。玄室左袖は不明瞭である。主軸方位は N-93° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 0.4m、長さ 0.6m、羨道高 0.4m を測る。

Y67（第 32・34 図）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室規模は中央付近で幅 1.1m、長さ 1.1m のやや横に長い不整形の横穴である。現状で玄室高は 0.5m を測る。主軸方位は N-124.5° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部に向かい幅を減じる。平面形は逆台形であり、玄門部で幅 0.7m、長さ 0.7m、羨道高 0.6m を測る。

Y71（第 32・34 図）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室規模は中央付近で幅 2.0m、長さ 1.7m の横長方形の横穴である。現状で玄室高は 0.7m を測る。主軸方位は N-90° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 1.3m、長さ 1.2m、羨道高 0.6m を測る。

Y75（第 32・34 図）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室規模は中央付近で幅 1.6m、長さ 1.7m のやや縦長方形の横穴である。現状で玄室高は 0.8m を測る。天井部はドーム形である。主軸方位は N-115° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 1.2m、長さ 0.7m、羨道高 0.6m を測る。

Y76（第 32・34 図）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室規模は奥壁付近で幅 2.3m、長さ 2.4m の方形の横穴である。現状で玄室高は 1.0m を測る。天井部はドーム形である。主軸方位は N-102° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 1.0m、長さ 0.6m を測る。

Y88（第 32・34 図、図版 11）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室規模は中央付近で幅 2.5m、長さ 2.3m の方形の横穴である。現状で玄室高は 1.0m を測る。天井部はドーム形である。主軸方位は N-104.5° -E であり、西向きに開口する。羨道は玄門部で幅 0.8m、長さ 0.6m、羨道高 0.6m を測る。羨道は左側壁側に偏る。

遺物（第 36 図、図版 27）

1 は鉄鏃である。残存長 7.4cm を測る。方頭類の鉄鏃と考えられるが刃がないため、儀礼用の鉄鏃の可能性も考えられる。

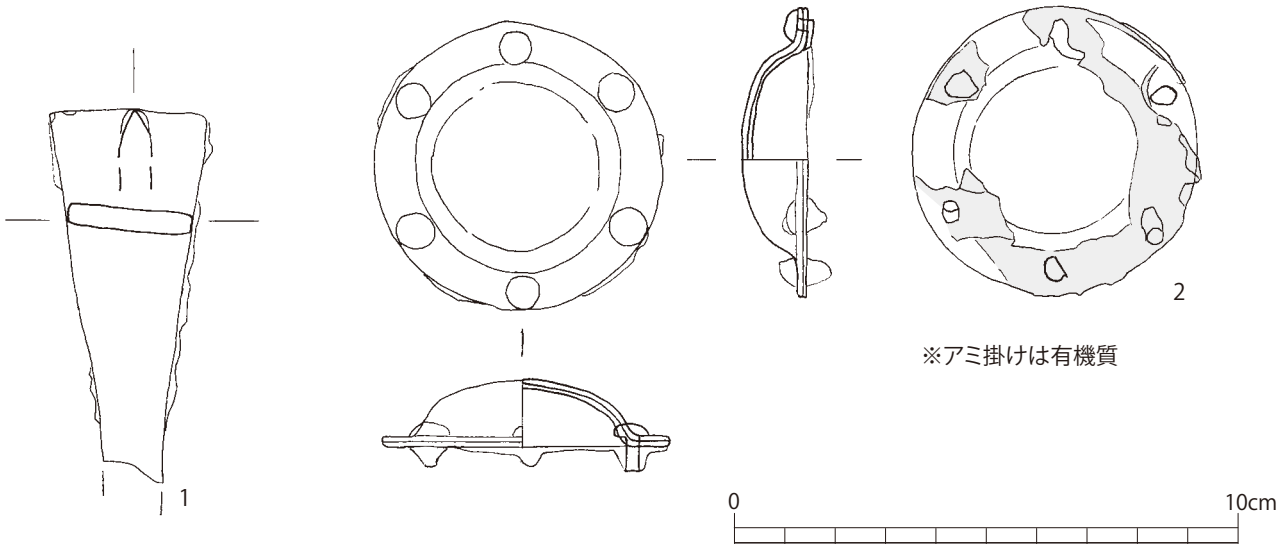
2 は羨門部の石組から検出した無脚の雲珠である。裏面には有機質が残り、革紐等が装着されたまま副葬されたと考えられる。部分的に金が見え緑錆に覆われている。X 線撮影及び CT 撮影の結果より鉄地金銅張と考えられる。外径 5.8cm、厚さ 0.3cm を測る。鋲は等間隔に 6 個確認でき、一部裏面で折り返した痕跡が確認できる。

Y90（第 23・39 図）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室規模は玄室中央付近で幅 2.1m、長さ 1.9m を測り、やや横長方形の横穴である。玄室は羨道の中心から北へ 22°傾き掘削される。現状で玄室高は 0.8m を測る。天井部はドーム形であり、玄室主軸は N-89° -E である。羨道は玄門部で幅 0.8m、長さ 0.3m、羨道高 0.5m を測る。玄門部には板石が残り、閉塞石と考えられる。羨道は西向きに開口する。

Y94（第 23・37 図、巻頭図版 2 － 2）

入口部の石組が特徴的であり、構造把握のため入口部のみ調査を行った。羨門部の石組は床面から石を積み上げ、上部に庇石を置く。入口部のみを見ると石室入口部のような印象を受ける。しかし、石組は入口から 2 列程度であり、その奥は地山を削りだした羨道が続く。玄室内は天井部が崩落し、大半が埋没している。玄室内の掘削は行っていないが玄室は現状で幅 2.4m、長さ 2.3m の方形プランであり、天井部形態はドーム形である。高さは 0.9m である。床面は未調査のため、玄室高は更に高くなるであろう。主軸方位は N-106° -E であり、西向きに開口する。羨道部は幅 1.3m、長さ 1.2m である。



第 36 図　Y88 出土遺物実測図（2/3）

Y103（第 23・38 図）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室は他の横穴に比べ小型である。玄室規模は中央付近で幅 1.4m、長さ 0.9m を測り、小型の袋状の横穴である。現状で玄室高は 0.8m を測る。主軸方位は N-80° -W であり、東向きに開口する。羨道は幅 1.0m、長さ 0.7m。

Y105（第 23・38 図）

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。玄室は他の横穴に比べ小型である。玄室規模は玄室中央付近で幅 1.4m、長さ 1.5m の方形の横穴である。現状で玄室高は 0.9m、羨道幅 0.9m、長さ 0.8m、羨道高 0.5m を測る。天井部はドーム形である。主軸方位は N-47° -W であり、南東向きに開口する。

Y106（第 23・39 図）

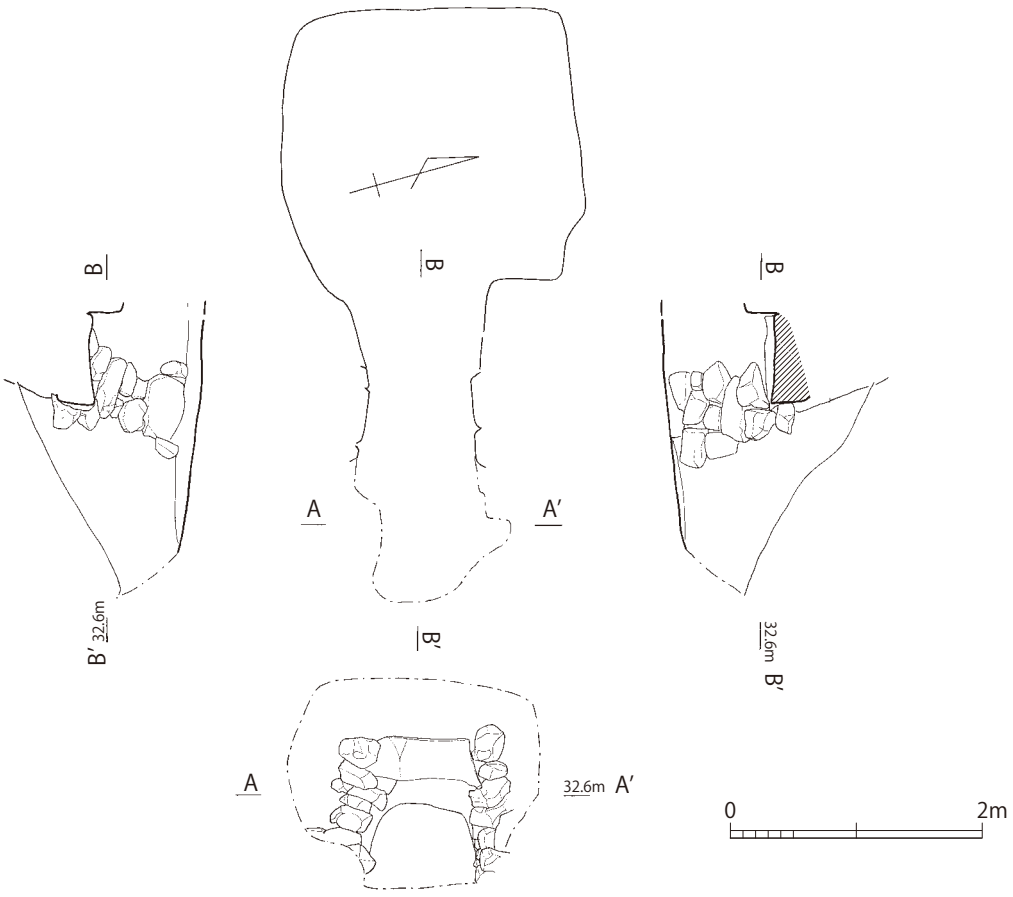
玄室は崩落し旧状をとどめていないが、小型不整形の横穴になると考えられる。主軸方位は N-30° -W であり、南東向きに開口する。羨道は幅 0.6m を測る。

Y107（第 23・39 図）

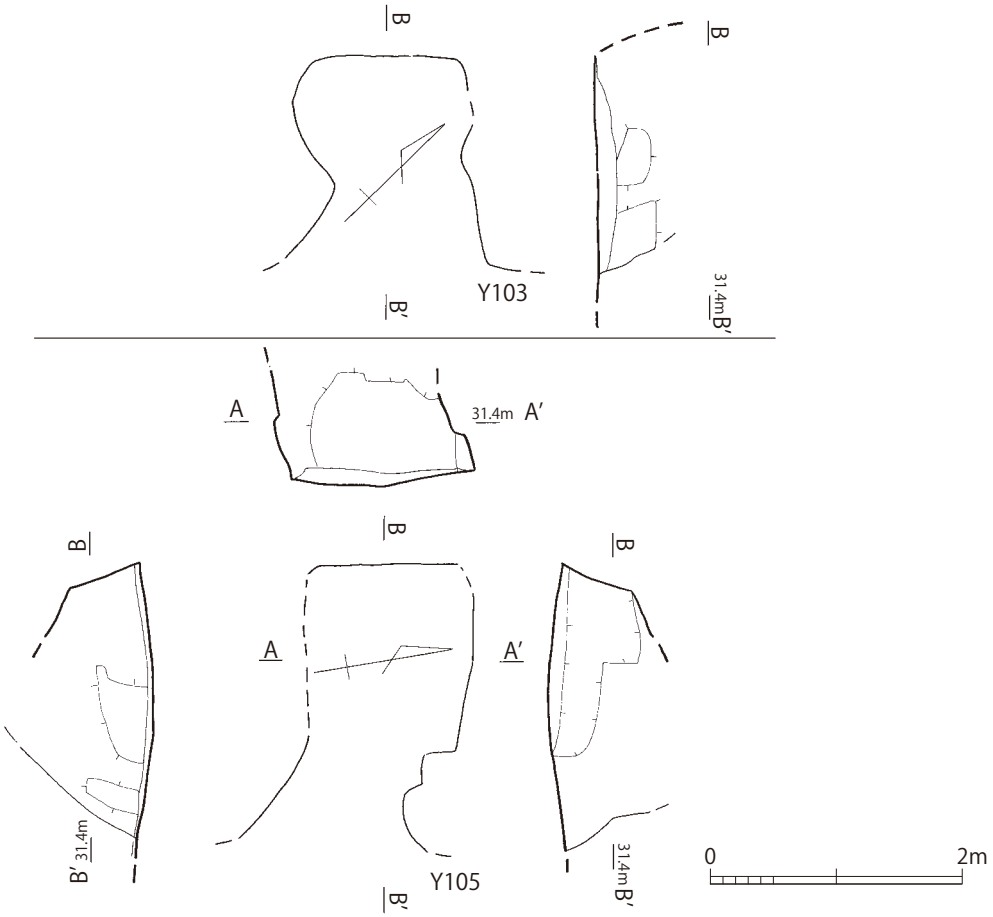
玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため略測のみ行った。羨門石組は無く、羨道部は他の横穴に比べやや長い。玄室規模は幅 2.3m、長さ 2.0m の方形に近いプランであり、天井部形態はドーム形である。現状で玄室高は 0.6m を測る。主軸方位は N-30° -W であり、南東向きに開口する。羨道は幅 0.9m、長さ 0.9m である。

Y108（第 23・39 図）

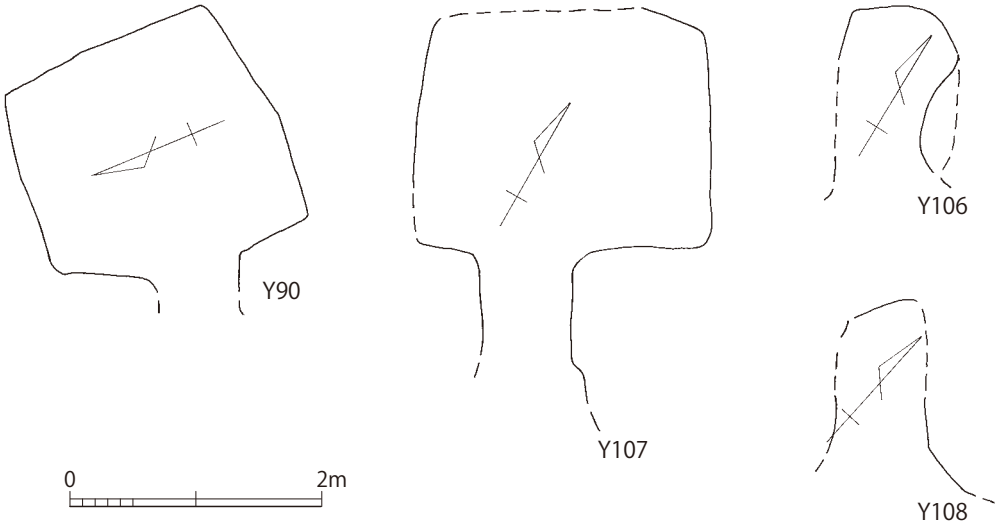
玄室は崩落し旧状をとどめていないが、小型不整形の横穴になると考えられる。玄室規模は



第 37 図　Y94 羨門部実測図（1/60）

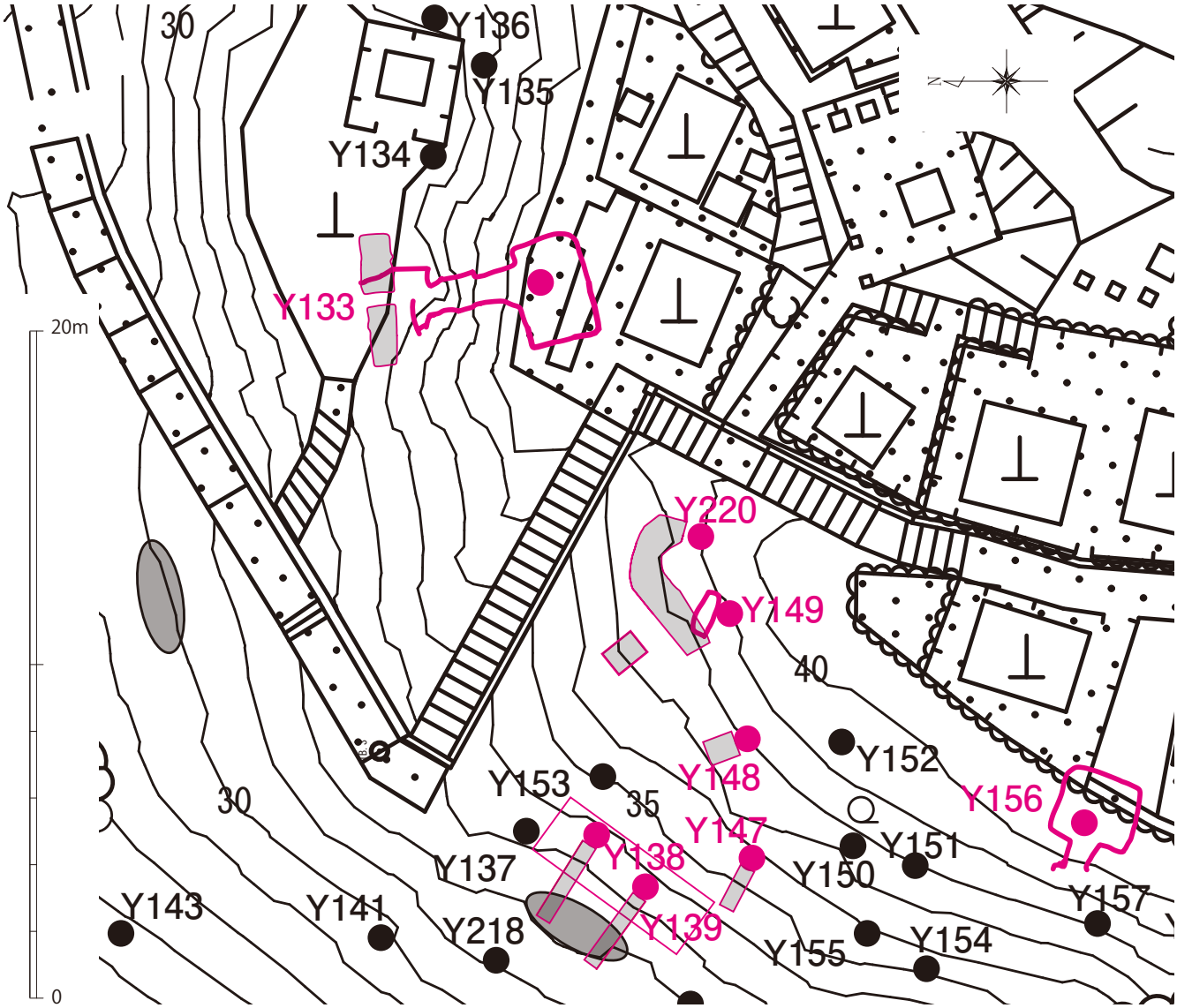


第 38 図　Y103・105 横穴墓実測図（1/60）

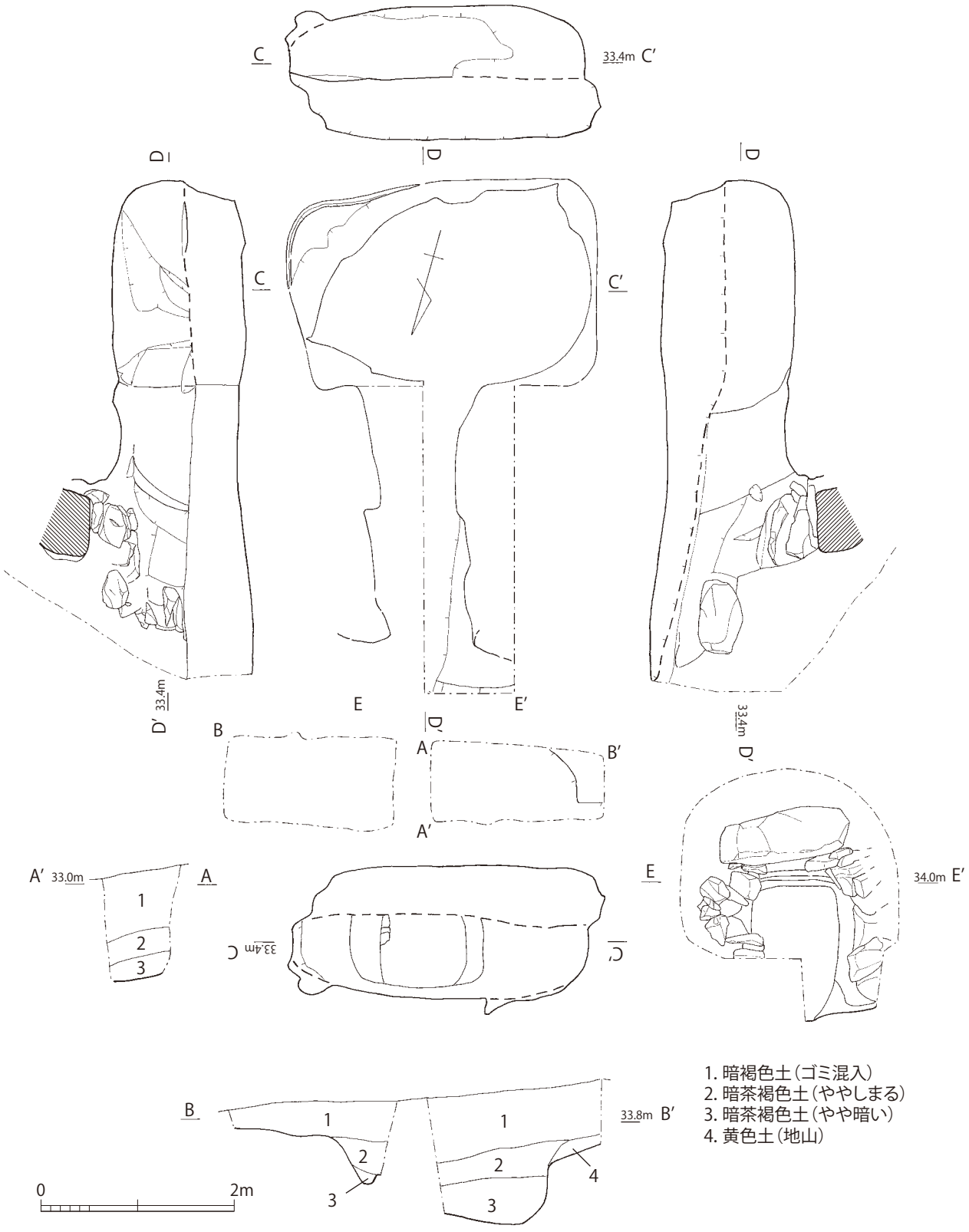


第 39 図　Y90・106・107・108 平面図（1/60）

幅 0.8m、長さ 0.8m の方形に近いプランであり、天井部形態はドーム形である。現状で玄室高は 0.5m を測る。主軸方位は N-30° -W であり、南東向きに開口する。羨道は幅 0.7m、長さ 0.8m、羨道高 0.5m を測る。



第 40 図　Y133・138・139・147・148・149・156・220 位置図（1/200）



第 41 図　Y133 横穴墓実測図（1/60）

Y133（第 40・41 図、図版 11・12）

入口部前面がテラス状となり、墓道部の残存が想定され、入口上部に石材が確認できたことから、入口部の確認のため墓道部にトレンチを設定し調査を行った。

調査の結果、墓道部、羨道、玄室とも床面は後世に攪乱を受け、0.6m 程掘り下げられていた。玄室内の左側壁隅部に旧床面が一部残存していた。残存部から推定した玄室の規模は幅 3.2m、長さ 2.1m の横長の長方形プランであり、高さは 0.8m と低い。天井部形態はドーム形である。主軸方位は N-175° -E であり、ほぼ北向きに開口する。

羨門部は地山を削りだし、その上部に石材を 3 段ほど積み庇石を置く。羨門外でも 1 列の石組を確認でき、この部分は地山面から積み上げている。羨道部は幅約 1.3m、庇石の下部まで長さ約 1.8m である。

玄室内、羨道部ともに赤色顔料や線刻等による装飾の痕跡は認められなかった。

墓道は推定で深さ 0.4m と浅い。幅は入口左側が大きく攪乱を受け不明であるが、一部で墓道の上端部付近が残存する。トレンチ範囲内に関しては、隣接する横穴墓と墓道を共有する様相はない。

遺物（第 42 図、図版 27）

すべて須恵器である。1、2 は須恵器坏蓋である。1 は口縁端部に段が残る。3 は坏身である。

4、5 はともに高坏の脚部である。どちらも外面は粗いカキメ調整を施す。5 は 2 段の透かし孔が 3 方向に入るようである。

6 は須恵器甕片である。体部のタタキはナデ消しており丁寧なつくりである。

Y138・Y139・Y147

Y138、Y139 は並列して存在し遺構上部では Y147 に通じる墓道を検出している。三つの横穴墓の関係性から同一図に図化を行い、まとめて報告する。

墓道部の構造解明の為、隣接する Y138、139 において墓道部のトレンチ調査を行った。結果、等高線に直行する墓道を検出した。

Y138（第 40・43・44 図、図版 13）

Y138 では墓道は最も深いところで深さ 1.2m、幅は墓道上端で幅 1.1 ～ 1.3m、下端で 0.6 ～ 1.1m であり、長さ 1.7m ほど検出している。主軸方位は N-122° -E であり、北西方向に開口する。

墓道の堆積状況については、1、2、3 層は犬の骨等が混入し後世の攪乱と考えられる。しまりがやや異なるため分層した。4、5 層は暗茶褐色土であり、4 層のほうがやや暗く遺物が混入する。4 層が本来の埋土に近いと考えられるが 5 層とは同質であり、堆積の時期差の可能性もある。玄室内の調査を行っていないため 4 層の時期等については確定はできない。

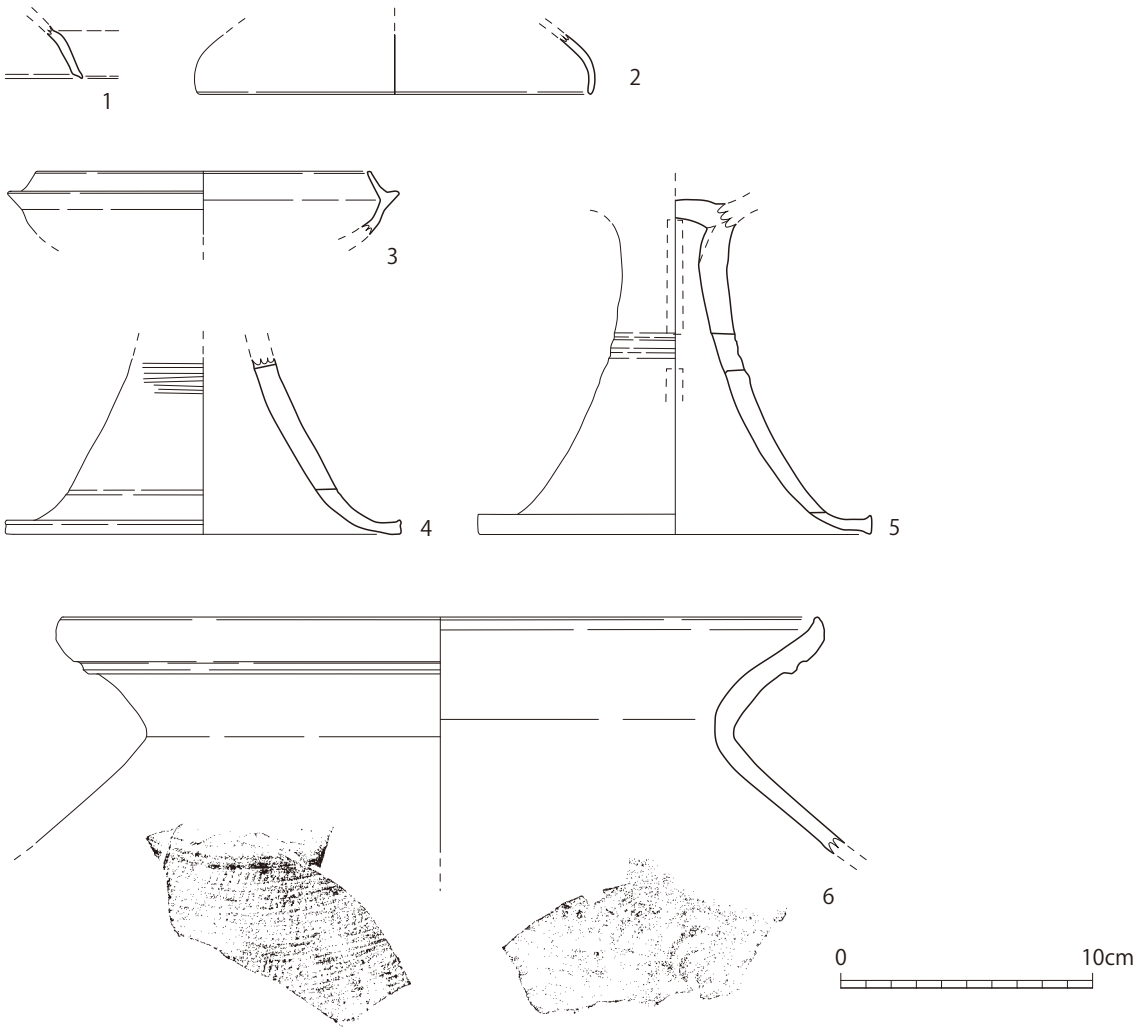
遺物（第 49 図、図版 27）

1 は須恵器坏蓋である。天井部内面に当て具痕が残る。

Y139（第 40・43・44 図、図版 13・14）

Y139 では墓道は最も深いところで深さ 1.0m、幅は墓道上端で幅約 0.9 ～ 1.1m、下端幅 0.4 ～ 0.6m であり、長さ 1.8m ほど検出している。主軸方位は N-126° -E であり、北西向きに開口する。

墓道の堆積状況については、Y138 同様暗茶褐色土主体であり、反対に 3、4 層のほうがやや明るい。この 3、4 層の前面に 2 層の黒色土が堆積しており、こちらではこの 2 層が本来の埋土に近いと考えられる。玄室内の調査を行っていないため 2 層の時期等については確定はできない。



第 42 図　Y133 出土遺物実測図（1/3）

Y147（第 40・43・44 図、図版 14・15）

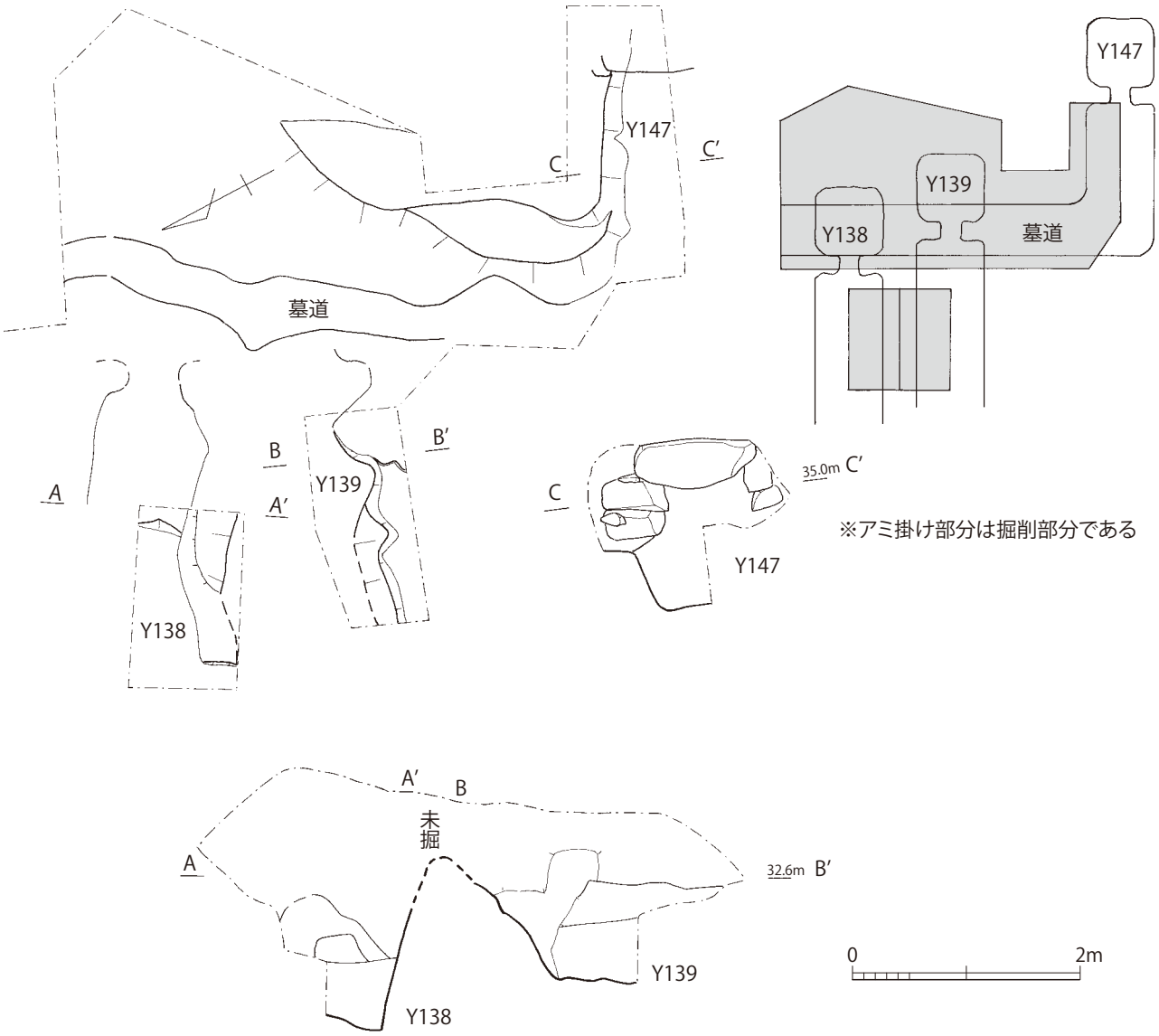
Y147 の墓道は最も深いところで深さ 0.3m、幅は羨門付近で墓道上端で幅 1.2m、下端幅 0.8m であり、長さ 1.9m である。Y147 の墓道は端部が検出され、それから北側へ延びる平坦面を確認している。Y138、139 上部へ続くこの平坦面は横方向の墓道と考えられる。

Y147 の羨門部には石組が見られる。墓道の上端に石材を 2 石乗せ庇石を架構する。石材は 1 列である。主軸方位は N-118° -E であり、北西方向に開口する。墓道の堆積状況については、1、2、3、4 層全て若干の違いはあるものの同一層である。当初土層中の塊石については閉塞石の可能性も考えられたが、塊石は玄室内へ続く様相はなく閉塞石ではないと判断した。そのため 1、2、3 層については閉塞石が掻き出された後の堆積と思われる。ただし 4 層については羨門部の石組の下へと続くように層があり、本来の埋土の可能性がある。

遺物（第 49 図・図版 27）

2 は須恵器坏蓋である。口縁端部の作りは丁寧である。内面天井部に 1 条の沈線状ヘラ記号を施す。天井部外面は回転ヘラ削り、口縁部内外はヨコナデ、天井部内面はナデ調整を施す。焼成は良好であり淡黄灰色を呈する。胎土はやや粗い。

3、4 は須恵器坏身である。4 は Y147 北側の地山整形面からの出土である。3、4 ともに内面底部に 2 条の沈線状ヘラ記号を施す。底部外面はヘラ切り後、体部に回転ヘラ削り、口縁部内外は



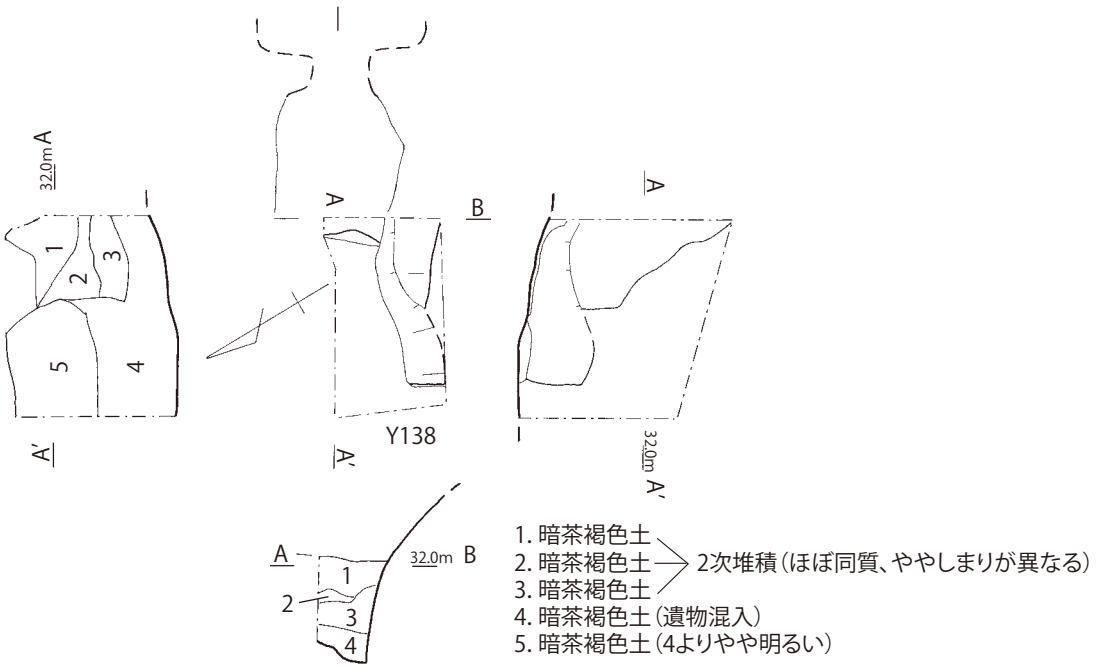
第 43 図　Y138・139・147 地山整形状況（1/60）

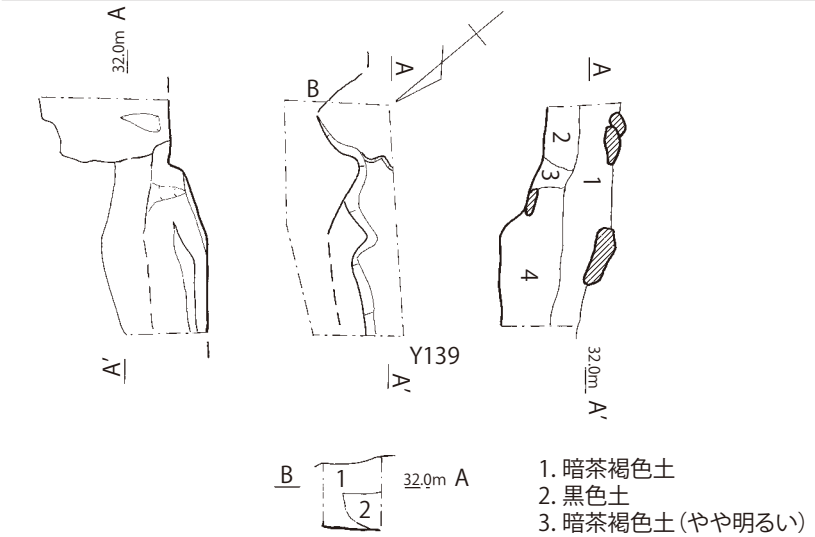
ヨコナデ、底部内面はナデ調整を施す。焼成は良好であり、3 は黒灰色、一部灰褐色、4 は灰色から淡黄灰色を呈する。胎土は 3 はやや粗く、4 は精良である。

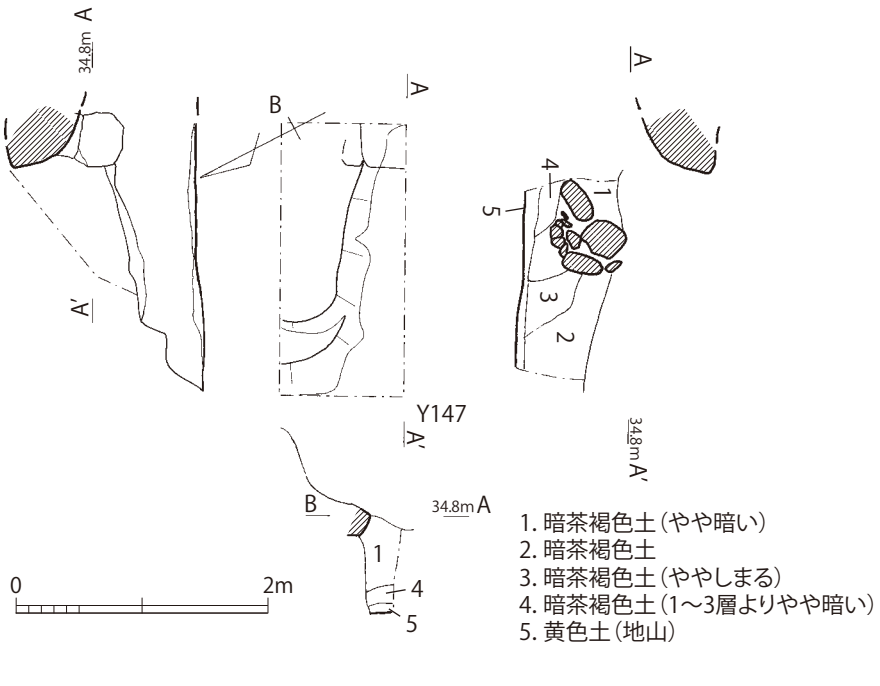
5 は須恵器甕の口縁部片である。外面はカキメ調整の後くし描きで文様を施す。焼成は良好であり灰色、外面は一部黒灰色を呈する。胎土はやや粗い。

Y148（第 40・45 図、図版 15）

入口部の石組が特徴的であり、構造把握のため入口部のみ調査を行った。羨門部の石組は、最下段は地山を段状に掘り残し 2 段の石を積み、上部に庇石を置く。地山を掘り残す部分は左右で高さが違い、意図的に段を作りだしたのかは不明である。しかし、石材は入口から 1 列程度であり、その奥は地山を削りだした羨道が続く。玄室内は天井部が崩落し、大半が埋没している。玄室内の掘削は行っていない。主軸方位は N-163° -E であり、北向きに開口する。







第 44 図　Y138・139・147 墓道接続状況（1/60）

遺物（第 48 図、図版 27）

4 は鉄刀である。残存長 8.65cm を測る刀身部分である。

Y149・Y220

Y149 と Y220 は並列して存在し、墓道を共有する可能性を考えた。そのため 2 つの横穴の墓道を横断するトレンチを設定し調査を行った。

Y149（第 40・46 図、図版 16）

Y149 では墓道は最も深いところで深さ約 0.3m、幅は墓道上端で幅 1.6 ～ 1.7m、下端幅 1.4 ～ 1.6m であり、長さ約 2.4m ほど検出している。墓道端部では 1 段下がる様相があるため斜面に平行する墓道部が存在する可能性がある。主軸方位は N-142° -E であり、北西方向に開口する。

遺物（第 49 図、図版 27）

6、7 は須恵器坏蓋である。ともに墓道端部に近いトレンチ B よりの出土である。共に口径は 12cm 程度で、高さも 4cm 程度で非常に似ている。天井部外面は回転ヘラ削り、口縁部内外面ヨコナデ、天井部内面はナデ調整を施す。焼成は良好であり 6 は灰色、外面の一部灰褐色、7 は淡灰色を呈する。胎土はともにやや粗い。

8、9 は須恵器坏身である。9 は墓道端部に近いトレンチ B よりの出土である。共に口径は 10cm 程度で、受部径 12cm 程度である。器高は 9 のほうが高く丸みを帯びる。8 はヘラ切り未調整、9 の底部外面は回転ヘラ削りである。口縁部内外面ヨコナデ、天井部内面はナデ調整を施す。焼成は良好であり、8 は暗灰色、9 は外面淡灰色、内面淡灰褐色を呈する。胎土は共に粗い。

10 は入口部前面で検出した須恵器提瓶である。口縁端部を一部欠失するが口径 5.6 ～ 6.0cm、器高 19.9cm、胴部最大径 15.6cm を測る。体部はカキメ調整、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。焼成は良好であり、灰色を呈する。胎土はやや粗い。

11 は須恵器壺の口縁部片である。頸部外面に逆 V 字状のヘラ記号を施す。

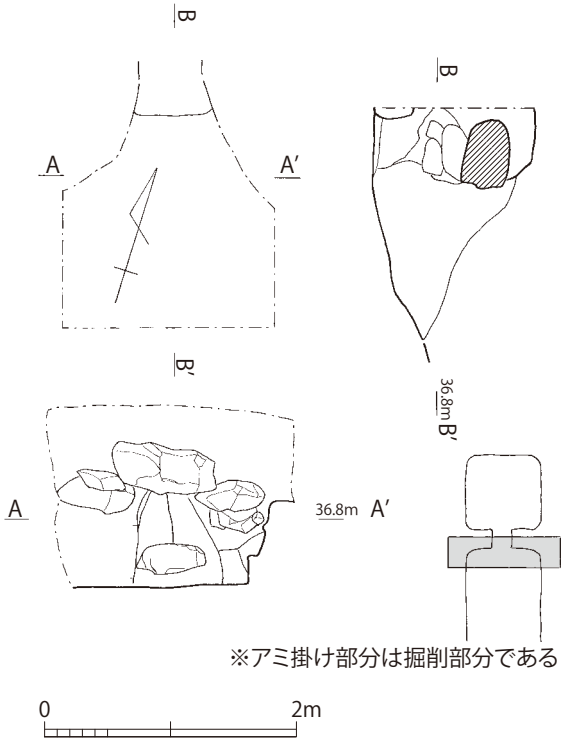
12 は土師器高坏である。内外共に調整は不明瞭であるが、透かし孔、下部に沈線が確認できる。

Y220（第 40・46 図、図版 16）

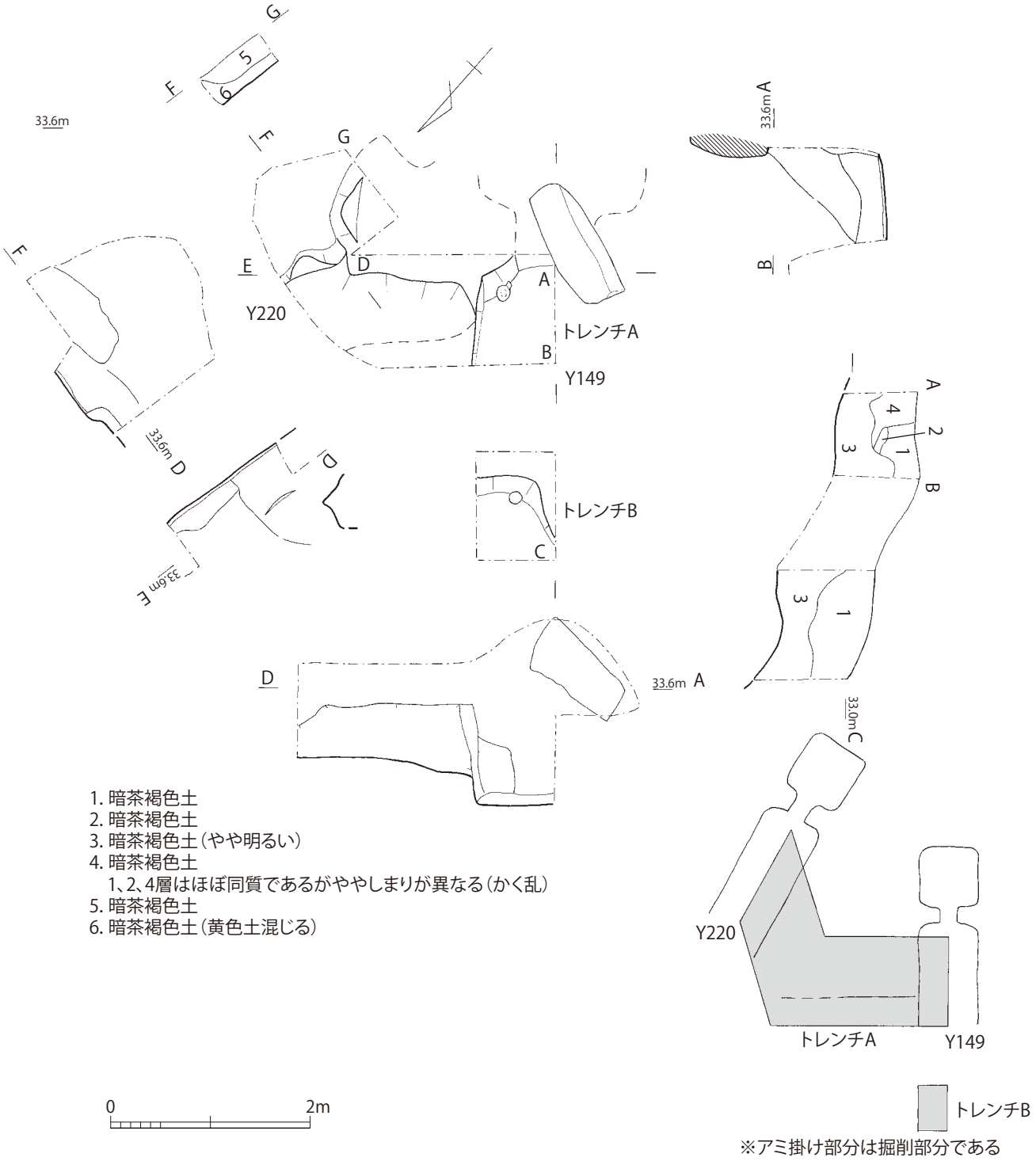
Y220 では墓道は最も深いところで深さ 0.5m、幅は墓道上端で幅 1.1 から 1.4m、下端幅 1.3 ～ 1.6m であり、長さ 1.2m ほど検出している。主軸方位は N-145° -E であり、北西方向に開口する。

墓道は各々独立して構築され、前庭部状に共有する様相はない。

墓道の堆積状況については、Y149、Y220 共に若干の違いはあるものの、Y148 でも確認した暗茶褐色土が主体である。



第 45 図　Y148 入口部実測図（1/60）



第 46 図　Y149・220 墓道接続状況（1/60）

遺物（第 48・49 図、図版 27）

13 は須恵器坏身である。底部外面はヘラ切り未調整。体部から口縁部内外面はヨコナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部内面には当て具痕が残る。焼成は良好であり、内面は灰色を呈する。外面は黒灰色、一部灰褐色を呈する。胎土はやや粗い。14 は須恵器甕の口縁部である。ヘラ描き文の上を波線で区画する丁寧な作りである。

第 48 図 3 は鉄刀である。刀身から茎部分にかけての破片である。

Y156（第 40・47 図、図版 17・18）

玄室は、後世の改変が著しいが、現状では中央部で幅 2.36m、長さ 2.12m のやや横長方形のプランである。黒くさらさらした土がうすく堆積していた。床面にはこぶし大の敷石が敷かれ、玄室の高さは中央部付近で敷石上より 0.80m を測る。追葬時の片づけか後世の改変のため、敷石は全面には認められない。敷石は確認できる部分で最低 2 面確認できる。

天井は玄門部へ向かい緩やかに低くなる。羨道は玄門部で幅 0.91m、入口部で 0.65m、長さ 0.79m を測る。天井部、壁面共に軒先線等はなく天井部形態はドーム型である。天井部に工具痕が認められ、幅は 10cm ～ 15cm を測るが、工具は 5cm 程度の幅のものを用い 2 度、3 度削ることで現在の幅になったと考えられる。主軸方位は N-112° -E であり、北西方向に開口する。羨門部は飾り縁が見られる。

遺物（第 48 図、図版 27）

1、2 は鉄鏃である。玄室内部の埋土をふるいにかけた際に検出した。1 は鏃身部分、2 は長頸鏃の頸部部分である。

Y160（第 50・51 図、図版 19）

南側丘陵で確認した横方向の墓道を確認するため、墓道部のトレンチ調査を行った。結果、等高線に直行する墓道を検出した。墓道は最も深いところで深さ 1.0m、幅は墓道上端幅 0.8 ～ 1.2m、下端幅 0.5m であり、長さ 1.6m ほど検出している。主軸方位は N-93° -E であり、西方向に開口する。墓道埋土は暗茶褐色土の単一層であり、追葬等の痕跡は確認できない。

入口部には庇石が確認できる。また、入口部前面に板石が溝状の遺構に据えられた状態で検出しており、閉塞石と考えられる。

Y164（第 50・52 図、図版 19 ～ 21）

玄室は、後世の改変が著しいが、現状で中央部の幅 1.87m、長さ 1.43m を測り、横長方形のプランの横穴墓である。玄室の高さは中央部付近で 0.80m を測る。天井は羨道とほぼ同じ高さである。羨道は玄門部で幅 1.19m、入口部 1.02m、長さ 1.05m を測る。高さは 0.86m である。天井部、壁面共に軒先線等はなく、天井部形態はドーム形である。天井部に工具痕が認められる。玄室内から遺物は検出していない。主軸方位は N-74° -W であり、南東方向に開口する。

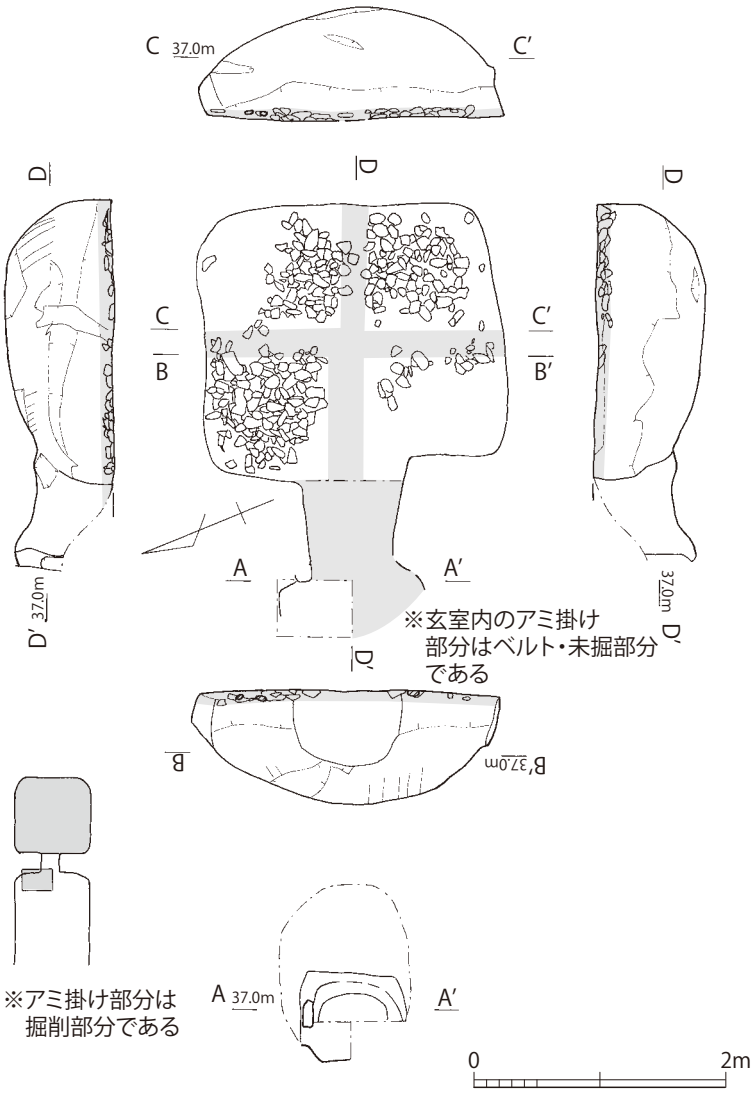
Y180・Y219（第 50・53 図、図版 21・22）

並列して存在する 2 基の横穴墓について、墓道部の構造確認のためトレンチ調査を行った。

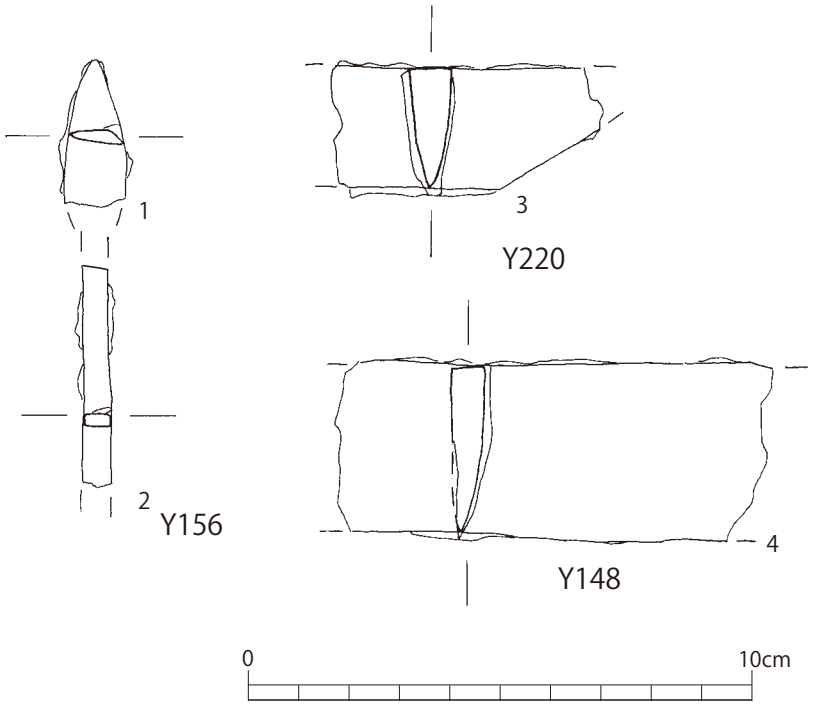
Y180（第 50・53 図、図版 21）

墓道は最も深いところで深さ 1.2m、幅は墓道上端で幅 1.6 ～ 2.0m、下端幅 0.6 ～ 1.0m であり、長さ 2.8m ほど検出している。墓道端部は 1 段下がる様相が有り、0.35m ほど下がっている。地山のずれが原因であろうか。この部分は隣の Y219 に続き、横方向に移動するための墓道部分と考えられる。横方向の墓道の標高 32.15m 付近を通ると考えられ、隣の Y219 より 0.2m 位低い。主軸方位は N-95° -E であり、西方向に開口する。入口部には庇石を架構している。

墓道の堆積状況については、1 層はごみが混入し後世のかく乱である。2、3、4、5、6 層はほ



第 47 図　Y156 横穴墓実測図（1/60）



第 48 図　Y148・156・220 出土遺物実測図（2/3）

とんど同質であり不規則に堆積する。後世の埋土であろう。

Y219（第 50・53 図、図版 22）

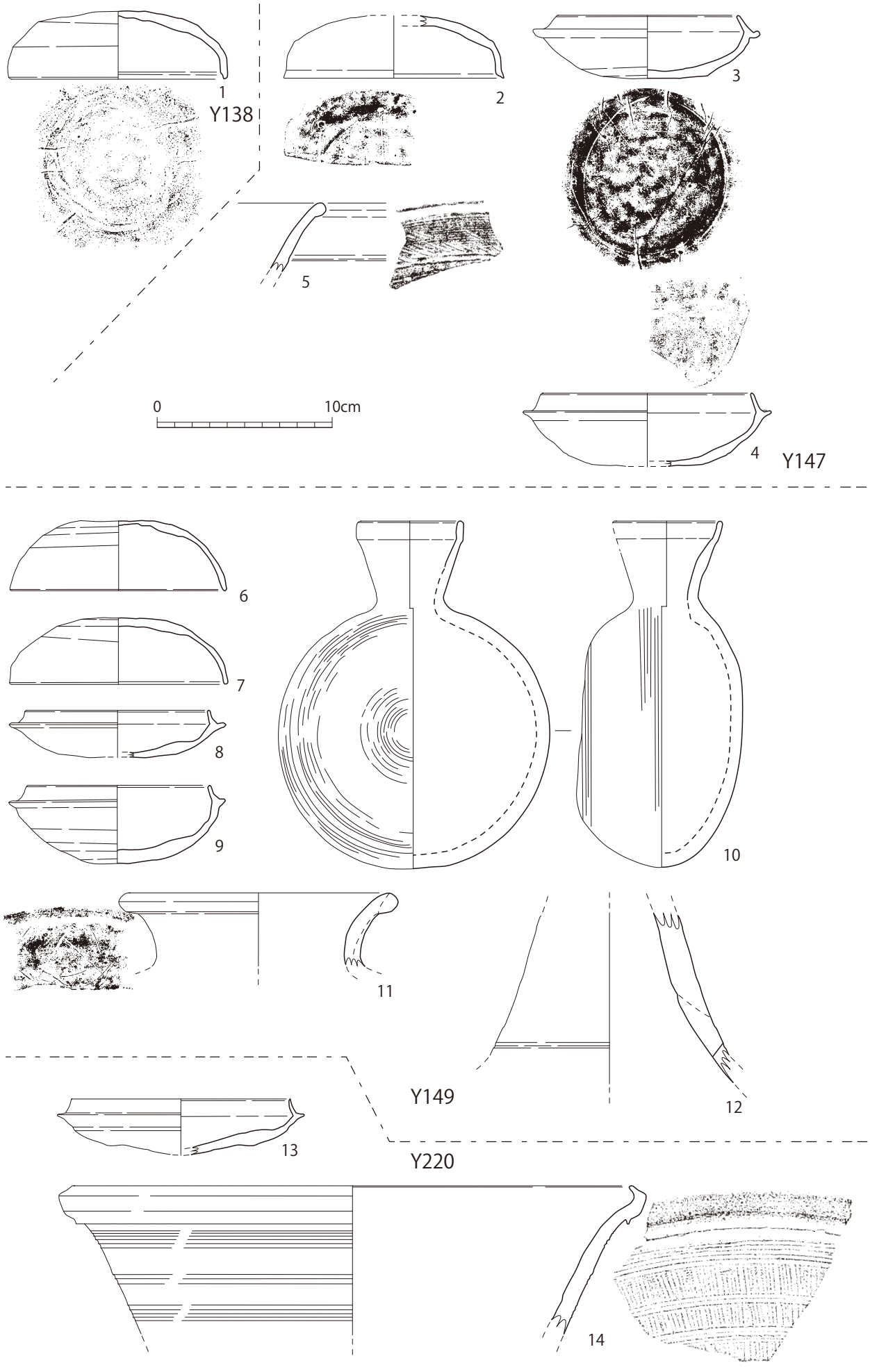
墓道は最も深いところで深さ 0.5m、幅は墓道上端で幅 2.0m、下端幅 1.0 ～ 1.5m であり、長さ 3.1m ほど検出している。墓道端部は階段状となる。斜面に直行する墓道は、平行する墓道から進入する構造であることが判明した。主軸方位は N-95° -E であり、西方向に開口する。

Y180 と Y219 の墓道は各々独立して構築され、前庭部状に共有する様相はないが、斜面に並行する墓道の存在が確認でき、この墓道を手掛かりに単位の抽出が可能である。

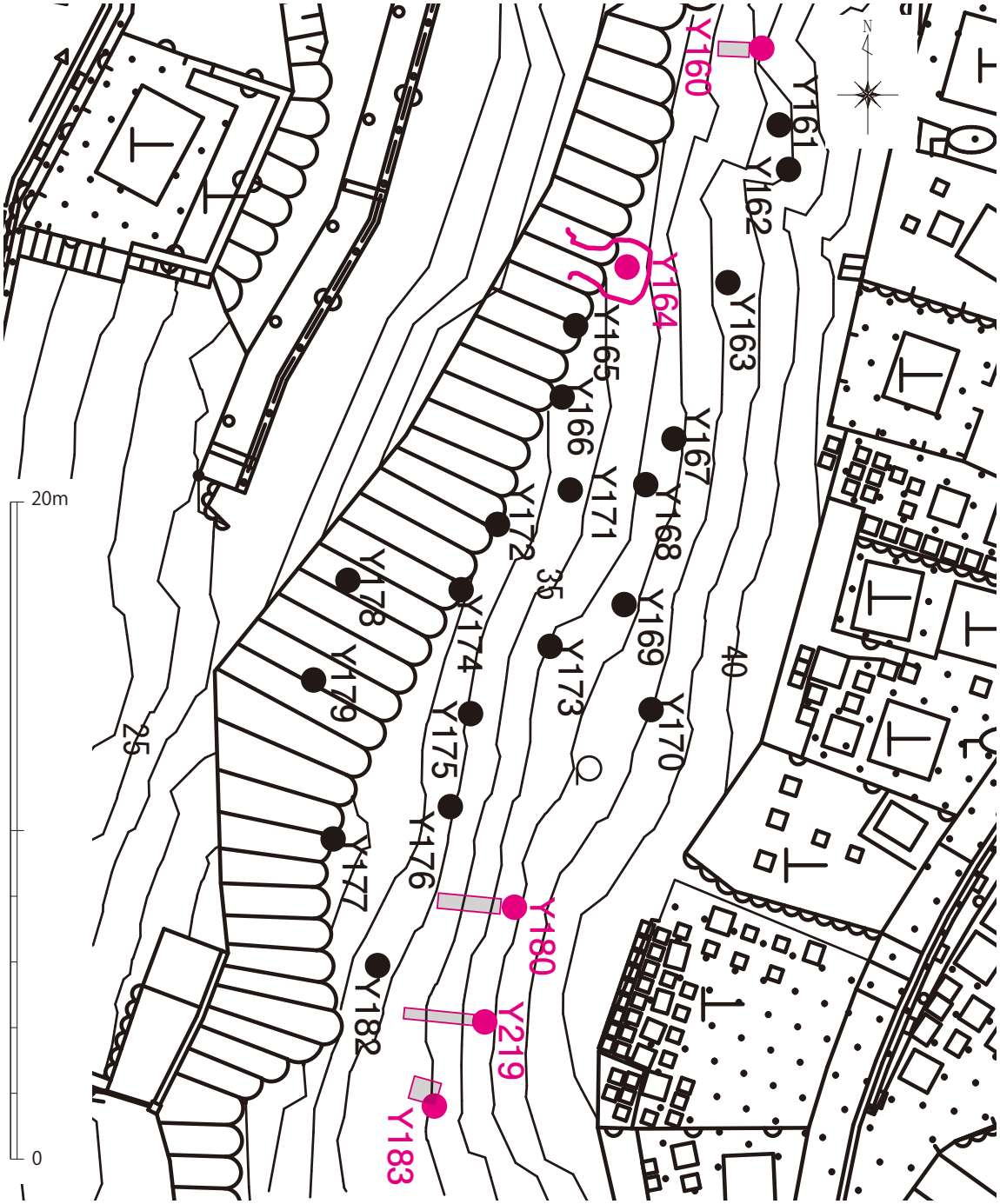
墓道の堆積状況については、3、4 層は後世の埋土と考えられる。ほとんど同質であり不規則に堆積する。1 層は 3、4 層堆積前の埋土、2 層のみが横穴墓の入口部まで堆積し本来の埋土と考えられる。

Y183（第 50・54 図、巻頭図版3－5）

Y180、219 と共に墓道構造解明のため墓道推定部分にトレンチを設定したが、墓道部分は明確に検出できていない。掘削部分では玄室左隅部を検出し、11 個体の須恵器を検出している。時期幅が有るため、追葬時に片付けられ集められたものと考えられる。開口方向は玄室の形状より、西方向と考えられる。



第 49 図　Y138・147・149・220 出土遺物実測図（1/3）

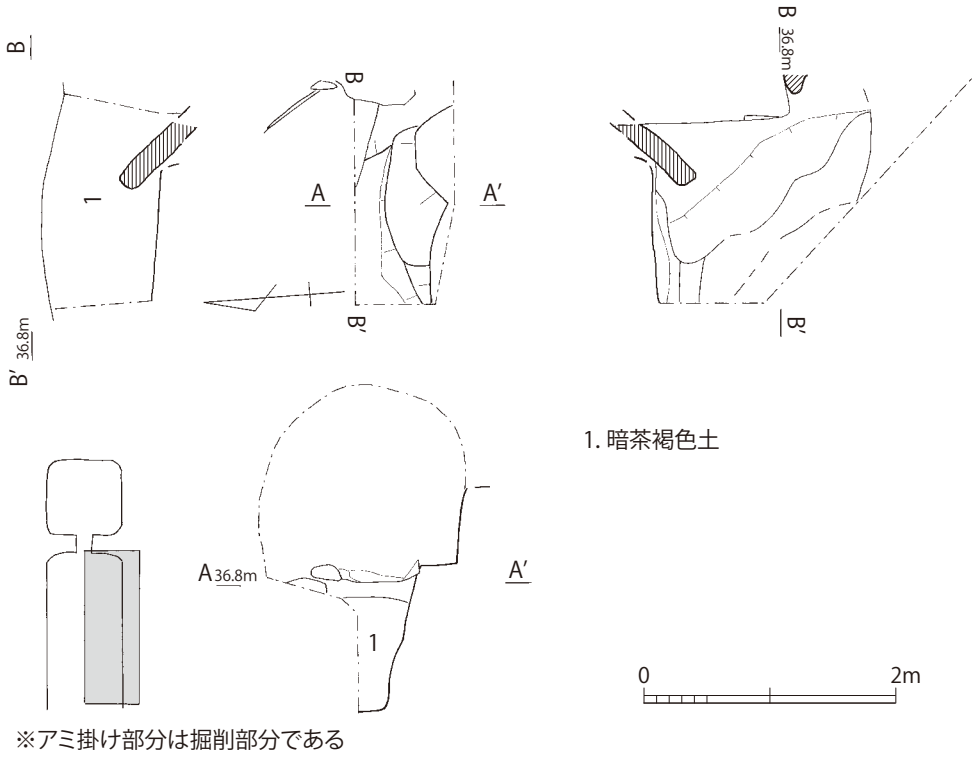


第 50 図　Y160・164・180・183・219 位置図（1/200）

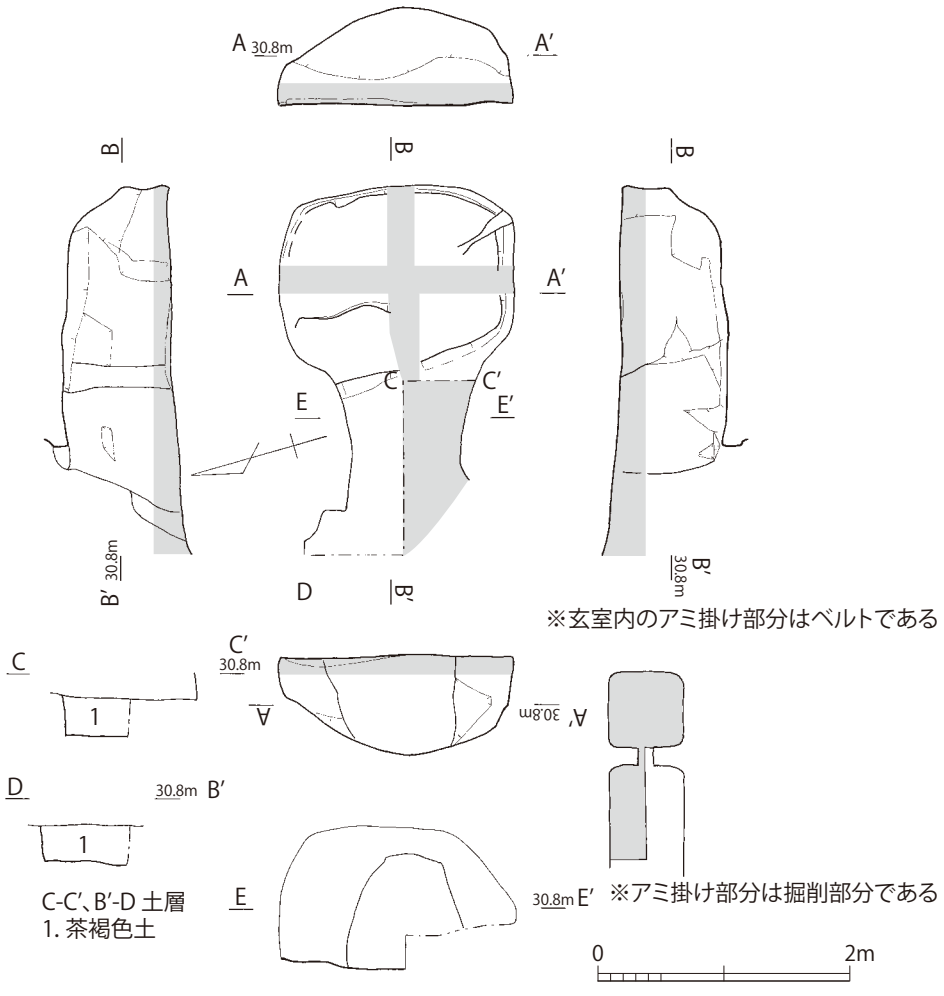
遺物（第 55 図、図版 27・28）

1 ～ 6 は須恵器坏蓋である。すべて返りを持ちつまみを有する。1、2、3 は口径が 6cm 台、4 は 8cm 台、受部径が 10cm 程度の小型の蓋である。 5 は口径 11.75cm、受部径 14.1cm、6 は口径 13cm、受部径 15.4cm である。5 のみつまみがボタン状となるほかは、つまみは宝珠型である。つまみは回転ヘラ削りの後貼り付けられている。口縁部内外はヨコナデ、天井部内面はナデ調整を施す。焼成はおおむね良好であるが、4、5 のみやや不良である。

7 は高台のつく須恵器の坏身である。口径は 13.6cm、器高は 5.6cm、高台径は 8.6cm を測る。高台は削りの後貼り付けられており、断面は平行四辺形に近くやや外へ踏ん張る。焼成は良好であ



第 51 図　Y160 墓道接続状況（1/60）



第 52 図　Y164 横穴墓実測図（1/60）

り、黒灰色を呈する。胎土はやや粗い。

8 は須恵器高坏である。口径 9.1cm、器高 11.4cm、底径 9.5cm を測る。坏部の底部内面はナデ調整、外面はヨコナデ調整、坏部下半はカキメ調整を施す。脚部中ほどと、坏部の底部との境目に沈線をめぐらす。焼成は良好であり、灰褐色を呈する。胎土は比較的精良である。

9 は小型の須恵器横瓶である。口径 5cm、器高 11.8cm、胴部最大径 12.5cm を測る。調整は不明瞭であるが、体部中ほどまで削り、その後ナデ調整を施している。焼成は良好であり、暗灰色から灰色を呈し、部分的に茶褐色の釉がかかる。胎土はやや粗い。

10 は須恵器甕である。口縁部を一部欠失する。復元口径は 11.2cm、器高 15.4cm、胴部最大径 9.8cm を測る。頸部は細くしまり、口縁部は大きく開く。体部下半は削り調整、体部上半から口縁部まではナデ調整を施す。焼成は良好であり、灰色、一部黒灰色を呈する。胎土は比較的精良である。

11 は脚付の須恵器短頸壺である。口径 8.2cm、器高 13.8cm、底径 7.9cm を測る。脚部は貼り付けによる。内外面共にヨコナデ調整、内面底部はナデ調整を施す。焼成は良好であり、淡灰色を呈する。胎土は比較的精良である。

12 は三角類の鉄鏃である。鏃身部と返りの部分を欠失する。

Y198（第 56 図、巻頭図版 2 － 3）

Y198 の南側に開口する横穴である。羨門石組等の施設はなく小型横穴墓と考えられた。内部への侵入が可能なため、入口部の調査と内部の略測を行った。玄室は幅 1.4m、長さ 1.8m、高さは床面が未調査であるが 1.1m である。玄室規模は後述する Y199 とほぼ同規模である。主軸方位は N-78° -W で東方向に開口する。羨道部は玄門部で幅 0.9m、羨門部で 0.7m である。羨道は奥壁に向かいやや左寄りに掘削されている。

Y199（第 56 図、巻頭図版 2 － 3、図版 22・23）

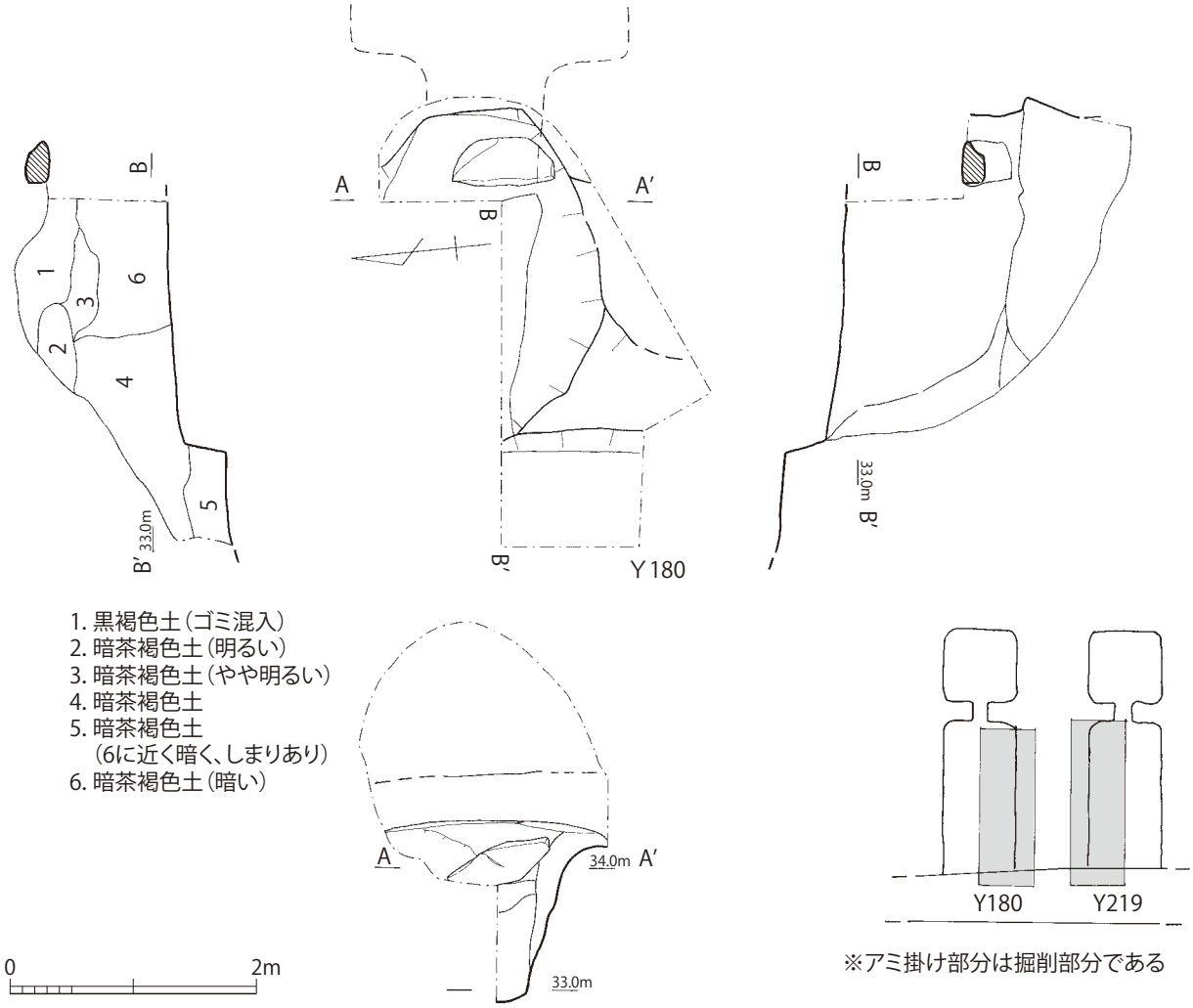
羨門石組が特徴的であり、その入口部の残存状態が良いため、入口部から羨道部にかけて調査を行った。羨道部の調査中玄門左側でまとまって遺物が出土した。床面に閉塞石が倒れこんでいたため除去後に遺物を取り上げた。閉塞石は一枚の板石である。

玄室内は大半が埋没しており、床面は未調査であるが、遺物の出土したレベル付近では扁平な石材が確認でき、敷石の可能性がある。玄室は幅 1.6m、長さ 1.8m、高さは床面が未調査であるが約 0.8m であり、天井部形態はドーム形である。主軸方位は N-102° -W で東方向に開口する。羨道部は玄門部で幅 1.1m、羨門部で 0.75m、底石の部分までで長さ 1.6m である。

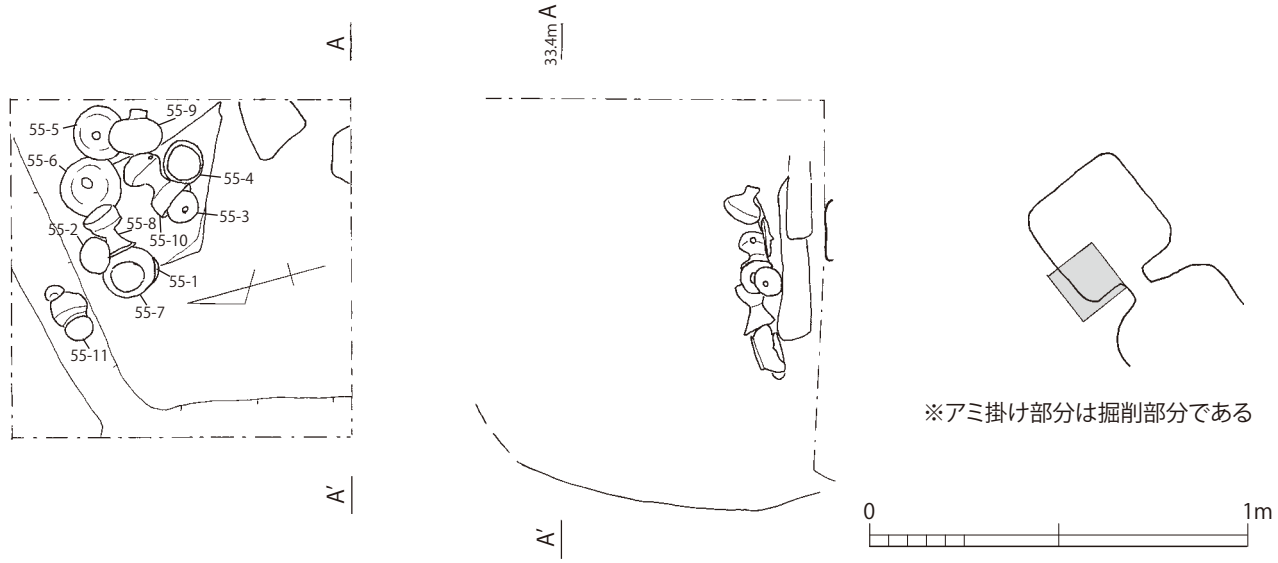
遺物（第 57 図、図版 28）

1 は須恵器坏身である。口径 9.8cm、受部径 11.5cm、器高 3.3cm を測る。底部外面にヘラ記号を施す。底部外面はヘラ切り後ナデ調整、体部外面から口縁部内面はヨコナデ調整、内面体部から底部はナデ調整を施す。焼成はやや不良であり、淡灰褐色を呈する。胎土は比較的精良である。

2 は須恵器坏身である。口径 10.2cm、受部径 12.2cm、器高 4cm を測る。底部外面はヘラ切り後ナデ調整、体部外面から口縁部内面はヨコナデ調整、内面体部から底部はナデ調整を施す。焼成は良好であり、橙赤褐色を呈する。胎土は精良である。色調は土師器のようであるが調整等から須恵器であろう。



第 53 図　Y180・219 墓道接続状況（1/60）



第 54 図　Y183 遺物出土状況図（1/20）

3 は土師器高坏である。脚部下半を欠失する。復元口径 15.6cm、残存高 8.5cm を測る。脚部外面は縦方向の削り調整、体部内面はミガキ調整が施される。焼成は良好であり、橙褐色を呈する。胎土はやや粗い。

4 は須恵器壺である。口径 11.7cm、器高 23.6cm、胴部最大径 19.5cm を測る。体部外面はカキメ調整、口頸部内外面はヨコナデ調整を施す。焼成は良好であり、黒灰色を呈する。胎土はやや粗い。

5 は須恵器提瓶である。口径 8.5 ～ 8.9cm、器高 27.7cm、胴部最大径 23cm を測る。体部外面から頸部外面はカキメ調整、口縁外面、口頸部内面はヨコナデ調整を施す。把手は半環状である。焼成は良好であり、黒灰色、部分的に黒灰褐色を呈する。胎土は比較的精良である。

その他の採集遺物（第 58 図、図版 28）

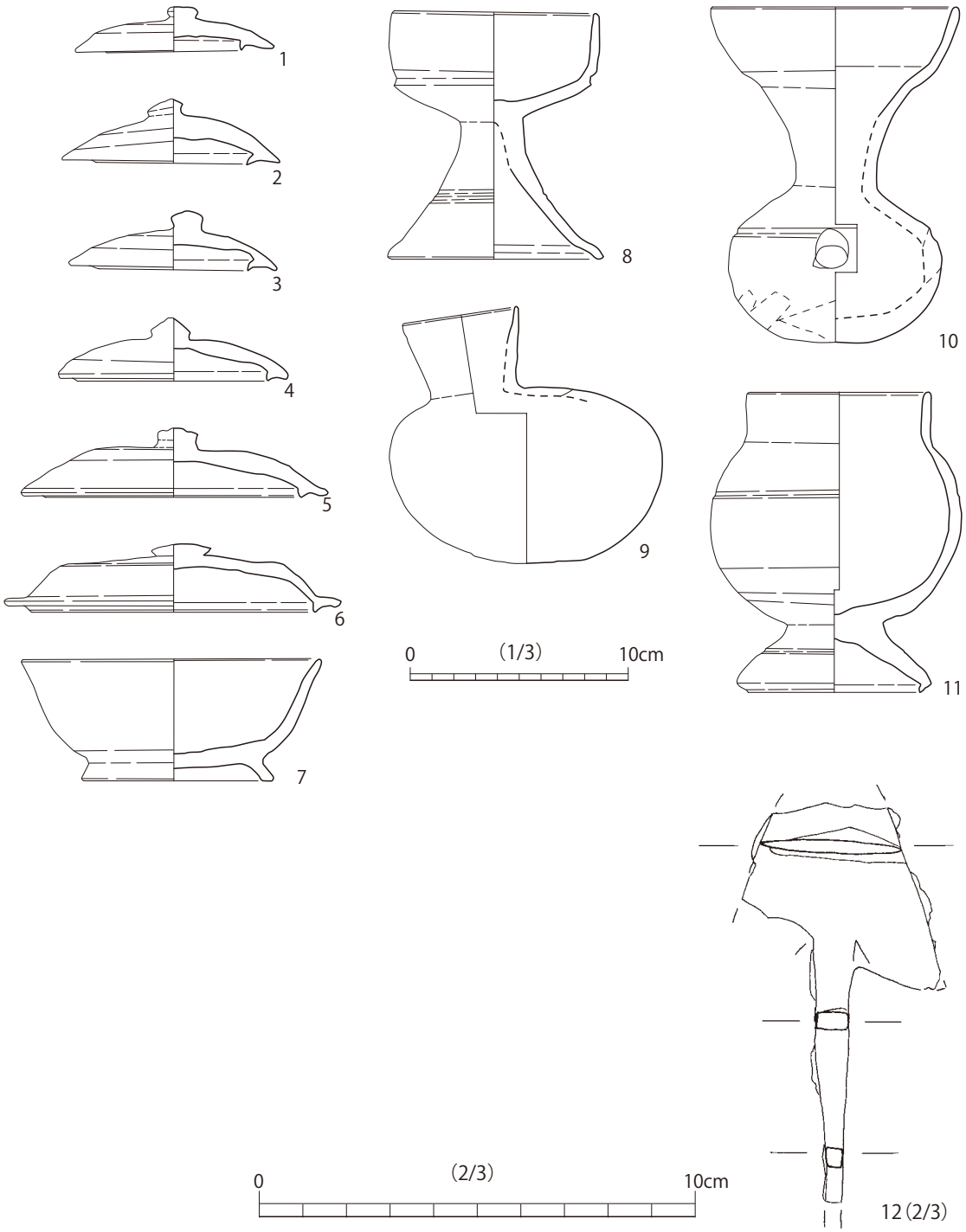
Y54 周辺で 1 ～ 10 のまとまった量の遺物が出土している。

1、2 は土師器埦の口縁部片である。3 は土師器坏である。復元口径 14.6cm、復元底径 10.2cm、残存高 3.1cm を測る。底部はヘラ切りのようである。4、5 は土師器皿である。調整は不明瞭なものもあるが内外面ともにヨコナデ、ナデ調整が主体であり、底部は糸切りがほとんどである。

6、7、8、9 は瓦器である。6、7、8 は瓦器埦である。6 は復元口径は 19cm、復元器高 6.6cm を測る。接合しないもののほぼ完形に復元できる。底部付近は削り調整を行い高台貼り付け後ナデ調整、口縁端部はナデ調整、ほかの部分はミガキ調整を施す。7、8 は高台片である。9 はすり鉢の口縁部片である。外面の口縁下部にはミガキ調整が見られ、ほかはヨコナデ調整を施す。焼成はともによく、胎土はやや粗い。

10 は Y68 出土の大刀片である。残存長 26.6cm、身の幅 4.65cm、厚さ 1cm を測る。ほとんど茎部分しか残存しないが、大型の大刀になると考えられる。

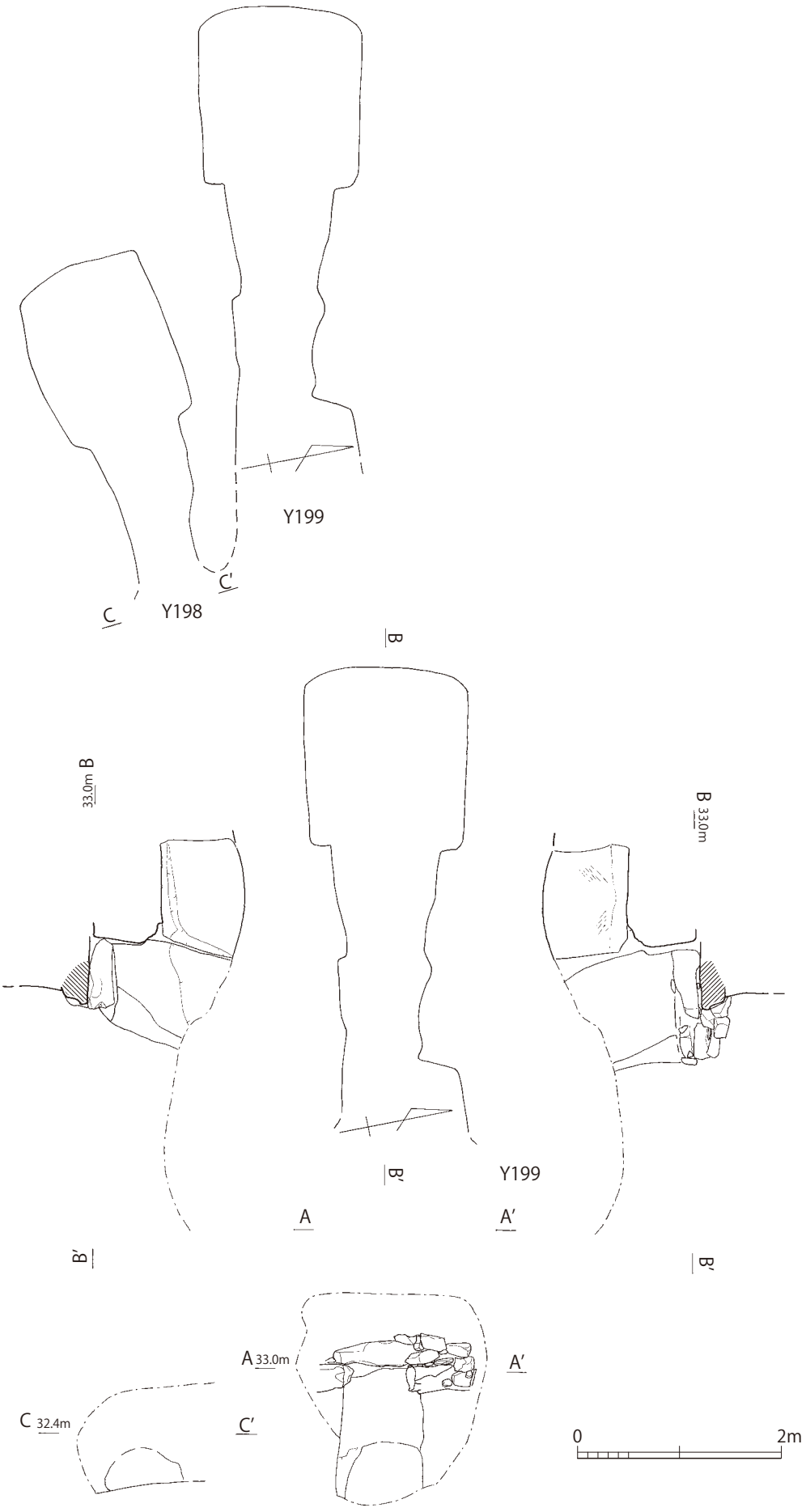
11 ～ 13 は表採資料である。11 は Y122 北側で採集した須恵器坏身である。復元口径 13.0cm、受部径は復元で 15.6cm を測る。底部外面は回転ヘラ削り、そのほかは内外面ともにヨコナデ調整を施す。口縁端部は沈線の痕跡があり、段を意識した造りである。焼成は良好であり、外面暗灰色、内面灰色を呈する。胎土は比較的精良である。



第 55 図　Y183 出土遺物実測図（1/3・2/3）

12 は、かつて南側丘陵付近で採集された須恵器𤭯である。町内の方より提供いただいた。頸部径 4.4cm、胴部最大径 9.6cm を測る。焼成は良好であり、灰色～灰褐色を呈する。胎土はやや粗い。

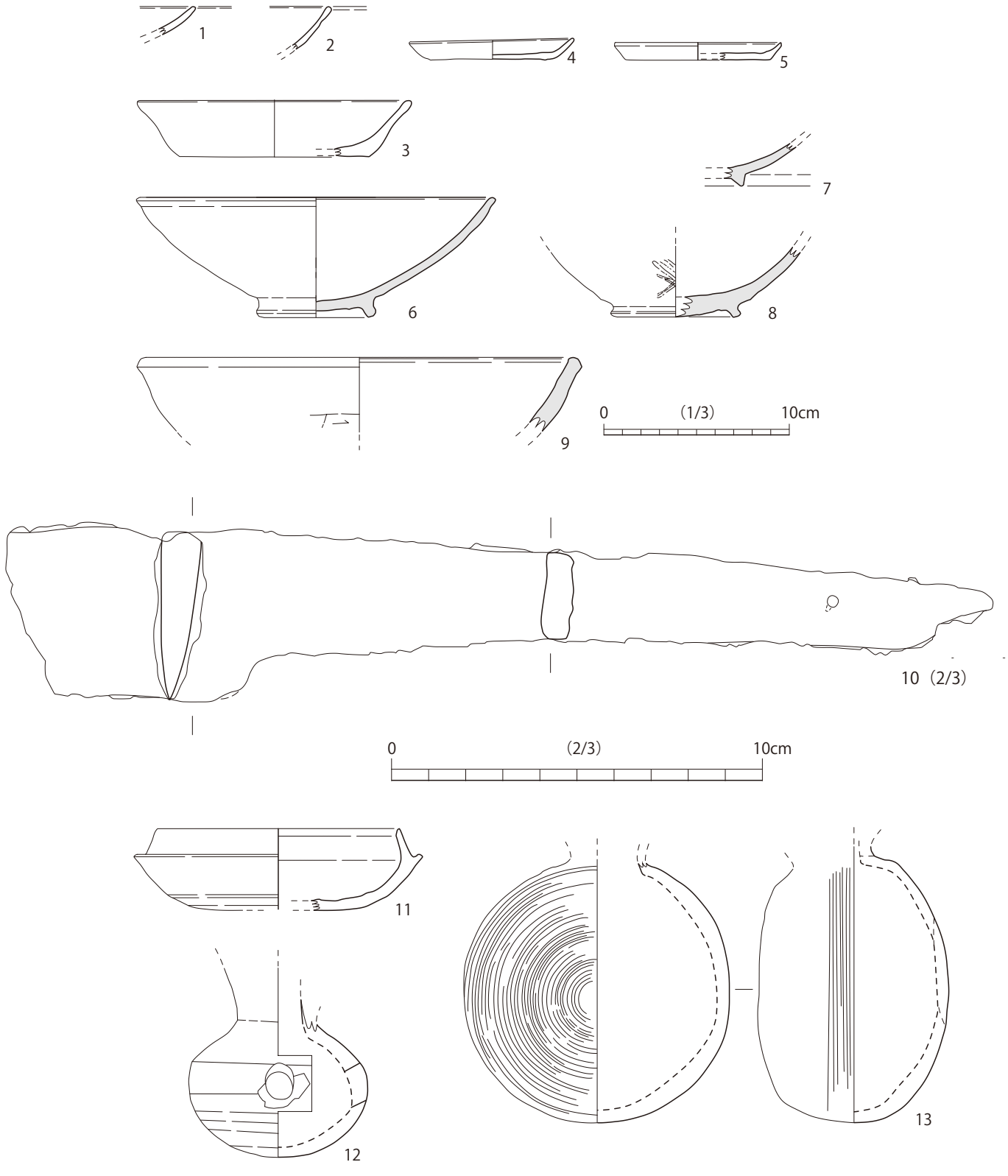
13 は調査中南側丘陵の Y147 付近で採集した。須恵器提瓶である。胴部最大径 14.3cm を測り他の横穴で出土した小型の提瓶と同様に体部にはカキメ調整を施す。



第 56 図　Y198・199 入口部（1/60）



第 57 図　Y199 出土遺物実測図（1/3）



第 58 図　その他の出土遺物実測図（1/3・2/3）

6. 中世城郭遺構

（1）はじめに

福岡県田川郡福智町西金田の城山横穴群は、一定の規模を持って良好に残された古墳時代の横穴墓群であり、現在、福智町教育委員会によって調査が進められているが、その調査の途上、地表面の状況から中世城郭として改変されている可能性が考えられた。中世城郭としての評価について、調査依頼を受けた九州歴史資料館では、学芸調査室の岡寺が担当して、2010 年 3 月に 2 日間かけて現地での城郭遺構の検討を行うと共に、縄張り調査を行い図面を作成した。

ここでは、検討時に作成した縄張り図（第 59 図）を元に、城山横穴群における中世城郭遺構の状況とその性格・年代について述べることとしたい。

（2）城郭遺構の状況

城山横穴群が位置する標高約 40m の丘陵の頂部（第 59 図中Ⅰ）には、東西約 20m、南北約 30m の平坦面があり、現在、東麓の六角家の近世以来の墓地群となっている。Ⅰの南側には横穴墓群の墳丘が見られるが、平坦面との間の a は、窪んでいて堀切状となっている。また、Ⅰの北側には東西約 20m、南北約 30m の平坦面Ⅱがあって、その北側の b は、土塁状となり、平坦面Ⅲへと続いている。西側斜面下には横穴があることから、連続する墳丘同士を埋めて土塁状としていると見られる。その北側には、堀切状の c があり、Ⅲの東側は一部土塁状となって、北側からの侵入に対しての障壁となっている。c の北側については、残存する墳丘がいくつもあって、地形は不明瞭となり、城郭遺構として地形を読み込むのは非常に困難である。ただ、それらを城郭遺構として積極的に読み込むならば、墳丘と墳丘の間の窪みや、墳丘を断ち割るような地形が見られることから、d・e・f・g・h の窪みは城郭に付随する堀切と評価することが可能である。

以上のように見ると、丘陵頂部を中心とした南北にⅠ～Ⅲの平坦面（曲輪）が並列し、この曲輪群に取り付く南側と北側を堀切群によって防御する構造を読み取ることが出来る。

（3）まとめ

近世以降の墓地などの改変を受けてはいるが、城郭遺構は地表面で観察でき、都市部に位置する丘陵部の城郭としては、良好に残存するものと考えられる。

また年代については、発掘調査の中で 12 ～ 13 世紀の陶磁器等も出土してはいるが、それらは築城以前に何らかの遺跡が存在したためと考えられ、城郭遺構については通常考えられているように、15 ～ 16 世紀の戦国時代のものであると考えられる。

城主等については、文献等を精査していないために現状では不明であるが、比高差の低い立地と小規模な曲輪群から構成される縄張りから見て、戦国時代に西金田の地に根付いた小領主の居館的な性格を有する城郭であると考えられる。

今回の検討により、当該地が中世城郭であったことは確実だと考えられるが、今後は、周辺の城館との比較や文献等の調査により、さらに詳細に検討を進めていきたい。



第 59 図　城郭遺構縄張り図（1/1,000）九州歴史資料館調査・作図

Ⅳ　城山横穴群の調査成果

１．横穴式石室墳

今回の調査では、横穴式石室墳を１基（1 号墳）確認した。この横穴式石室墳は直径 14m の円墳で、墳丘は赤褐色土と黒色土の互層盛土によって構築される。羨道部側は未掘であるため確認できていないが、確認した玄室の規模や墳丘規模から見て単室構造であることは間違いない。石材は比較的小型の花崗岩を使用しており、平面形態は若干胴が膨らんだ形状である。覆土中から須恵器、土師器、鉄鏃、耳環が出土しており、このうち玄室内床面（一次敷石）直上で出土した須恵器坏身の型式から、この古墳の時期は 6 世紀後半に位置付けられる。

遠賀川流域でこれまでに調査された横穴式石室墳と比較した場合、規模や構造、出土品の面でも優位性を見ることはできず、6 世紀後半頃の古墳としては一般的な小規模円墳として位置付けることができる。

２．横穴墓（有墳丘横穴墓、無墳丘横穴墓）

今回、丘陵一帯の踏査及び一部確認調査を行った結果、現状で 222 基の横穴墓と、これに付随すると思われる 12 基の墳丘を確認した。

（１）横穴墓の構造

ａ　平面形態（第 60 図）

方形、横長方形、縦長方形、小型の不整形プランの 4 者に分類できる。方形プランは玄室長×玄室幅が 1：1.1 の比率以内に収まるもの、横長方形プランは玄室長×玄室幅の比率が 1：1.1 を超えるもの、縦長方形プランは玄室長×玄室幅の比率が 1.1：1 を超えるものとした。

今回の調査で時期が判明した横穴墓は、方形プランがあり、小形不整形プランは Y16 のように玄室が整わず台形や巾着形を呈するものである。Y124（6 世紀前半～中頃）・Y181（6 世紀末～7 世紀初頭頃）・Y41（7 世紀初頭頃）、横長方形プランでは Y133（6 世紀後半～末）、縦長方形プランでは Y199（7 世紀初頭頃）がある。

遺物による時期比定が可能な例は少ないが、平面形態では横長方形プランのものが古く、縦長方形プランのものが新しい時期に位置付けられる傾向があり、また方形プランは各時期を通じて認められる、という傾向がうかがわれる。

なお、Y124 の羨道は、遠賀川流域の古いタイプの横穴墓の特徴とされる細く短い特徴を持つ。

また第 60 図から、玄室規模では 2 つのグループに大きく分けることができた。玄室長もしくは玄室幅が 2m を超えるものでひとつのまとまりが見られる。このグループは北側丘陵に偏っており、北側丘陵に見られる墳丘の存在とも関連するものと思われ、玄室規模と墳丘の有無との間に相関関係があることが見て取れる。

ｂ　床面構造

①　敷石

敷石は Y156、Y183 の 2 基で検出したが、それ以外の横穴墓には見られず、普遍的に行ってい

るという訳ではない。Y156 では拳大の石材を使用して全面に敷き詰められており、2 面あることを確認した。Y183 では拳大よりやや大きめの扁平な石材を使用しており、やはり 2 面あることを確認した。

Y156 は出土土器がなく時期は不明であるが、Y183 は出土土器から 6 世紀末から 7 世紀後半の埋葬利用が想定される。Y183 の一次敷石、二次敷石の時期は、出土遺物がすべて玄室左隅部に片付けられた状態であった。追葬の際に片付けたものと思われ、少なくとも二度以上にわたって追葬が行われていたことが判る。

② 排水溝

Y124、Y133、Y181 の 3 基で検出した。Y124（6 世紀前半～中頃）は四周に巡り、Y133（6 世紀後半～末)、Y181（6 世紀末～ 7 世紀初頭頃）では壁に沿って部分的に確認することができた。それ以外の横穴墓では排水溝は確認していない。

③ 屍床

当横穴群では、明確に屍床と呼べるものは発見できていないが、Y124、Y164 で玄室中央部が 1 段高くなる構造のものを検出した。Y124（6 世紀前半～中頃）は排水溝に囲まれた中央部が 1 段高く、Y164 は玄門部で玄室床面が若干高くなる構造であった。

これらの床面構造の明確な時期変遷は、出土土器が少なく、不明である。

ただし、敷石は掻き出された可能性も否定できないものの、南側丘陵の横穴墓でのみ検出したことは注目される。

c 天井部

当横穴群では、天井部が半球形を呈するドーム型が主体となる [(1)]。

天井部に軒先線の表現があるものは、Y41、Y114、Y219 の 3 基確認した。

Y47 では奥壁、前壁側がほぼ垂直に立ち上がり、断面形態がかまぼこ型に近いものを検出した。これは、アーチ型天井に含めてよい形態である。

d 閉塞

当横穴群では、板石による閉塞と塊石による閉塞の 2 者が確認できた。

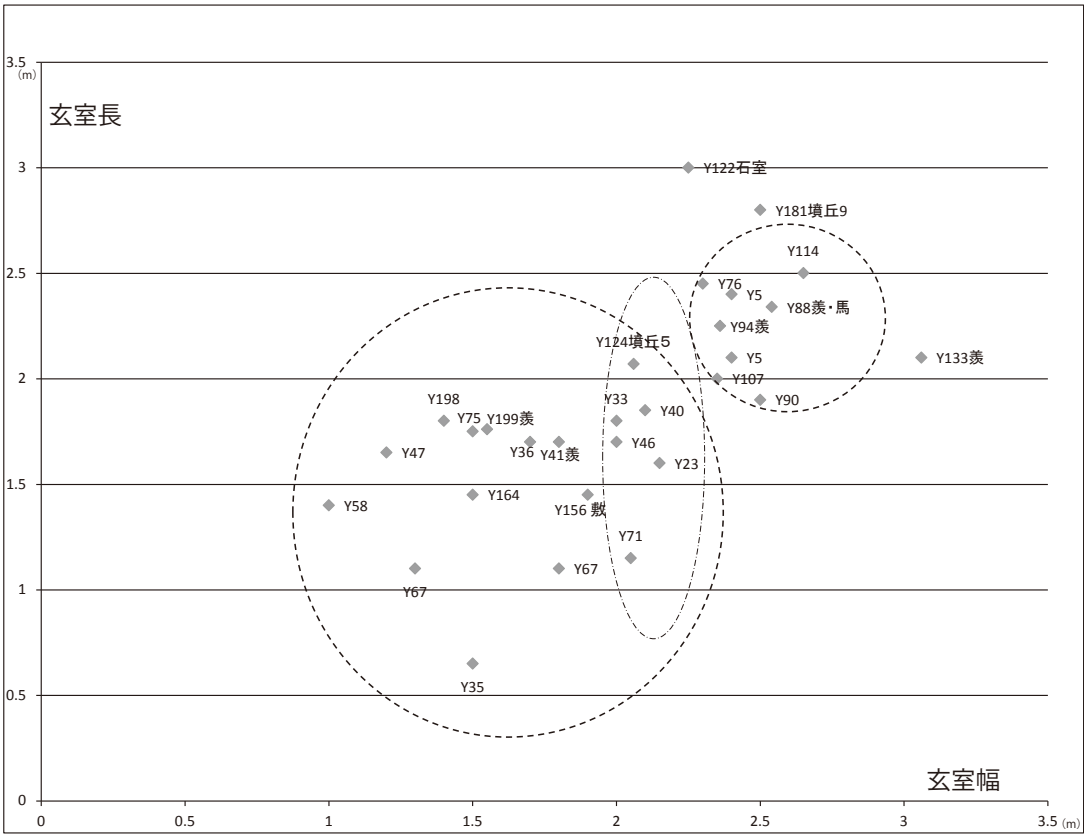
板石による閉塞は Y23、Y44、Y46（庇石が落下した可能性もある)、Y124（6 世紀前半～中頃)、Y90、Y148、Y160 で検出した。

塊石による閉塞は Y25（6 世紀後半～末）でのみ検出した。

e 羨門部の石組

大きく分けて 2 つのタイプが見られる。一つは羨道の側壁を構築し、天井石を架構するもので、Y68、Y88、Y94、Y163、Y169、Y41（7 世紀初頭前後)、Y133（6 世紀後半～末)、Y147（6 世紀末～ 7 世紀初頭頃）の 8 基で確認した。Y41、Y133、Y147 では最下段が石材ではなく、地山を整形し側壁を構築する。

もう一つは地山整形を行い、上部をテラス状に加工して庇石を架構するもので、Y96、Y149、Y87、Y160、Y180、Y199（7 世紀初頭頃）の 6 基確認した。この中で Y87 はテラスのみで石材



第 60 図　城山横穴群玄室規模分布図

は残存していないが、テラスの形状から本来は石材が存在したものと想定される。

石材で羨道の側壁を構築するものが時期的に若干先行し、当横穴群の羨門部石組出現は丘陵全体に造墓が広がる時期、6 世紀後半以降である。羨門部石組は北側丘陵では南半部分の西側斜面にのみ分布し、南側丘陵では丘陵全体に分布する特徴がある。

f　墳丘

今回の調査で横穴墓に伴う墳丘を 12 基確認したが、当横穴群の横穴墓数 222 基のうち 5%の割合を占める。墳丘は主に北側丘陵北半部分で 10 基確認し、南端部分で墳丘 2 基を確認した。北側丘陵中央部付近の中世城郭の土塁中から古墳時代の須恵器片が出土したことから、後の中世城郭の際に削平されたと考えられる北側丘陵中央部付近に横穴墓に伴う墳丘が存在した可能性が高い。

墳形は、すべて円形を基本で、10m 以下のもの（墳丘 1、2、3、4、12）、10m を超えるもの（墳丘 5、6、7、8、9、9'、11）がある。

墳丘 9 は南北径 15.3m、東西径 12.45m の楕円形を呈し、当横穴群中最大の墳丘である。トレンチ及び周辺部で墳丘樹立の可能性がある埴輪片が採集された。Y181 と墳丘 9 との位置関係、また Y181 出土遺物は 6 世紀末から 7 世紀初頭頃、埴輪の時期が 6 世紀後半以降であることから、墳丘 9 の主体部は東側に開口する Y181 と想定される。

Y181 東側に位置する Y109、Y111 は各々の墓道を切り合う状況は確認できないが、Y181 を中心に墳丘 9 を意識して構築された可能性がある。

墳丘 5 は南北 11.3m、東西 10.17m の円形を呈し、盛土は黄褐色土を締め固めただけのものである。墳丘 5 では、Y124 以外東側に開口する横穴墓を確認していないことから、先の墳丘 9 とは

異なり一横穴墓に一墳丘の様相を示す。

横穴墓に伴う墳丘の盛土は、断面観察のできた墳丘 1、3、6、7、8 では墳丘 5 と同様の黄褐色土の単一層である。すべての墳丘を断ち割った調査を行っていないものの、盛土方法の違いより横穴墓に伴う墳丘と横穴式石室に伴う墳丘とで築造工法に差があることを確認した。

g　墳丘祭祀

墳丘確認トレンチ 3 で、数個体分に及ぶ須恵器片が出土した。これらは墳丘 6、7 に関連する祭祀遺構である可能性が高い。出土した須恵器大甕はトレンチの範囲で 11 個体分を数える。またトレンチ南側のテラス状となった部分の地山上から、須恵器短頸壺 1 点と須恵器高坏、坏蓋・身のセットを 8 個体分検出した。その中の 1 セットよりハマグリを 4 個発見した。墳丘での食物供献儀礼が行われた可能性を示す資料である。

h　副葬品

副葬品の中では、須恵器が多く検出された。その器種は、坏類が圧倒的に多く、提瓶、高坏、𤭯、平瓶などが少量発見された。破片での出土が多い甕片は斜面上や墓道から多く出土し、墳丘確認トレンチ 3 出土の須恵器大甕は墳丘祭祀に伴い破砕された可能性も考えられる。一方、土師器の割合は非常に少ない。今回の横穴墓の調査では、耳環などの装身具は出土しなかった。

特徴的な副葬品として大刀（Y68）、金銅装の馬具（Y88）、四耳の須恵器短頸甕（墳丘 5 トレンチ 3）、特殊器台（Y110）、埴輪（墳丘 9）が挙げられる。

Y88 出土の金銅装の金具については、円形飾金具、もしくは無脚雲珠とも呼ばれる馬具の一部であろう。裏面に革と見られる有機質が残存し、馬具の金具の中でも雲珠の可能性が高い。単体で出土することは稀であり、他の馬具とセットで出土することが通例であることから、他の馬具の副葬も行われた可能性が高い。

（2）時期変遷について（第 61 図）

今回確認した横穴墓では、Y124（墳丘 5 主体部・6 世紀前半～中頃）が最も古く、その後 6 世紀中頃～後半に Y25（南側丘陵西側斜面）、1 号墳（横穴式石室墳）、Y133（南側丘陵）、Y47 が築造される。6 世紀中頃までは北側丘陵が築造の主体で、6 世紀後半から造墓数が増え始め、南側丘陵を含め丘陵全体へと展開し、6 世紀末～ 7 世紀初頭前に築造のピークを迎える。

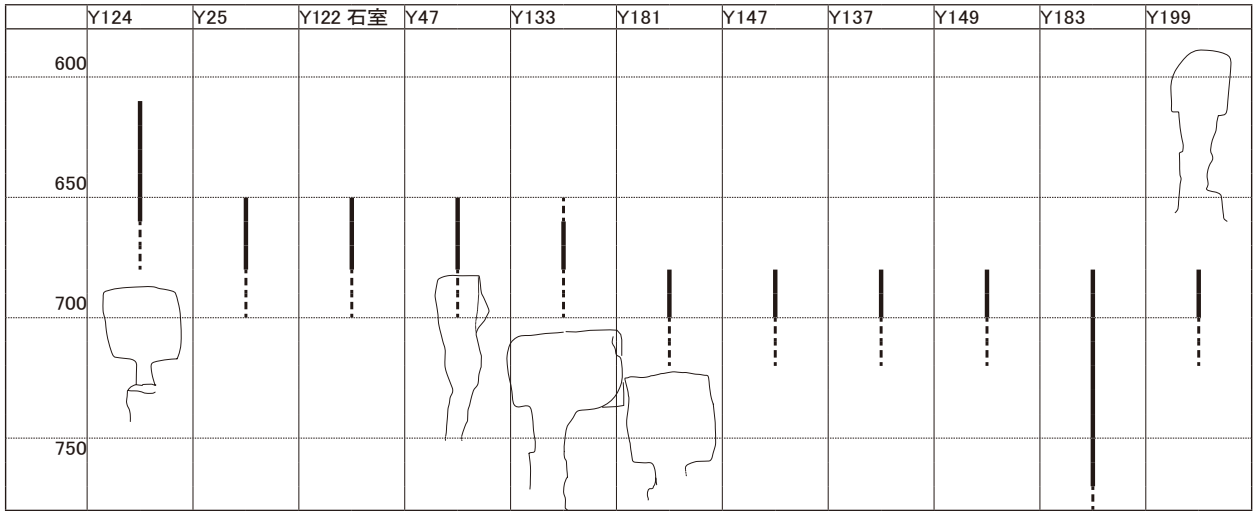
6 世紀末には、北側丘陵で Y181（墳丘 9 主体部）、南側丘陵では Y147、Y137、Y149、Y183、Y199 が築造され、Y183 の追葬時に片付けられた土器群から 7 世紀後半までは確実に追葬されていた。この Y183 は 7 世紀後半の須恵器を玄室隅に片付けていたため、その後の追葬も予想される。

調査が一部にしか及んでいないため限られた所見に頼らざるを得ないが、城山横穴墓群は 6 世紀前半から中頃に墳丘を伴った横穴墓の造営が北側丘陵において開始され、6 世紀中頃には南側丘陵にも横穴墓の造営が広がる。その後も両丘陵で造営が継続し、6 世紀末～ 7 世紀初頭頃に造墓のピークを迎える。造墓の終焉は明確ではないが、遅くとも 7 世紀後半以降まで追葬が行われる、ということになる。

（3）群構成（第 53・62・63 図）

南側丘陵の Y180 と Y219 の墓道前面では一連の平坦面を検出し、墓道を共有している。

北側丘陵の横穴墓でも、等高線に直行する短い墓道を Y25、Y41 で検出し、横方向の共有の墓



第 61 図　城山横穴群時期変遷図（平面図の縮尺任意）

道を持つことが予想される。南側丘陵の西側斜面は急斜面であり、斜面に平行に走る共有の墓道を持つことが予想される（第 62 図①）。

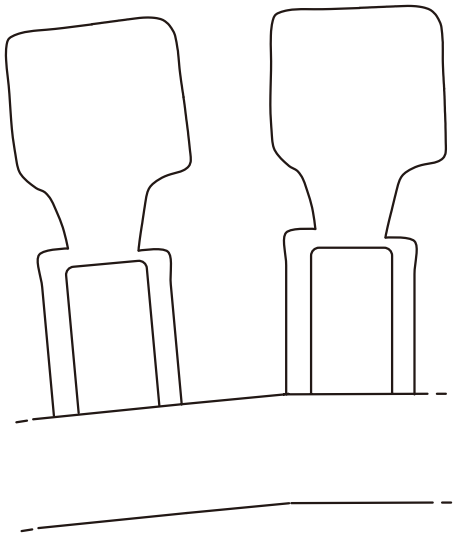
横穴墓の分布状況であるが、北側丘陵の西斜面は、後世の崩壊や開削により地形が改変されており、現在横穴墓の存在が確認できているのは丘陵頂部付近のみである。これに対し、墳丘 8 の南側、墓地のある辺りから重層的に横穴墓が分布する状況が伺える（第 59 図）。少なくとも 5 段にわたり、垂直に分布する状況が確認できる。同様の重層的に横穴墓が分布する状況は南側丘陵の西側斜面でも確認できる（第 63 図）。斜面の崩壊部分にも横穴墓が確認でき、現在分布が確認できない部分にも本来横穴墓が分布していた可能性もある。

Y181 では左側に横穴墓 2 基を確認し、これらは墳丘 9 を意識するように横穴墓が築造されている。Y181 との前後関係は不明であるが、一つの墳丘を共有して造墓を行ったことが窺われる。なお、墓道の共有は墓道の端部が前庭部状になる様相はないため、共有状況は確認できていない（第 62 図②）。

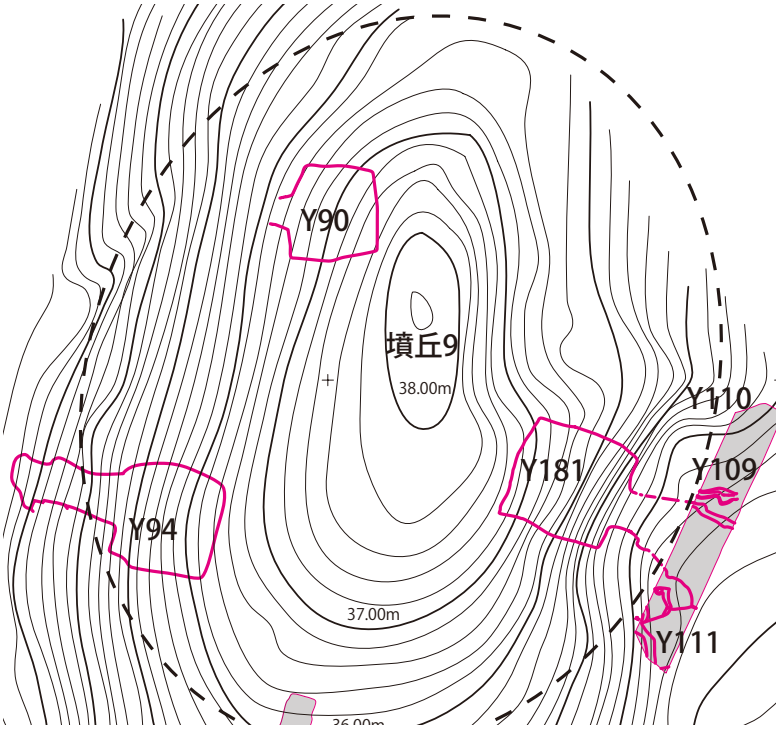
また Y181 南では、Y107 を中心に小型の横穴墓が左右に位置する。Y107 は当横穴群中で最大規模の玄室を持つ。

遠賀川流域では、群集墳の造墓活動がピークを迎える頃、一つの墓道を複数で共有し、墓道の付け根付近で切り合うものなど墓道を単位とするグループがあることが知られる。墓道を単位とするグループは、世帯ごとの造墓区域の制限などが考えられてきた。これは、主墓室｛築造当初の墓室、グループ内の造墓契機｝に対する副墓室｛主墓室の墓道を切って構築され、規模、造りともに劣る。主墓室より後出する場合、同時期の単独の主墓室と同等の規模・構造となるものがある｝、脇墓室｛墓道壁に構築される小型のものでほとんどが巾着型を呈する｝と呼ばれ、Y107 を中心とする関係と類似した様相である[(2)]（第 62 図③）。

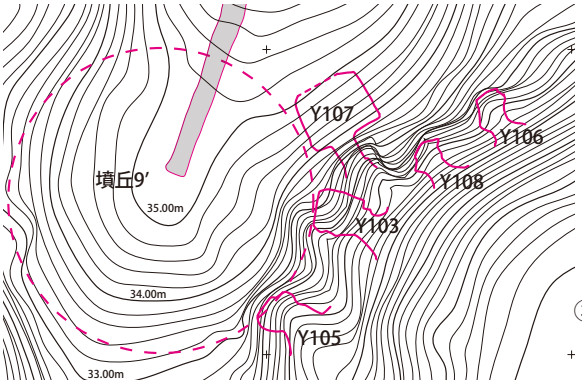
当横穴群においても遠賀川流域の他遺跡と同じく、主墓室・副墓室・脇墓室という三つの墓室構成によって横穴墓の造営が行われていたことが今回の調査で明らかとなった。



① Y180・219 墓道模式図



②墳丘 9 周辺横穴墓



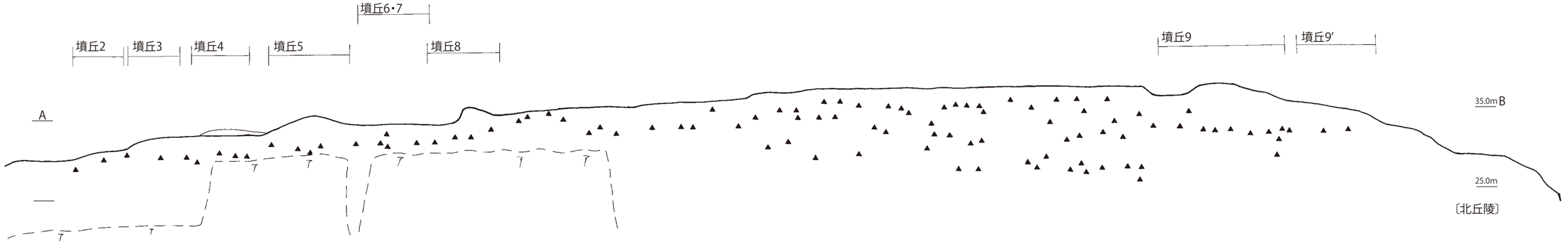
③ Y107 周辺横穴墓

第 62 図　城山横穴群 群構造模式図（縮尺任意）

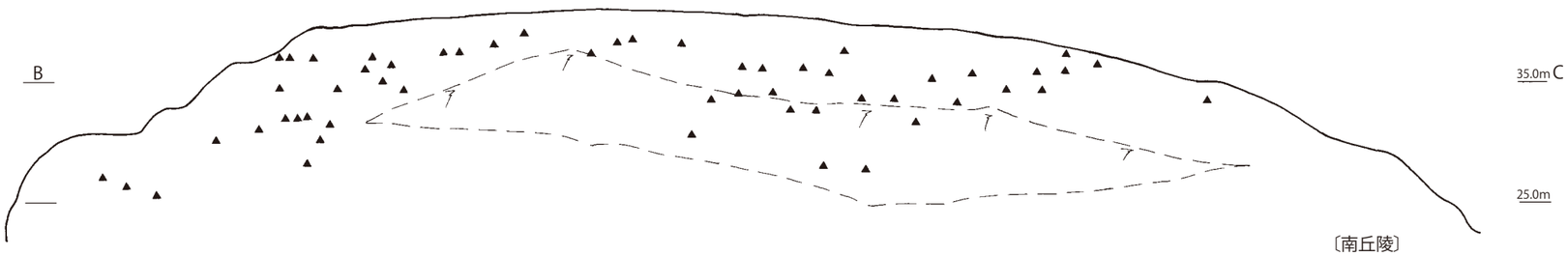
3．横穴式石室墳と横穴墓（有墳丘、無墳丘）の比較

城山横穴群では唯一、1 号墳のみ横穴式石室墳が見つかっている。圧倒的に横穴墓の数が多い中で、やはり横穴式石室墳の存在は明らかに異質である。この 1 号墳と他の横穴墓を比較した場合、立地の面では 1 号墳が丘陵の若干低い場所に造墓されているのに対し、横穴墓は丘陵頂部に立地する。立地の面では横穴墓の方が優位であると言える。玄室規模や構造を比較した場合、1 号墳の方が広く、優位であると言える。また当然ながら石室構築の際に石を運んで積み上げるという作業量の面でも、より多くの労力を費やしていると言える。墳丘構築技法上でも差があり、横穴墓の墳丘は単一層による盛土である一方、横穴式石室墳は互層に版築して盛土を積み上げている点、より複雑な作業を経て丁寧に構築されていると言える。出土品については既に盗掘等による撹乱を受けていることもあり一概には言えないが、1 号墳では須恵器、土師器の他に耳環や鉄鏃が出土しているのに対し、横穴墓からは須恵器、土師器の他に金銅装馬具や大刀、埴輪の出土が見られ、一応の優位性が認められる。

造墓の契機は横穴墓が先行し、丘陵一帯に広く展開する中、突如として 1 号墳が築造されており、石室墳はその後継続することなく造墓が途絶えている。両者の造墓背景にどのような差異があるのか現状では明確にできないが、現時点では両者に明確な階層差は見出しがたい。







第 63 図　城山横穴群丘陵西側斜面横穴墓垂直分布状況（1/500）

0　50　100m

4．中世城郭

丘陵頂部で検出した中世城郭遺構であるが、縄張りの状況から 15・16 世紀の戦国期の築造と考えられる。ただし、今回の調査では直接戦国期の城郭遺構に伴う遺物は発見できていない。

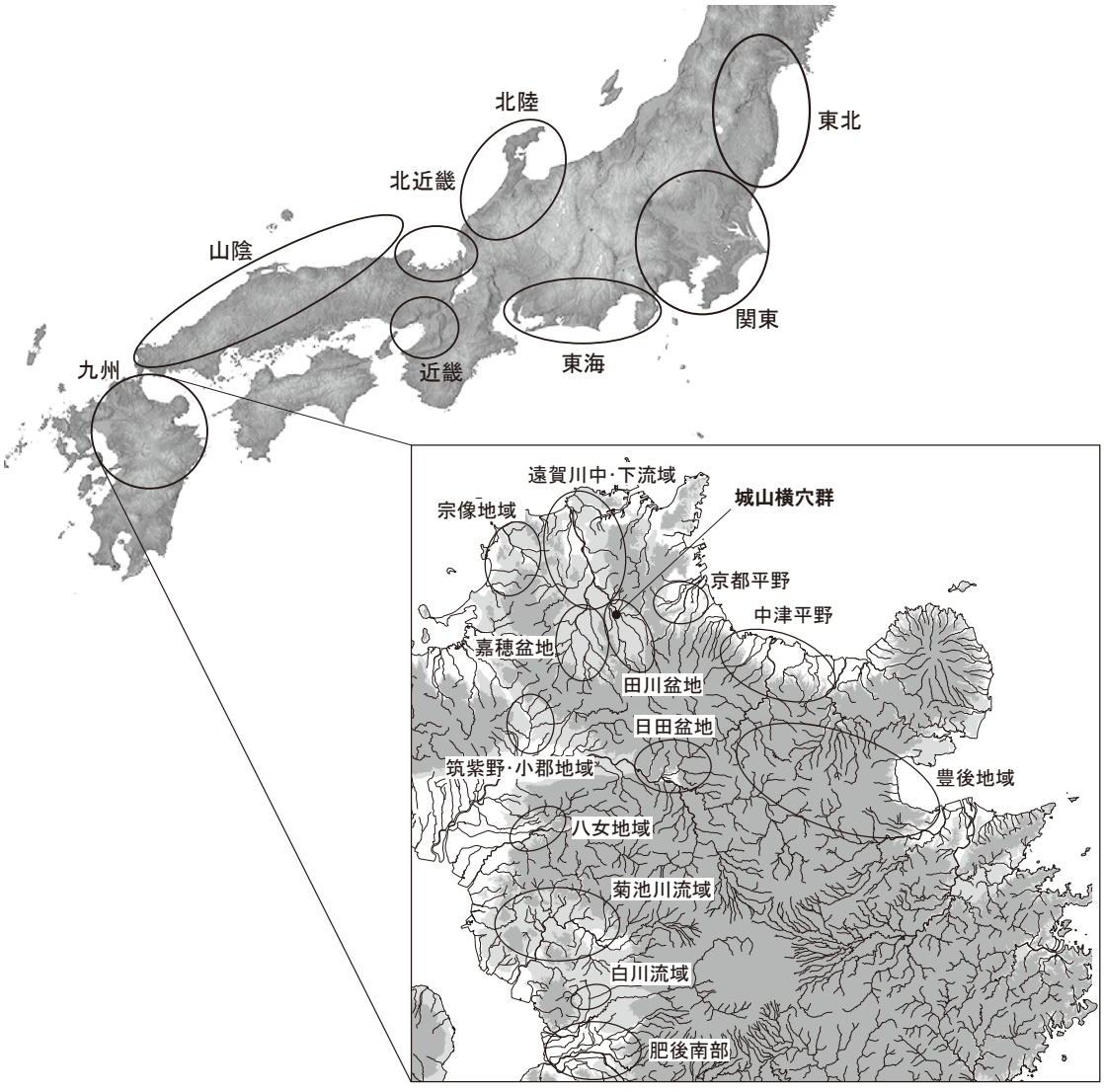
また、今回の調査では中世の城郭遺構にさかのぼる遺物が、北側丘陵の西側斜面で出土した。明確な遺構は検出できていないが、11 世紀末から 12 世紀にかけての比較的まとまった量の糸切りの土師器皿が出土、瓦器碗、龍泉窯系の青磁碗、輸入磁器、黒色土器などが出土し、古代末から中世にかけて丘陵が利用されたと想定される。

5．城山横穴群の位置付け

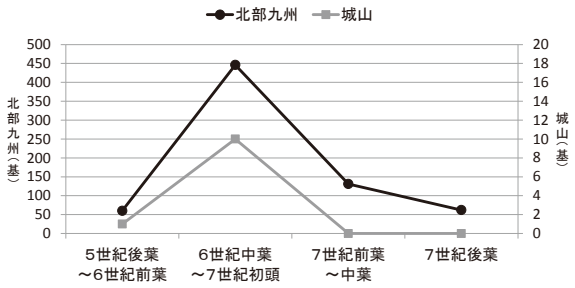
（1）はじめに

城山横穴群の調査では、総計 222 基の横穴墓の存在が確認され、そのうち十数基について内部構造が明らかになった。本遺跡は北部九州の中でも、あるいは全国的にみても横穴墓の分布が集中する遠賀川流域に位置する。本稿の課題は、北部九州各地と比較した場合の城山横穴群の横穴墓の諸特徴について検討を行うことと、城山横穴群が位置する遠賀川流域の横穴墓の全国的な位置付けを考察することである。

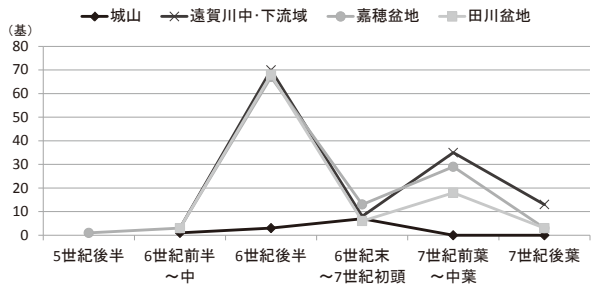
なお、本稿でいう遠賀川流域とは、嘉穂盆地から玄界灘に流れ込む遠賀川本流の流域と、支流の彦山川流域、つまり城山が位置する田川盆地とをあわせた地域の呼称として用いている。



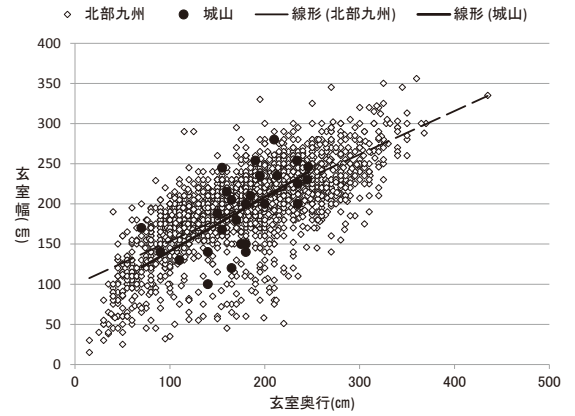
第 64 図　地域区分図



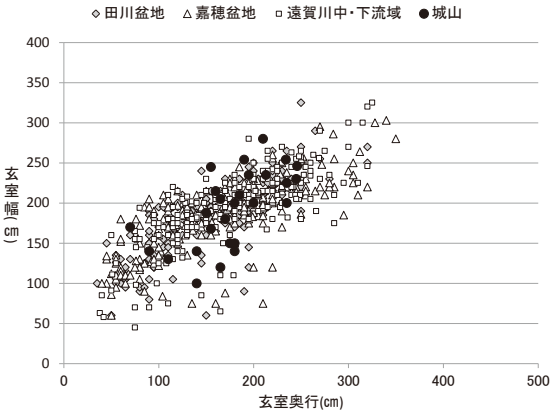
第 65 図 1　北部九州と城山の横穴墓数の推移



第 65 図 2　遠賀川流域各地域と城山の横穴墓数の推移



第 66 図 1　北部九州と城山の横穴墓の玄室規模



第 66 図 2　遠賀川流域各地域と城山の横穴墓の玄室規模

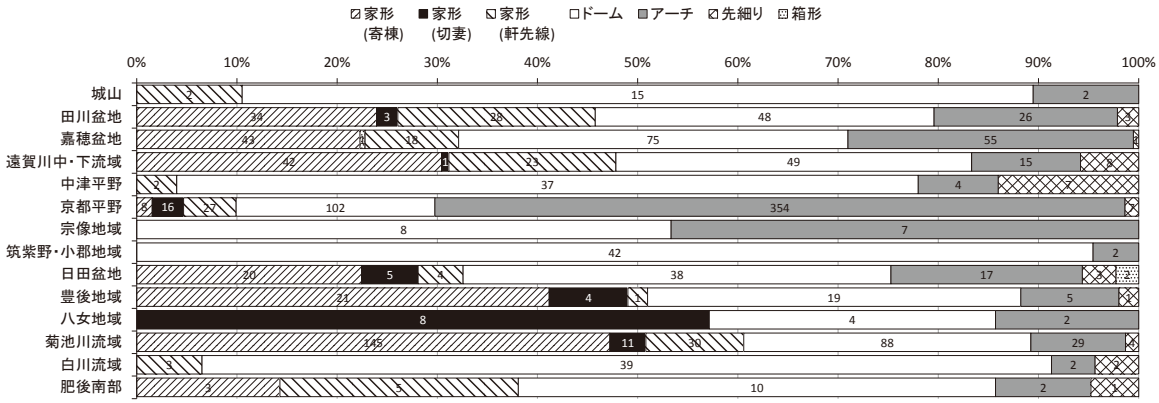
（2）北部九州における城山横穴群の位置付け

まず、北部九州の中での城山横穴群の横穴墓の位置付けについて検討を行う。以下の分析における地域区分は、第 64 図右下の地図に示した通りである。

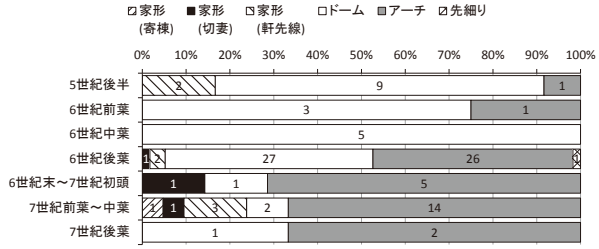
はじめに、時期的傾向についてみていく。城山横穴群で出土遺物などから時期が推定されている横穴墓は 11 基であり、その築造は 6 世紀前半～中頃に始まり、6 世紀末～ 7 世紀初頭頃にピークを迎える（本書第Ⅳ章 1 ～ 3）。北部九州全体の様相と対比すると、5 世紀後葉～ 6 世紀前葉に築造が開始し 6 世紀中葉～ 7 世紀初頭頃にかけて築造のピークを迎えるという点で傾向を一にする（第 65 図 1）。さらに、遠賀川流域を「遠賀川中・下流域」「嘉穂盆地」「田川盆地」の 3 地域に区分し、これらと城山横穴群の横穴墓の時期的推移を第 65 図 2 に示した。これをみると、城山では 6 世紀前半～中頃、つまり遠賀川流域内または城山横穴群が位置する田川盆地の中でも比較的早い時期に群の造営が開始しているといえる。また、遠賀川流域の各地域の横穴墓群の築造のピークが 6 世紀後半にあることに対して、城山横穴群は 6 世紀末～ 7 世紀初頭に最も築造数が増える。城山では時期を推定できている横穴墓の数が全体に対して少ないため断定はできないが、遠賀川流域全体の傾向よりも築造のピークが遅れる可能性を指摘しておく。

次に、横穴墓の構造的特徴についてみていく。城山横穴群では調査の都合上、床面まで完掘している横穴墓は多くないが、データを得られたものを用いて適宜検討を進める。使用する属性は、玄室奥行、玄室幅、天井形態、床面構造（屍床形態）、羨門部石組、墳丘の 6 つである。

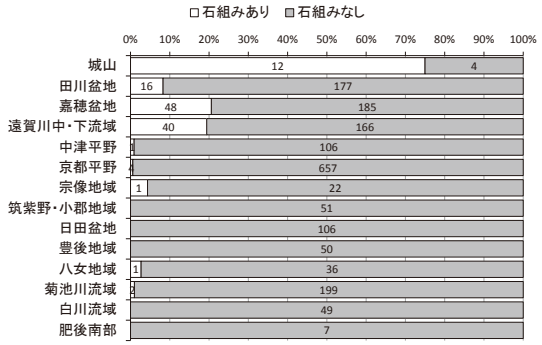
まず、玄室の奥行と幅について検討を行う。城山の横穴墓群では方形・横長方形・縦長方形・小形の不整形などの平面プランが確認されている。そこで北部九州内での城山の横穴墓の玄室規模・縦横比の傾向をみるために、玄室の奥行を横軸に、幅を縦軸にとってそれぞれの横穴墓をプロット



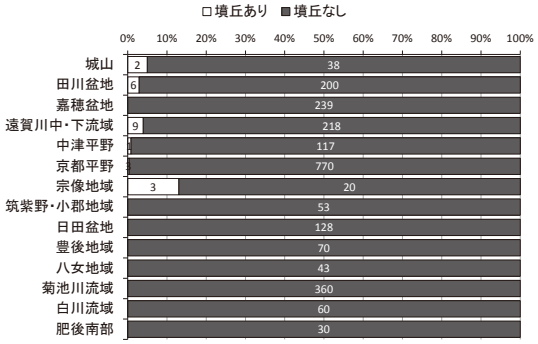
第 67 図 1　北部九州各地の玄室天井形態の存在比



第 67 図 2　中津平野・京都平野の玄室天井形態の時期的推移



第 67 図 3　北部九州各地域の羨門部石組の有無の比率



第 67 図 4　北部九州各地域の墳丘の有無の比率

した散布図が第 66 図 1 である。これをみると、城山の横穴墓は北部九州の横穴墓の変異幅におさまることがわかる。また、散布図の左上方に偏る傾向が強いことから、どちらかというと横長気味の玄室をもつといえる。遠賀川流域の各地域でも同様の傾向が認められることから（第 66 図 2）、城山の横穴墓は北部九州あるいは遠賀川流域の横穴墓の玄室の規模・縦横比の範疇におさまる。ただし、城山と北部九州とでそれぞれ近似曲線を引くと若干の傾向の違いが認められた（第 66 図 1）。すなわち、北部九州の方が城山よりも近似曲線が水平に近いことから、城山の横穴墓では玄室床面積が小さいものほど横長気味のものが多いという傾向が北部九州全体と比べて弱いということがいえる。

次に、玄室の天井形態についてみていく。天井形態は、「家形」「ドーム形」「アーチ形」「箱形」「先細り」の５つに区分できる。家形は、天井に棟や軒先線、垂木などを表現したもので、さらに「寄棟」「切妻」と軒先線のみを掘り込んで表現した「軒先線」に細分できる。ドーム形は、天井の縦断面・横断面共に中央が最も高い曲線を描くもので、アーチ形は縦断面のみ直線的になる蒲鉾のような形態を呈するものである。箱形は、横断面と縦断面がいずれも直線的で天井が平らなもの、先細りは、

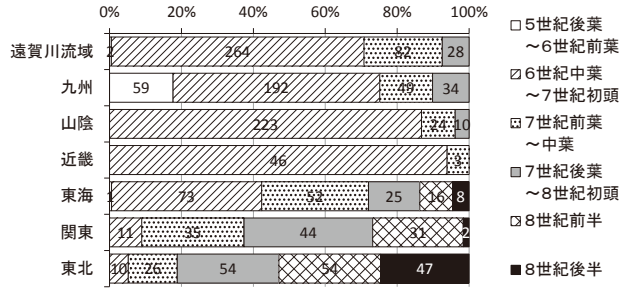
奥に向かって徐々に天井が低くなるものである。北部九州各地と城山横穴群について、天井形態の存在比を示したものが第 67 図 1 である。北部九州内でも地域によって様相が異なるが、城山のようにドーム形が主流をなすのは遠賀川流域よりも、むしろ中津平野や京都平野などの周防灘沿岸の地域や、宗像地域、筑紫野・小郡地域などに近い。特に、群の造営が先行する中津平野や京都平野で 5 世紀後半～ 6 世紀前葉頃にかけて造られた、いわゆる初期横穴墓でドーム形天井の割合が高い（第 67 図 2)。ゆえに、 6 世紀前半頃に造営が始まっていたと考えられている城山の横穴墓は、地理的に隣接する豊前の周防灘沿岸地域の影響を受けたものと推定される。

同じく玄室内部の構造を示す、床面構造（屍床形態）について検討を行う。城山では床面まで調査が進んだ横穴墓が少ないため、玄室床面の屍床形態が明確なものは敷石を有する Y156 と Y183 である。敷石の上に遺体を埋置したと考えられる横穴墓は、中津平野部の横穴墓群で 5 世紀後半から確認できる。また、城山で築造が本格化する 6 世紀中葉～ 7 世紀初頭にかけては、中津平野に加えて京都平野や田川盆地、嘉穂盆地、遠賀川中・下流域などで敷石を施すものが一定数存在する (拙稿 2011)。これらのことから、敷石を施すものが存在するという城山の特徴は周辺地域と傾向を一にしており、時期を考慮すると、天井形態と同様に中津平野など周防灘沿岸地域の影響を受けていると考えられる。

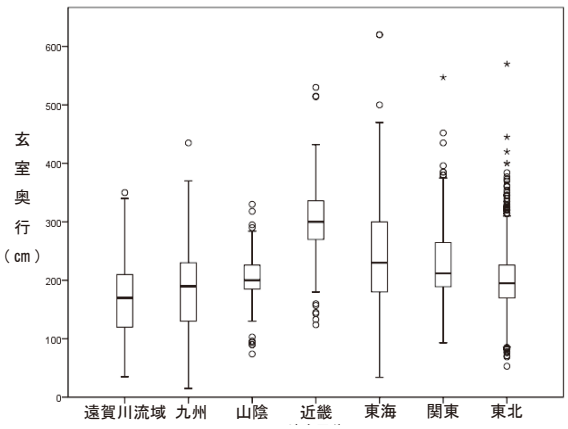
さらに、玄室外の構造である羨門部石組についてみていく。横穴墓の羨門部石組構造は遠賀川流域で多数確認されており、特に嘉穂盆地から遠賀川中・下流域に多く分布している (長谷川 1991)。北部九州各地の様相をみると、先学の指摘通り羨門部に石組構造を有する横穴墓が一定数存在するのは遠賀川流域の 3 地域であり、城山の横穴墓の傾向もこれと同様である（第 67 図 3)。さらに田川盆地で 16 基、全体の 1 割弱しか石組構造の横穴墓が存在しないことに対して、城山では現在のところ 12 基の 3 割と比較的高い割合で石組構造のものが存在し、より遠賀川本流の様相に近いといえる。

最後に、横穴墓に伴う墳丘の問題にふれておきたい。城山では確実に墳丘を伴うと考えられる横穴墓が 2 基確認されている。墳丘を有する横穴墓は、田川盆地、中津平野、京都平野の旧豊前国域と遠賀川中・下流域、宗像地域など旧筑前国の北部で確認できる（第 67 図 4)。墳丘は初期横穴墓の特徴であり (村上 1991)、 5 世紀後半～ 6 世紀前葉の横穴墓にみられるが、一方で 6 世紀中葉以降の築造が増加する時期にも認められる。城山で墳丘が確認された Y124 は 6 世紀前半～中頃、Y181 は 6 世紀末～ 7 世紀初頭の築造と考えられていることから、比較的遅い時期まで墳丘を伴う横穴墓が存在したことを示す資料といえる。

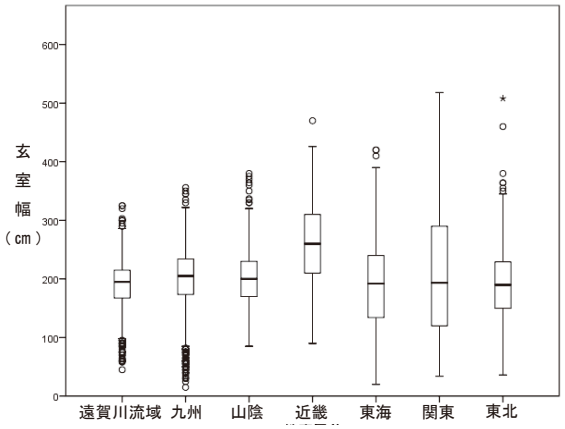
以上の検討より、北部九州全体の資料と比較した城山横穴群の横穴墓の特徴をまとめておく。時期については、北部九州全体や遠賀川流域の各地域の中でも比較的初期にあたる 6 世紀前半～中頃に築造が開始している。そして、敷石屍床を有する横穴墓の存在から推定できるように、京都平野や中津平野など周防灘沿岸からの影響を受けつつも、羨道部の石組のような特徴的な構造を有するという、遠賀川流域全体の横穴墓との共通性が認められた。また、遠賀川流域の中では田川盆地で周防灘沿岸の影響が強く認められることが先学で指摘されているが (長谷川 1991)、城山の横穴墓の玄室天井形態の傾向からは、先行して築造が開始する京都平野や中津平野の横穴墓群の影響を、田川盆地や遠賀川流域全体の中でも強く受けている可能性が指摘できた。



第 68 図　各地における時期ごとの横穴墓数と割合



第 69 図 1　各地の横穴墓玄室奥行の箱ひげ図



第 69 図 2　各地の横穴墓玄室幅の箱ひげ図

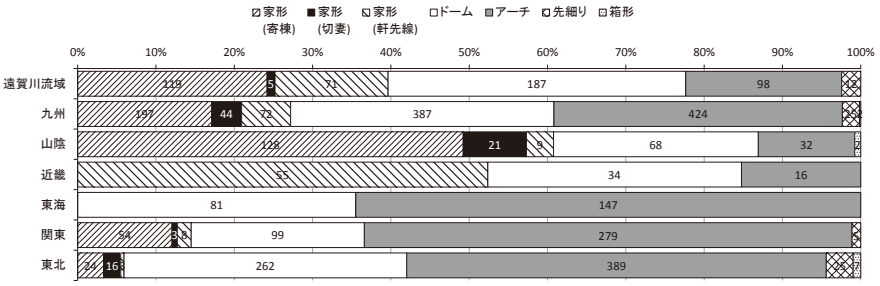
（3）全国的にみた遠賀川流域の横穴墓の位置付け

次に、城山を含む遠賀川流域の横穴墓の全国的な位置付けについて検討を行う。地域区分は、第 64 図左上に示した日本列島の地図に示したものに従う。ただし、北近畿・北陸と関東地方南西部の東京都・神奈川県の資料については全資料を把握できていないため、今回は分析から除いている。

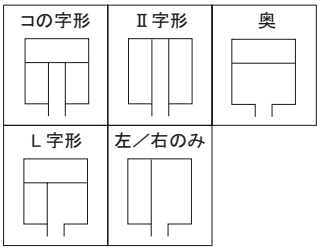
まず、（2）同様、各地の時期的推移をみていく。遠賀川流域とこれを除く九州地方、さらに全国の各地方の横穴墓数の推移を示したものが第 68 図である。地域によって横穴墓自体の総数や分析可能な横穴墓の数が異なるので、時期が確定できた横穴墓全体に占める各時期の横穴墓の割合を地域ごとに示した。これをみると、九州から近畿までは築造のピークが 6 世紀中葉～ 7 世紀初頭頃にあることに対して、そこから東海、関東、東北と東にいくにつれて 7 世紀あるいは 8 世紀に位置づけられる事例の割合が高くなる。 5 世紀後葉～ 6 世紀前葉に本格的に横穴墓の築造が始まっているのは九州地方であり、他の地域はこれよりも遅れる。遠賀川流域は九州から近畿までの地域と傾向を一にするが、九州の一部の地域よりは築造が本格化する時期が下るといえる。

次に、横穴墓の構造的特徴に着目した分析を行う。使用する属性は、（2）と同じ 6 つの属性、玄室奥行、玄室幅、天井形態、床面構造（埋葬施設）、羨門部石組、墳丘である。

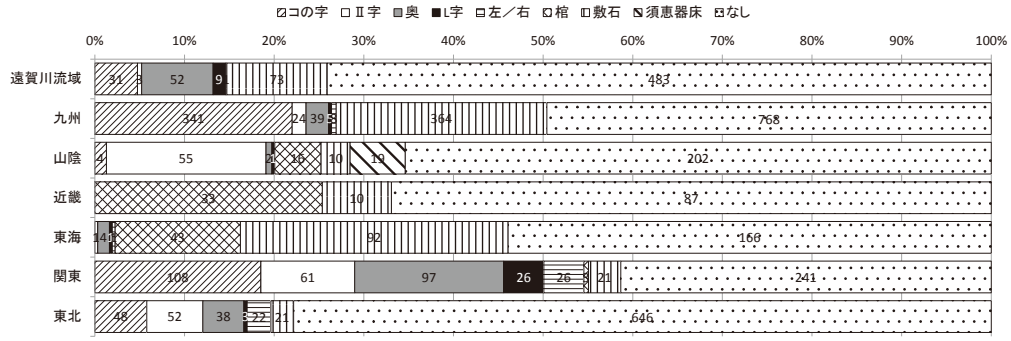
玄室奥行と玄室幅は、（2）と同じく散布図に示すと資料数が多くドットが重複し傾向が読み取れないため、地域ごとに玄室奥行・玄室幅の値の箱ひげ図を作成した。玄室奥行の結果（第 69 図 1）をみると、遠賀川流域の結果は全体の中でも比較的値が小さい部類に入ることがわかる。特に、近畿・東海・関東と比較すると奥行が小さい傾向にある。玄室幅について（第 69 図 2）は、近畿の横穴墓が他よりも幅が広いという以外、中央値に大きな差はない。ただし、遠賀川流域を含む九州から山陰の結果は近畿地方以東よりもばらつきが小さいといえる。以上より、遠賀川流域の横穴墓



第 70 図 1　全国各地の玄室天井形態の存在比



第 70 図 2　屍床形態分類概念図



第 70 図 3　全国各地の埋葬施設の存在比

は、玄室奥行が他地域のものよりも短い傾向にあり、玄室幅が他と大きくは変わらないことを加味すると、全国的に見てもやや横長気味のものが多い傾向にあるといえる。

次に、玄室の天井形態の検討を行う。（２）と同様に、遠賀川流域と各地域の天井形態の割合を示したものが第 70 図 1 である。遠賀川流域の横穴墓は、最も九州地方全体の傾向に近いことがわかる。ただし、九州全体の結果に比べると家形天井の割合が若干高いことが指摘できる。また、その他の地域と比較すると、家形の割合が６割強を占める山陰、軒先線のみを造り出すものとドーム形、アーチ形で構成される近畿、ドーム形・アーチ形で構成される東海などとは傾向が異なり、関東・東北に比べると家形天井の割合が高いことがわかる。このように、各地域で主流を占める天井形態は異なっており、これは横穴墓採用の際にどの地域から影響を受けているかが関係していると想定される。遠賀川流域では、家形天井のバリエーションで４割程度を占めるように、全国的にみても家形の割合が高い。

次に、埋葬施設を全国的にみると、①横穴墓掘削時に屍床を掘り込んだもの、②棺を用いるもの、③床面に石などを敷くもの、④何も用いないものあるいは痕跡が残っていないもの、の４つに区分できる。①については、さらに第 70 図２のように区分をして検討を行う。②については、石棺・陶棺・木棺や造付石棺などバリエーションが存在するが、遠賀川流域の横穴墓の全国的な位置付けという目的からすると、細分は必要ないと考えたため、一括して「棺」として扱う。③については、石を敷く「敷石」と須恵器を敷く「須恵器床」とに区分する。敷石については石の大小や敷く範囲によって細分が可能であるが、結果が煩雑になるため今回は区分しない。

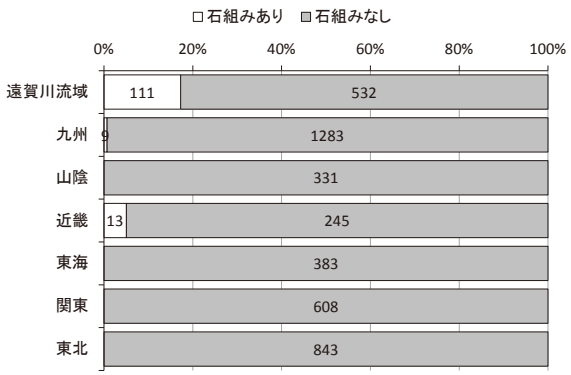
さて、遠賀川流域と各地域の埋葬施設の割合を示したものが第 70 図３である。遠賀川流域の横穴墓は埋葬施設なしが７割以上を占めるが、これを除くと、コの字形屍床・奥屍床・敷石屍床が主体をなすことがわかる。このような傾向は九州全体と類似するが、遠賀川流域では玄室の奥に奥壁平行方向の屍床を造り出すものの割合が高いことが特徴的である。また、山陰のように「なし」以外

ではⅡ字形の屍床・棺を用いるもの・須恵器床などの割合が高い地域、近畿や東海のように棺と敷石屍床が主体をなす地域とは、遠賀川流域の横穴墓は傾向を異にする。関東・東北地方では、遠賀川流域で主体をなしているコの字形屍床・奥屍床が一定数認められる。前者は、分布の中心が九州の熊本県にあり、ここからの伝播が議論されてきた。一方、後者の奥屍床は、遠賀川流域の横穴墓の特徴の一つとして認識されてきた (長谷川 1991)。奥屍床タイプの時期は、遠賀川流域が 6 世紀中葉～ 7 世紀初頭にピークをもつ (拙稿 2011) ことに対し、関東・東北地方では既述の通り横穴墓の築造自体が 7 世紀前葉以降に盛んになることからすると、奥屍床の採用は遠賀川流域で先行すると考えられる。関東・東北のものが遠賀川流域から伝播したと評価できるかどうかという点や、奥屍床タイプが若干みられる他の地域との関係など派生する問題は多いが、これは今後の課題としたい。

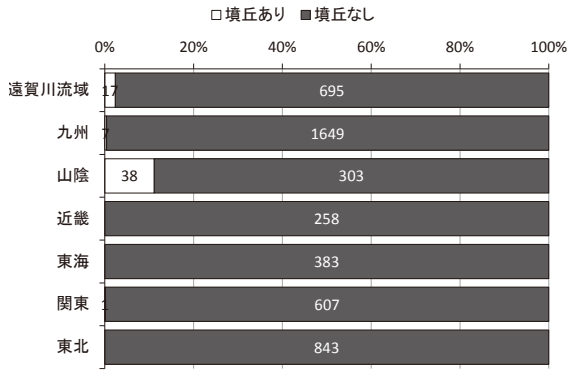
次に、羨門部の石組構造について検討を行う。遠賀川流域における石組構造を有する横穴墓の割合は、全国的にみても高く（第 71 図 1)、九州の他は近畿地方で一定数認められる。そして、近畿地方でも、万遍なくみられる訳ではなく、大阪府の高井田横穴墓群と奈良県の龍王山古墳群の横穴墓で確認されている。このような構造は、横穴墓の外観を意識したものであると考えられており (安村編 1992)、横穴式石室の構造の影響を受けた可能性が高い。また、本稿の分析に加えることはできなかったが、東京都の多摩川下流域左岸にも羨門部に切石組構造をもつ横穴墓の分布が認められ、横穴式石室との関係について言及されている（大西 2004)。遠賀川流域の横穴墓でも、羨門部の石組構造の他に、すでに検討した奥屍床タイプの埋葬施設やそこに掘り込まれる枕状の構造、玄室内の彩色壁画など、同地域の横穴式石室との構造の類似が認められる。また、龍王山古墳群では同一の墓域内に横穴式石室を主体部とする古墳と横穴墓が隣接して造営されており、やはり横穴墓築造の際に隣接する石室の構造を意識したことがうかがえる。城山横穴群でも、同一墓域内に横穴式石室と横穴墓が営まれていることから、群全体の様相の解明が、横穴墓の羨門部の石組構造の評価について議論を進められるきっかけになると考える。

最後に、横穴墓に伴う墳丘について検討する。墳丘を伴う横穴墓は、全国的にみると遠賀川流域を含む九州と、山陰地方にほぼ限られる（第 71 図 2)。九州内では特に遠賀川流域に集中することは既述の通りであるが、山陰地方でも墳丘を伴う横穴墓が相当数認められる。

そこで、遠賀川流域と山陰との比較をいくつかの観点から行う。遠賀川流域の墳丘が確認できる横穴墓は、城山の調査成果も含めて考えると、6 世紀前半頃～ 7 世紀初頭頃にかけて築造されたといえる。一方、山陰地方については、6 世紀前葉～中葉に山口県域で、6 世紀後葉以降に島根県東部から鳥取県西部のいわゆる出雲で確認できる。以上のことから、墳丘を伴う横穴墓はまず九州・山口地方で造られ、その後、出雲地域へと広がるという展開をみせるといえる。



第 71 図 1　全国各地の羨門部石組の有無の比率



第 71 図 2　全国各地の墳丘の有無の比率

次に、墳形についてみてみると、遠賀川流域の横穴墓に伴う墳丘の形態は、円墳もしくは前方後円墳である。他方、山陰地方では円墳、前方後円墳の他に、方墳、前方後方墳の事例も存在する。なお、本稿でいう山陰の中でも時期的に先行する山口県域の横穴墓の墳丘は、九州と同様円墳であり、方墳・前方後方墳などの事例は時期的に下る島根県東部から鳥取県西部のものといえる。つまり、時期的に先行する地域の墳丘は前方後円墳か円墳であり、山陰地方への横穴墓の展開の中で前方後方墳・方墳など特有の墳形が採用されたといえる。このような墳形のバリエーションは、それぞれの地域の首長墳の動向と連動していると推定される。例えば、九州では首長墳においても円墳・前方後円墳が主流をなすことに対して、出雲、特に東部では前方後方墳・方墳が首長墳に採用される事例が認められる。羨門部の石組構造の検討の際にも述べたように、墳丘についても横穴墓と各地の横穴式石室を主体部とする古墳との様相の類似が指摘できる。そして、このような類似関係は横穴墓を造営していた集団と首長層までを含む、階層をまたいだ墓の志向性の共有を示すと考えられる。

以上の検討結果から、全国的にみた遠賀川流域の横穴墓の特徴についてまとめてみたい。時期は、およそ西日本での傾向と一致し、各地に分布が広がる６世紀後半に築造が盛んになる。家形天井の割合の高さは、比較的丁寧な造りのものが多かったことを示す。また、羨門部の石組や墳丘を有する横穴墓が他地域と比較して多いなど、横穴式石室を主体部にもつ古墳の構造を意識した特徴が認められる。同様のことは、屍床の形態に石室との共通点があることからも指摘できる。このように、遠賀川流域の横穴墓からはその構造上、横穴式石室を主体部にもつ古墳との影響関係がうかがえる。

（４）おわりに

本稿では、城山横穴群の横穴墓と、これを含む遠賀川流域の横穴墓の全国的な位置付けを課題に検討を行ってきた。その結果、遠賀川流域の横穴墓は、同地域の横穴式石室構造の諸要素を取り入れつつ築造されたということを示すことができた。また、城山横穴群の横穴墓については、このような遠賀川流域の横穴墓と構造的特徴を共有しつつも、地理的に近い周防灘沿岸地域の影響を受けた田川盆地の特徴を示す可能性が高いといえる。以上のことから、城山の横穴墓は北部九州の中での地域間の影響関係の解明、ならびに遠賀川流域の横穴墓に特徴的であった古墳を造営した集団と横穴墓造営者集団との関係の解明にとって重要な資料を提供すると考えられる。今後の調査の進展による資料の増加を受けて、今回言及できなかった問題についても更なる検討を行いたい。

本稿は、日本学術振興会特別研究員奨励費「横穴墓からみた古代国家成立期における集団関係の研究」(課題番号：246114) の成果の一部である。

6. 福智町城山横穴群出土馬具等の保存科学的調査

（１）はじめに

福岡県田川郡福智町金田に所在する城山横穴群は、横穴墓群を中心とする遺跡であり、横穴墓群としては、福岡県下において最大級の規模である。

本稿では出土した遺物のうち、雲珠について、構造と材質、須恵器については付着する赤色顔料の種類を同定することを目的とし、保存科学的手法により調査を行ったので、以下、成果を述べていく。

（2）調査方法

雲珠については、表面に付着する土砂のクリーニングを概ね行った後、九州歴史資料館設置の文化財用X線CTスキャナ（装置名：YXRON International Y.CTPrecisionS以下、CT）により構造を調査した。

調査は雲珠を収納箱に入れ、梱包した状態でターンテーブルに載せた。線源とフラットパネルディテクタとのストロークを適切にとり、約5分かけて撮像し、断層像と三次元像を得た。

材質については、一部、錆が剥離し、金色部分が露出した部分について、蛍光X線分析法により、遺物に対して直接、含有される元素を定性的に分析し、表面の装飾方法の推定を行った。

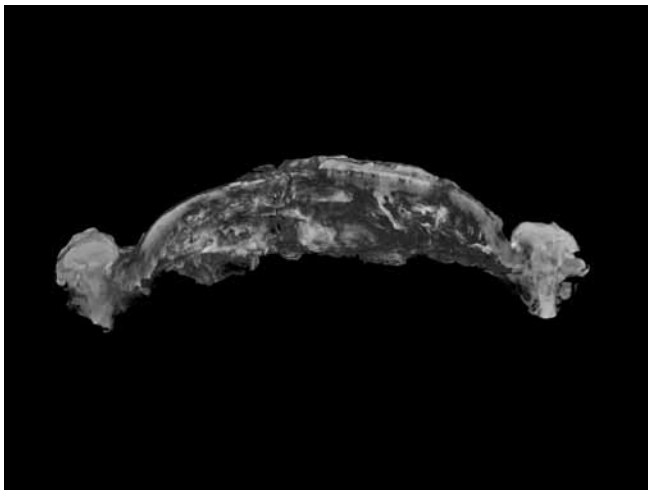
赤色顔料については、デジタルマイクロスコープを用いて、20～100倍程度の倍率で、顔料の付着状態を観察し、遺物本体が赤色を発しているのではないことを確認した。その後、顔料付着箇所を、蛍光X線分析法により、遺物に対して直接、含有される元素を定性的に分析した。赤色顔料の分析は、土壌等とのコンタミネーションを防止するため、その区別に厳正さが求められるが、本資料については、非破壊、非接触を条件としたため、表面観察を厳密に行うこととして、サンプリングは行わなかった。

蛍光X線分析法による測定は、九州歴史資料館設置のエネルギー分散型蛍光X線分析装置（SPECTRO MIDEX）を使用した。

（3）調査の結果

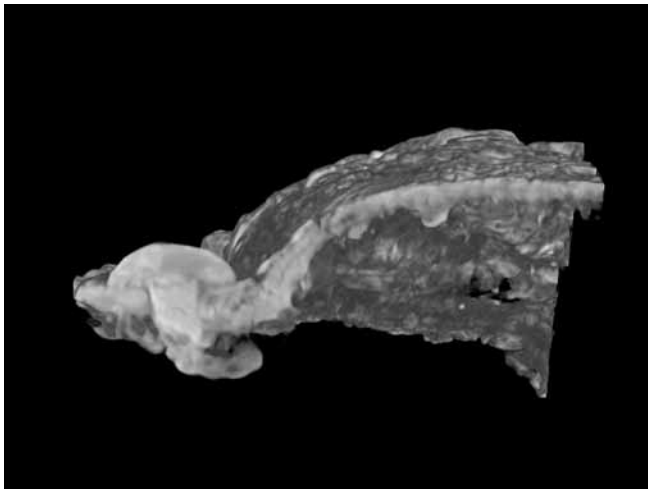
①　雲珠について

第72図に雲珠の三次元像を示す。本体に対する鋲留めの構造をみて取れることができる。一方、鋲部分を中心に上方の外形をみると、層状のラインが見て取れ、表面に本体とは別の金属が存在することがわかる。すなわち、鉄地の鋲に、何らかの装飾があることがクリーニングを行う前に確認できる。



第72図　雲珠の三次元像

次に第73図に、鋲部分を拡大した三次元像を示す。この画像からは、鋲の先端を折り曲げている状態が見て取れる。底部からこの周辺の表面を観察すると、材質は明らかではないが、何らかの有機質が残存している。この状況から推定すると、雲珠から派生する革帯を留めるために、折り曲げたものであろうか。



第73図　鋲部分の三次元像

材質については、第74図に、鋲頭部分の蛍光X線スペクトルを示す。推定にあたっては、主たる元素の存在を、検出されたスペクトルのピークから定性的に判断を行った。

明瞭に検出された元素は、鉄（Fe）、銅（Cu）、

金（Au）、水銀（Hg）であり、鉄地に、金銅で装飾されていることが推定できる。ほか、半球部も測定を行ったが、同様の元素が検出されており、この雲珠は、表面全体を金色で装飾していたことが窺える。

② 赤色顔料について

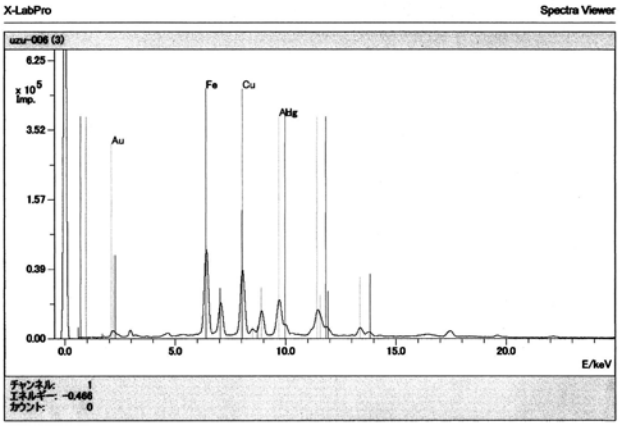
第 75 図に蛍光 X 線スペクトルを示す。

赤色顔料の場合、各種の顔料において、朱である場合、水銀（Hg）、ベンガラである場合、鉄（Fe）というように、それぞれに特徴づけられる元素が含まれている。これらの存在によって、簡易的ではあるが、顔料の種類の推定を行った。

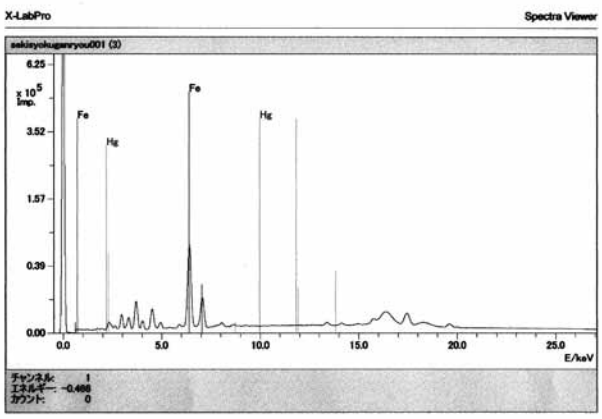
そこで蛍光 X 線スペクトルを見ると、鉄（Fe）が検出され、水銀（Hg）は検出されなかった。

したがってこの赤色顔料はベンガラであることが推定できる。

最後に、今回の調査の機会を与えていただいた、福智町教育委員会の井上勇也氏に末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。



第 74 図　鋲頭部分の蛍光Ｘ線スペクトル



第 75 図　赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル

註

（1）佐田茂 1975「九州横穴の形式と時期」『考古学雑誌』61 巻第 1 号により形態を分類した。

（2）長谷川清之 1991「遠賀川流域における横穴墓の研究」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集

参考文献

紙幅の都合上、分析に用いた遺跡の報文は割愛させていただきます。

長谷川清之 1991「遠賀川流域における横穴墓の研究」児嶋隆人先生喜寿記念事業会（編）『児嶋隆人先生喜寿記念論集 古文化論叢』 児嶋隆人先生喜寿記念事業会 465-505 頁

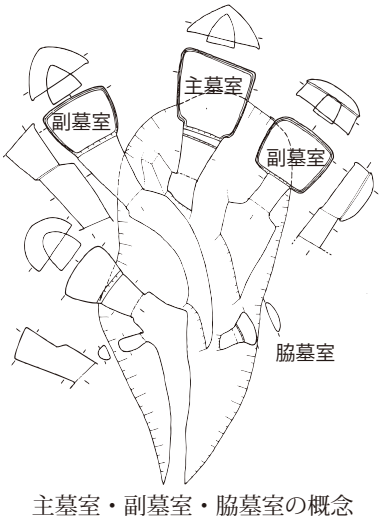
岩橋由季 2011「九州北部の横穴墓における形態的類似とその背景」『九州考古学』第 86 号　65-83 頁

村上久和 1991「北九州周辺の横穴墓 ―発生期の横穴墓をめぐって―」『おおいた考古』第 4 集　1-6 頁

大西雅也 2004「羨門部に切石組構造をもつ横穴墓について―多摩川下流域左岸の事例から―」『古代』177　107-120 頁

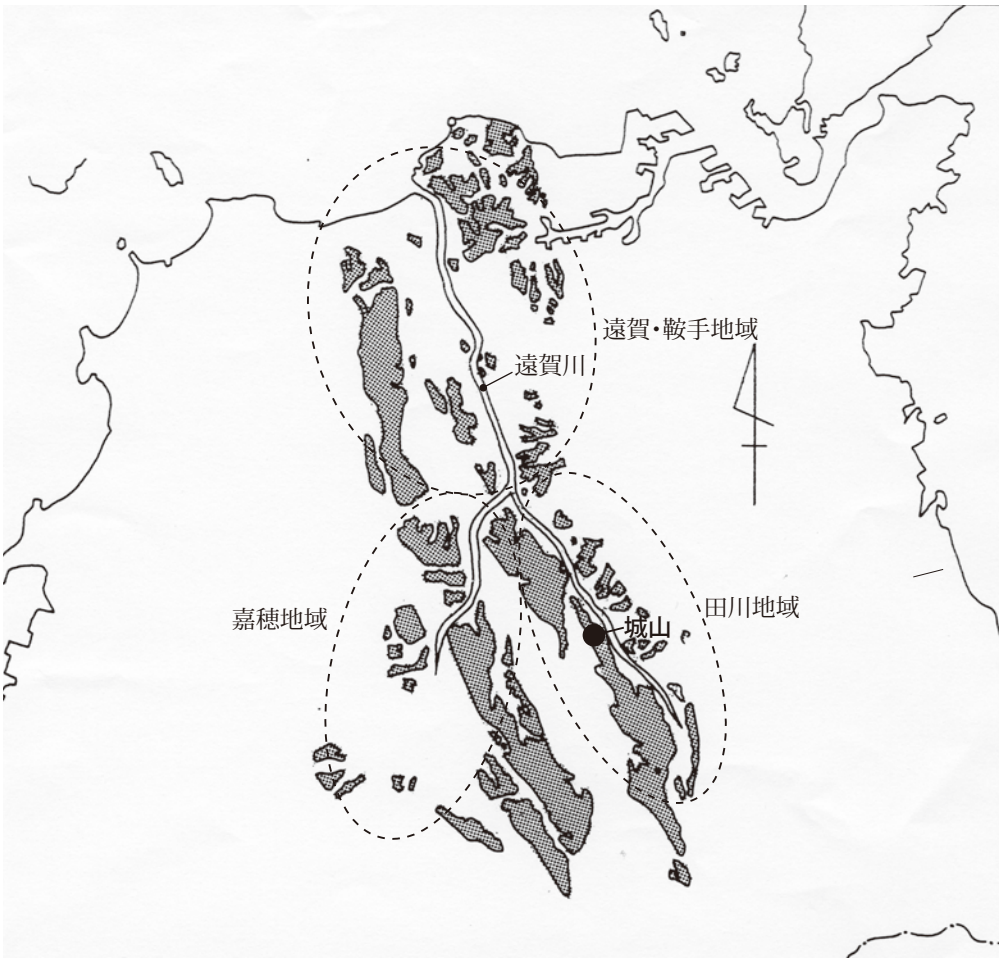
安村俊史編 1992『高井田横穴群Ⅳ―史跡高井田横穴公園整備事業に伴う発掘調査報告―』柏原市文化財概報 1992-Ⅱ　柏原市教育委員会

主墓室
築造当初の墓室、グループ内の造墓契機
副墓室
主墓室の墓道を切って構築され、規模、造りともに劣る。
主墓室より後出する場合、同時期の単独の主墓室と同等の規模・構造となるものがある
脇墓室
墓道壁に構築される小型のものでほとんどが巾着型を呈する
遠賀川流域を中心として、墓道を共有する横穴墓について使用される概念である。



主墓室・副墓室・脇墓室の概念

Ⅴ　総　括



第 76 図　遠賀川流域の古第三紀層分布状況と地域区分

1．城山横穴群の特徴

今回の調査成果及び特徴は以下のとおりである。

1）今回の城山横穴群の調査では、約 20,000㎡と限られた南北丘陵上で、横穴墓 222 基、横穴墓に伴う墳丘 12 基、横穴式石室墳 1 基、中世城郭を良好な保存状態で確認した。特に横穴墓については、表 1 にまとめたように、九州内で 200 基を超えるものは 4 例しかなく、その中でも当横穴群の分布密度は最も高く、九州の横穴群の代表的存在である。

2）丘陵全体の調査を行った結果、12 基の墳丘が確認された。従来から筑前地域や豊前地域では横穴墓に伴う墳丘の存在が数例知られていたが、今回の調査結果はその地域的特徴を顕著に示す事例として重要である。

3）北部九州では 5 世紀後半～ 6 世紀前半に横穴墓の築造が始まり、6 世紀後半～ 7 世紀初頭頃にピークを迎える。遠賀川流域では、遠賀・鞍手地域を中心として 6 世紀前半に横穴墓の築造が始まり、

6 世紀後半頭に築造のピークを迎える。その後、7 世紀前半にかけては築造を停止し、追葬行為が主体となる。当横穴群の初現は 6 世紀前半で、田川地域の中では最も古い。これまで、6 世紀中頃に横穴墓の築造を開始したとされてきた田川地域の横穴墓の初現時期を遡ることとなり、当地域の横穴墓築造時期を見直す結果となった。また築造のピークは遠賀川流域の諸事例と比較すると遅く、地域的動向とは異なる側面を有している。

4）当横穴群は、6 世紀中頃までは北側丘陵が築造の主体であったが、6 世紀後半から造墓数が増え始めると同時に、南側丘陵を含む丘陵全体へと展開し、7 世紀初頭前後まで横穴墓は築造される。7 世紀後半以降の追葬も想定される。このように、遺跡内で長期にわたって横穴墓が造営され、開始から終焉までの変遷過程を追うことができる当横穴群は貴重な事例である。

5）墳丘 6・7 間では、墳丘での祭祀行為をうかがわせる遺物が出土した。複数の須恵器大甕や短頸壺、また坏の中に納められた状態で出土したハマグリなどは、墳丘での食物供献儀礼を想定させる遺物である。古墳時代の祭祀行為の一端を知ることができる貴重な事例である。

6）墳丘 9 からは、墳丘に樹立されたと思われる円筒埴輪片が出土した。従来、横穴墓墳丘上での埴輪出土例は、近隣では田川郡大任町狐塚横穴墓群、飯塚市長浦遺跡の 2 例のみで、地域的に見て特色ある事例である。狐塚横穴墓群では前方後円形墳丘である 1 号墳から出土しており、同一横穴墓群中での階層的優位性が指摘されている。当横穴群においても、埴輪が出土した墳丘 9 は群中最大規模であり、その点でも他との階層差を想定することが可能である。

7）墓室の平面形態では、方形、横長方形、縦長方形、小型不整形の 4 者が見られることが判った。当横穴群は横長気味の玄室が多い傾向にあるが、これは遠賀川流域や北部九州の傾向と一致する。一方で、北部九州では玄室床面積が小さいものほど横長気味のものが多い傾向にあるが、当横穴群ではこの傾向が弱いという特徴がある。

天井形態についてはドーム形が主流をなすことが確認できた。この傾向は遠賀川流域よりもむしろ周防灘沿岸地域の特徴に合致しており、この地域の影響を色濃く受けたものと理解される。

当横穴群の所在する田川地域は周防灘沿岸地域に接しており、墓室に見られる特徴は遠賀川流域と周防灘沿岸の両地域の接点という当地域の地域性を明確に示すものであると言える。

8）羨門部入口に架構される石組構造は遠賀川流域に見られる地域的特徴であり、当横穴群はその代表的事例として重要である。

9）群構造については不明確な点も多く残るが、横穴墓前面の平坦面を共有する墓群、大型の横穴墓を中心にまとまりを持つ群、墳丘に対してまとまりを持つ群、西側の急斜面においては水平方向に 3 ～ 5 段に重層的に構築し、その段がそれぞれ墓道を共有する群等いくつかの群構成が想定される事を確認した。

10）調査の性格上、出土遺物は必ずしも多くはないが、それでも横穴墓の時期比定や変遷過程、横穴式石室墳との比較検討を行う上で有益な情報を得ることができた。上記の祭祀関連遺物や埴輪の他にも、金銅装馬具の存在は被葬者の階層的優位性をうかがわせる資料であり、須恵器四耳短頸甕は、類似例が出土した飯塚市池田横穴墓群とともに、地域間交流或いは地域的特性を予想させる重要な資料である。

２．城山横穴群の意義と今後の展望

城山横穴群は、横穴群が濃密に分布することで知られる遠賀川流域の諸横穴群の中でも、その地域的特性を顕著に示すものとして代表的な遺跡である。また、規模や密集度の点では全国的に見ても比肩する例は限られており、我が国を代表する横穴群として重要な価値を有している。加えて、地域間交流や階層差を想定させる重要な課題を提起しており、城山横穴群の存在が今後の当地域の歴史解明に寄与するところは大きい。

今後は城山横穴群の調査研究を更に進め、地域の歴史解明に努める一方、地域の人々にとっても誇れる遺跡となるよう、また地元の歴史を語れる場所となるよう取り組んでいく所存である。

最後になるが、城山横穴群に関わっていただいた地元の方々をはじめ、関係諸機関、学識経験者の方々に厚くお礼申し上げたい。

参考・引用文献

大森円 1997「豊前における群集墳造墓単位の分節過程」『古文化談叢』第 35 号　九州古文化研究会
小方泰宏 1990「横穴墓における造墓区域配分の様相」『研究紀要』4 号　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
遠賀川流域文化財学習会編 2007『遠賀川流域の横穴墓』 遠賀川流域文化財学習会
九州前方後円墳研究会 2001『九州の横穴墓と地下式横穴墓』
古後憲浩編 2002『新延野田遺跡群』鞍手町文化財調査報告書第 14 集　鞍手町教育委員会
杉本岳史 2002「遠賀川中下流域における新延野田遺跡群の位置付け」『新延野田遺跡群』鞍手町文化財調査報告書第 14 集　鞍手町教育委員会
田代健二 2001「豊前地方の横穴墓について」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』九州前方後円墳研究会
長谷川清之 1991「遠賀川流域における横穴墓の研究」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集
長谷川清之 2001「筑前東部における横穴墓の概要」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』九州前方後円墳研究会
長谷川清之 2007「横穴墓の羨門部構造」『遠賀川流域の横穴墓』 遠賀川流域文化財学習会編

表 1　横穴墓群の規模比較

筑前
157 遺跡

100 基以上	0
200 基以上	0
500 基以上	0

豊前南部・豊後 (大分)
229 遺跡

100 基以上	3（1.3%）
200 基以上	0
500 基以上	0

筑後
25 遺跡

100 基以上	0
200 基以上	0
500 基以上	0

日向（宮崎）
108 遺跡

100 基以上	1（0.9%）
200 基以上	0
500 基以上	0

豊前北部（福岡）
116 遺跡

100 基以上	11（9.4%）
200 基以上	2（1.7%）
500 基以上	1（0.8%）

肥後 (熊本）
290 遺跡

100 基以上	8（2.7%）
200 基以上	2（0.6%）
500 基以上	0

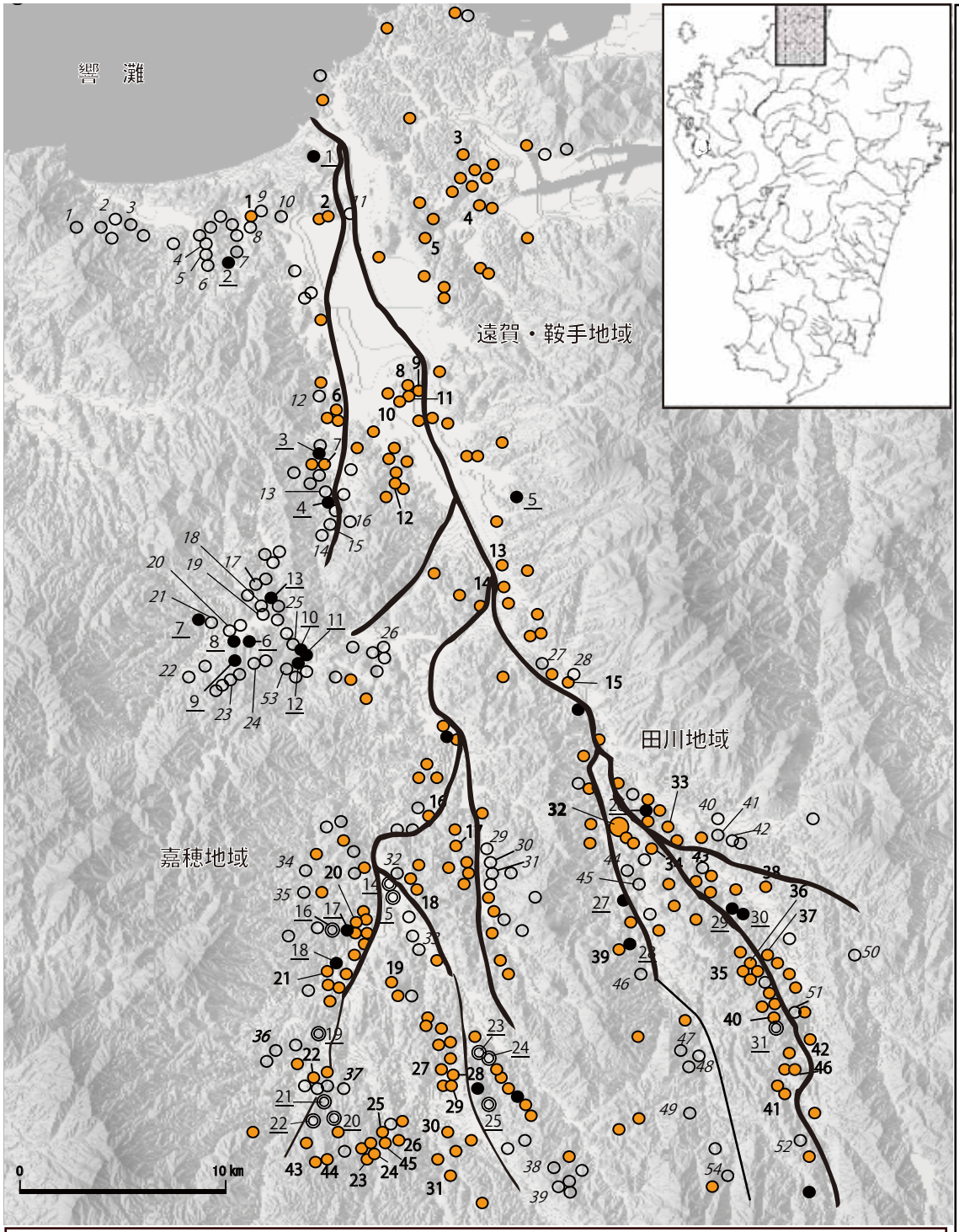
九州
926 遺跡

100 基以上	23（2.5%）
200 基以上	4（0.4%）
500 基以上	1（0.1%）

200 基以上の横穴墓群面積・横穴墓密度比較

遺跡名	面積	横穴墓の密度（㎡当）
城山横穴群（豊前）	約 20,000㎡	0.01
竹並横穴群（豊前）	約 370,000㎡	0.002
湯の口横穴墓群（肥後）	約 60,000㎡	0.0043
瀬戸口横穴墓群（肥後）	約 65,000㎡	0.003

※下部グループは上位グループを含む延べ数



主要な横穴墓群
（括弧内は基数）

1. 南ノ前 (45+)
2. 鬼津 (8)
3. 相坂 (17+)
4. 陣ノ原 (8+)
5. 松ヶ谷 (24+)
6. 古月 (40)
7. 新延野田 (25+)
8. 垣生羅漢山 (50+)
9. 中間中学校 (8+)
10. 瀬戸 (16+)
11. 宮田山 (12+)
12. 小牧西牟田 (38+)
13. 感田栗林 (15+)
14. 小野牟田 (6+)
15. 水町（70＋）
16. 山ノ谷 (1+)
17. 城腰 (6+)
18. 小池 (70+)
19. 池田 (55+)
20. 櫨山 (1)
21. 長浦 (1+)
22. 西ノ浦上 (42)
23. 八王寺 (20+)
24. 影塚 (98)
25. 二塚 (29)
26. 熊本 (10+)
27. 岩崎 (5+)
28. 宮ノ上 (5)
29. フシュウ山 (2+)
30. 才木 (1+)
31. 西郷 (20+)
32. 城山 (222+)
33. 清瀬 (10+)
34. 長谷池 (35)
35. 轟尾 (50)
36. 経塚 (150+)
37. 伊田狐塚 (16+)
38. 才立 (1+)
39. 狐ヶ迫 (50)
40. 狐塚 (80)
41. 稲荷山 (25+)
42. 大行事 (100)
43. 出雲 (30+)
44. 九郎丸 (20+)
45. 寿命隈東 (7+)
46. 無田山 (5+)

主要な横穴式石室墳：1. 大城大塚古墳　2. 野間古墳　3. 新延大塚古墳　4. 銀冠塚古墳　5. 野面古墳
6. 竹原八幡塚古墳　7. 里古墳　8. 竹原古墳　9. 小倉古墳　10. 金丸西ノ浦古墳　11. 金丸古墳
12. 損ヶ熊古墳　13. 中ノ浦号墳　14. 寺山古墳　15. 宮脇古墳　16. 山ノ神古墳　17. 山王山古墳
18. 小正西古墳　19. 森原 1 号墳　20. 天神山古墳　21. 王塚古墳　22. ホーケントウ古墳
23. 次郎太郎 1 号墳　24. 次郎太郎 2 号墳　25. 生島古墳　26. 伊方古墳　27. 岩屋古墳　28. 見立古墳
29. 猫迫 1 号墳　30. セスドノ古墳　31. 狐塚 1 号墳

主要な横穴式石室群集墳（括弧内は基数）：*1.* 海蔵寺 (15) *2.* 手野 (5+) *3.* 片山 (20) *4.* 菟キ坂 (13) *5.* 縄手 (12)
6. 東田 (20) *7.* 山田沖 (2) *8.* 高丸 (8) *9.* 南ノ前 (4) *10.* 尾崎天神 (3+) *11.* 島津塚の元 (2) *12.* 古門松ヶ元 (6) *13.* 安城 (11)
14. 長目崎 (2+) *15.* 高木 (4+) *16.* 向山 (6+) *17.* 百塚 (58+) *18.* 高平 (10+) *19.* 汐井掛 (45) *20.* 萩ノ浦 (5) 21. 小原 (15)
22. 宮永 (20) *23.* 鹿子馬原 (6) *24.* 上金生 (32) *25.* 下有木 (9) *26.* 龍徳 (5) *27.* 福地神社 (3) *28.* 水町 (4) *29.* 元吉 (8)
30. 大門 (8) *31.* 仁保 (4+) *32.* 川島 (20) *33.* 栗崎山 (4) *34.* 古野 (5) *35.* 伊川 (11+) *36.* 塚原 (27) *37.* 瀬戸 (9) *38.* 下益屋 (5)
39. 杉坂 (4) *40.* 夏吉 (40) *41.* 若八幡境内 (11) *42.* クナタ (2) *43.* 蔵ヶ原 (4) *44.* 松ヶ迫 (2) *45.* 窪田 (4) *46.* 古賀 (6)
47. 石橋池 (5) *48.* 西田原 (8) *49.* 太田 (4) *50.* 滑 (3) *51.* 建徳寺 (2)　*52.* 岩瀬 (5) *53.* 西屋敷 (26) *54.* 戸山原古墳 (2+)

凡例
◎は前方後円墳
●は大中型円墳
●は横穴墓群
○は高塚群集墳

第 77 図　遠賀川流域主要横穴系墓制分布図（柳沢一男氏提供資料を加筆）

横穴式石室墳

※数値は残存部及び確認時点でのものであり、追加調査等で変更されることがある。

遺構名	規模 (m)					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	出土遺物	時期	備考
	玄室幅	玄室長	玄室高	羨道幅	羨道長							
Y122	2.20	2.60	—	—	—	—	—	○	—	須恵器、土師器、鉄器、装身具	6 世紀後半頃	羨道部埋没、南東に開口、墳丘 10

横穴墓

遺構名	規模 (m)					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	出土遺物	時期	備考
	玄室幅	玄室長	玄室高	羨道幅	羨道長							
Y1	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y2	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y3	1.5	1.5	1.2	1.2	0.4	ドーム	×	—	平面不整形	—	—	大半が埋没　西に開口
Y4	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y5	2.4	2.4	1.3	0.8	0.8	ドーム	×	—	平面方形	—	—	大半が埋没、西に開口
Y6	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y7	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y8	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y9	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y10	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y11	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y12	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y13	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y14	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y15	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y16	1.5	1.1	0.9	0.8	0.4	—	×	—	平面小型不整形	—	—	大半が埋没、西に開口
Y17	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y18	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没

表 2　横穴式石室墳・横穴墓一覧表

表２　横穴式石室墳・横穴墓一覧表

遺構名	規模 (m)					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	出土遺物	時期	備考
	玄室幅	玄室長	玄室高	羨道幅	羨道長							
Y19	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y20	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y21	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y22	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y23	2.2	1.6	0.7	0.8	0.7	ドーム	×	—	平面横長方形 板石閉塞	—	—	大半が埋没、西に開口
Y24	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y25	—	—	—	—	—	—	×	—	塊石閉塞	須恵器・土師器	6 世紀中～ 後半頃	墓道を検出。長 1.8 m、幅 0.8 m、深 1.2 m、西に開口
Y26	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y27	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y28	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y29	—	—	—	—	—	—	×	—	—	土師皿	—	埋没
Y30	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y31	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y32	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y33	2.0	1.8	0.2	1.1	1.2	—	×	—	横長方形	—	—	大半が埋没、西に開口
Y34	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y35	1.7	0.6	0.2	1.1	1.0	—	×	—	袋状の小型横穴	—	—	大半が埋没、西に開口
Y36	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y37	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y38	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y39	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y40	1.9	1.8	0.7	1.5	1.0	—	×	—	横長方形	—	—	大半が埋没、西に開口
Y41	1.8	1.7	0.6	1.2	0.7	家形	○	—	軒先線有り	須恵器・土師器・瓦器 陶磁器	6 世紀末～ 7 世紀初頭頃	墓道を検出。深 1.2 m、端部は一段下がり階段状になる。西に開口

表２　横穴式石室墳・横穴墓一覧表

遺構名	規模 (m)					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	出土遺物	時期	備考
	玄室幅	玄室長	玄室高	羨道幅	羨道長							
Y42	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y43	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y44	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y45	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y46	2.0	2.4	0.7	0.6	0.3	—	×	—	羨門部に横長の板石、平面逆台形	—	—	大半が埋没、西に開口
Y47	1.2	1.6	0.5	1.0	1.6	アーチ	×	—	縦長方形	須恵器、土師皿、瓦器	6 世紀後半～末頃	大半が埋没、西に開口
Y48	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y49	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y50	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y51	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y52	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y53	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y54	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y55	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y56	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y57	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y58	1.0	1.4	0.2	0.4	0.6	—	×	—	平面縦長方形	—	—	大半が埋没、西に開口
Y59	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y60	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y61	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y62	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y63	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y64	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没

表2　横穴式石室墳・横穴墓一覧表

遺構名	規模 (m)					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	出土遺物	時期	備考
	玄室幅	玄室長	玄室高	羨道幅	羨道長							
Y65	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y66	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y67	1.1	1.1	0.5	0.7	0.7	—	×	—	平面不整形	—	—	大半が埋没、西に開口
Y68	—	—	—	—	—	—	○	—	—	大刀	—	埋没
Y69	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y70	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y71	2.0	1.7	0.7	1.3	1.2	—	×	—	平面横長方形	—	—	大半が埋没、西に開口
Y72	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y73	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y74	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y75	1.6	1.7	0.8	1.2	0.7	ドーム	×	—	平面縦長方形	—	—	大半が埋没、西に開口
Y76	2.3	2.4	1.0	1.0	0.6	ドーム	×	—	平面方形	—	—	大半が埋没、西に開口
Y77	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y78	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y79	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y80	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y81	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y82	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y83	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y84	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y85	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y86	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y87	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	埋没

表2　横穴式石室墳・横穴墓一覧表

遺構名	規模 (m)					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	出土遺物	時期	備考
	玄室幅	玄室長	玄室高	羨道幅	羨道長							
Y88	2.5	2.3	1.0	0.8	0.6	—	○	—	平面方形	金銅装馬具・鉄鏃	6 世紀後半〜	大半が埋没、西に開口
Y89	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y90	2.1	1.9	0.8	0.8	0.3	ドーム	×	—	横長方形 板石閉塞	—	—	大半が埋没、西に開口
Y91	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y92	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y93	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y94	2.4	2.3	0.9	1.3	1.2	ドーム	○	—	平面方形	—	—	大半が埋没、西に開口
Y95	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y96	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	埋没
Y97	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y98	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y99	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y100	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y101	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y102	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y103	1.4	0.9	0.8	1.0	0.7	—	×	—	平面袋状	—	—	埋没、東に開口
Y104	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y105	1.4	1.5	0.9	0.9	0.8	ドーム	×	—	平面方形	須恵器	—	大半が埋没、南東に開口
Y106	—	—	—	0.6	—	—	×	—	平面不整形	—	—	天井崩落、南東に開口
Y107	2.3	2.0	0.6	0.9	0.9	ドーム	×	—	平面方形	—	—	大半が埋没、南東に開口
Y108	0.8	0.8	0.5	0.7	0.8	ドーム	×	—	平面不整形	—	—	天井崩落、南東に開口
Y109	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	Y181・Y110 と同一テラスに並列、墓道非共有
Y110	—	—	—	—	—	—	×	—	—	須恵器、特殊器台	—	Y181・Y109 と同一テラスに並列、墓道非共有

表2　横穴式石室墳・横穴墓一覧表

遺構名	規模 (m)					天井部	羨門部 石組	墳丘	その他の特徴	出土遺物	時期	備考
	玄室幅	玄室長	玄室高	羨道幅	羨道長							
Y111	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y112	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y113	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y114	2.6	2.6	—	—	—	家形	—	—	—	—	—	入口不明
Y115	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y116	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y117	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y118	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y119	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y120	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y121	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y123	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y124	2.07	2.06	1.02	0.40	1.00	ドーム	×	○	平面方形 板石と塊石の閉塞	須恵器・土師器・黒色土器 陶磁器・石鍋	6 世紀前半～ 中頃	墓道幅 2.0 ～ 2.6 m、深 0.8 m、東に開口、 墳丘 5 主体部
Y125	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y126	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y127	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y128	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y129	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y130	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y131	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y132	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y133	3.2	2.1	0.8	1.3	1.8	ドーム	○	—	平面横長方形	須恵器	6 世紀後半	羨門外の石組まで 2.35 m 後世の改変が著しい、北に開口
Y134	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没

表2　横穴式石室墳・横穴墓一覧表

遺構名	規模 (m)					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	出土遺物	時期	備考
	玄室幅	玄室長	玄室高	羨道幅	羨道長							
Y135	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y136	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y137	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y138	—	—	—	—	—	—	×	—	—	須恵器	—	墓道長 1.7 m、幅 0.6 ～ 1.1 m、深 1.2 m、北西方向に開口
Y139	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	墓道長 1.8 m、幅 0.4 ～ 0.6 m、深 1.0 m、北西に開口
Y140	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y141	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y142	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y143	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y144	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y145	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y146	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y147	—	—	—	—	—	—	○	—	—	須恵器	6 世紀末～7 世紀初頭	墓道長 1.9 m、幅 0.8 ～ 1.2 m、深 0.3 m 北側で横方向の墓道へ接続、北西に開口
Y148	—	—	—	—	—	—	○	—	—	鉄刀	—	大半が埋没、北方向に開口
Y149	—	—	—	—	—	—	×	—	—	須恵器・土師器	—	墓道幅 1.4 m、深 0.3 m端部は階段状、横方向の墓道へ接続、北西に開口、Y220 に隣接
Y150	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y151	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y152	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y153	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y154	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y155	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y156	2.36	2.12	0.80	0.91	0.79	ドーム	×	—	敷石、平面横長方形	鉄鏃	—	北西に開口
Y157	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没

表2　横穴式石室墳・横穴墓一覧表

遺構名	規模 (m)					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	出土遺物	時期	備考
	玄室幅	玄室長	玄室高	羨道幅	羨道長							
Y158	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y159	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y160	—	—	—	—	—	—	○	—	板石閉塞	—	—	墓道長 1.6 m、幅 0.5 m、深 1.0 m、西に開口
Y161	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y162	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y163	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	埋没
Y164	1.87	1.43	0.80	1.19	1.05	ドーム	×	—	—	—	—	南東に開口
Y165	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y166	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y167	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y168	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y169	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	埋没
Y170	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y171	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y172	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y173	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y174	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y175	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y176	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y177	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y178	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y179	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y180	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	墓道長さ 2.8 m、幅 0.6 ～ 1.0 m、深 1.2 m、端部は階段状、横方向の墓道へ接続、西に開口

表２　横穴式石室墳・横穴墓一覧表

遺構名	規模 (m)					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	出土遺物	時期	備考
	玄室幅	玄室長	玄室高	羨道幅	羨道長							
Y181	2.44	2.46	1.16	1.39	0.63	ドーム	×	○	平面方形	須恵器・墳丘より埴輪	6 世紀後半以降	墓道幅 1.8 m、東に開口、墳丘 9 主体部 Y109・Y110 と同一テラスに並列、墓道非共有
Y182	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y183	—	—	—	—	—	—	×	—	敷石	須恵器・鉄鏃	6 世紀末～7 世紀後半	埋没、西に開口
Y184	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y185	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y186	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y187	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y188	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y189	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y190	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y191	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y192	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y193	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y194	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y195	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y196	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y197	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y198	1.4	1.8	1.1	0.9	1.4	ドーム	×	—	—	—	—	前面はテラス状になり、右に Y 199 が開口している。東に開口
Y199	1.6	1.8	0.8	0.75～1.1	1.6	ドーム	○	—	—	須恵器・土師器	—	前面はテラス状になり、左に Y 198 が開口している。東に開口
Y200	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y201	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y202	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y203	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没

表2　横穴式石室墳・横穴墓一覧表

遺構名	規模 (m)					天井部	羨門部 石組	墳丘	その他の特徴	出土遺物	時期	備考
	玄室幅	玄室長	玄室高	羨道幅	羨道長							
Y204	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y205	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y206	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y207	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y208	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y209	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y210	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y211	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y212	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y213	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y214	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y215	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y216	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y217	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y218	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y219	—	—	—	—	—	—	家形	—	—	—	—	墓道長 3.1 m、幅 1.0 ～ 1.5 m、深 0.5 m、端部は階段状、横方向の墓道へ接続、西に開口
Y220	—	—	—	—	—	—	×	—	—	須恵器・鉄刀	6 世紀末頃	墓道長 1.2 m、幅 1.3 ～ 1.6 m、深 0.5 m 端部は階段状、横方向の墓道へ接続、北西に開口、Y149 に隣接
Y221	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没
Y222	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	—	埋没

※数値は残存部及び確認時点でのものであり、追加調査等で変更されることがある。

図　版



1 . 墳丘 10 調査前
状況（西から）



2 . 墳丘 10・Y122
石室トレンチ掘削状
況（西から）



3 .Y122 石室
（北から）

図版 2



1. 墳丘 5・Y124
調査前状況
（西から）



2. 墳丘 5 盛土状況
（東から）



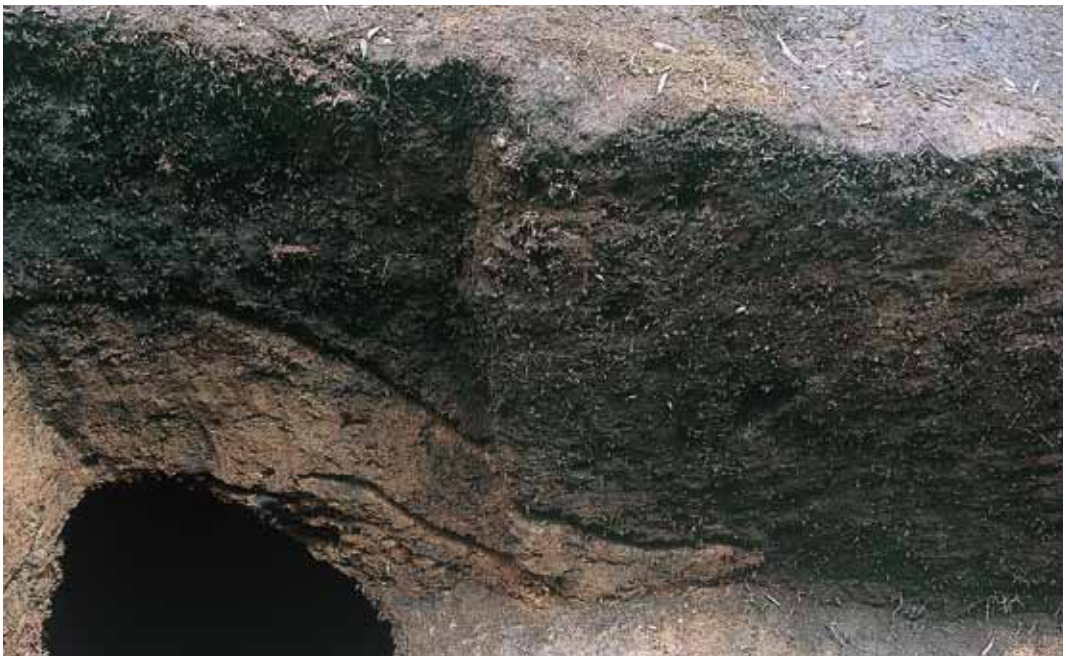
3. 墳丘確認トレンチ1
盛土状況（西から）



1. 墳丘確認トレンチ２
盛土状況（南から）



2. 墳丘確認トレンチ３
盛土状況（西から）



3. 墳丘５上部盗掘孔
盛土状況 (南から)

図版 4



1.Y124 墓道堆積状況
（東から）



2.Y124 墓道
（東から）



3.Y124 玄室右側壁
（東から）



1.Y124 玄室左側壁
（東から）



2.Y124 玄室奥壁
（東から）



3.Y124 玄門部
（内から、西から）

図版 6



1 .Y124 玄室床面
（東から）



2 .Y124 羨門部
（外から、東から）



3 . 墳丘確認トレンチ 4
堆積状況北側
（西から）



1. 墳丘確認トレンチ 4
堆積状況中央
（西から）



2. 墳丘確認トレンチ 4
堆積状況南側
（西から）



3. 墳丘 9 東テラス、
Y181（左）・
Y109（右）
（東から）

図版 8



1 .Y110 墓道遺物
出土状況
（東から）



2 .Y181 墓道
（東から）



3 .Y181 墓道堆積状況
（東から）



1.Y181 玄室奥壁
（東から）



2.Y181 玄室右側壁
（東から）



3.Y181 玄室左側壁
（東から）

図版 10



1.Y181 玄門部
（内から、西から）



2.Y41 羨門部
（西から）



3.Y46 羨門部
（西から）



1.Y88 羨門部
（西から）



2.Y133 玄室奥壁
（北から）



3.Y133 玄室右側壁
（北から）

図版 12



1 .Y133 玄室左側壁
（北から）



2 .Y133 玄室玄門部
（内から、南から）



3 .Y133 羨門部
(北から)



1.Y138(左)・Y139(右)
墓道（西から）



2.Y138 墓道
（西から）



3.Y138 墓道堆積状況
（南から）

図版 14



1 .Y139 墓道
（西から）



2 .Y139 墓道堆積状況
（北から）



3 .Y147 墓道接続状況
（南から）



1.Y147 墓道
（西から）



2.Y147 墓道堆積状況
（北から）



3.Y148 羨門部
（西から）

図版 16



1 .Y220（左）・Y149（右）
墓道（西から）



2 .Y149 墓道
（西から）



3 .Y220 墓道
（西から）



1.Y156 玄室奥壁
（西から）



2.Y156 玄室右側壁
（北から）



3.Y156 玄室左側壁
（西から）

図版 18



1.Y156 敷石状況
（左側壁側玄門部、東から）



2.Y156 天井部工具痕
（左側壁上部、東から）



3.Y156 羨門部
（西から）



1.Y160 墓道
（西から）



2.Y164 玄室堆積状況
（北から）



3.Y164 玄室奥壁
（西から）

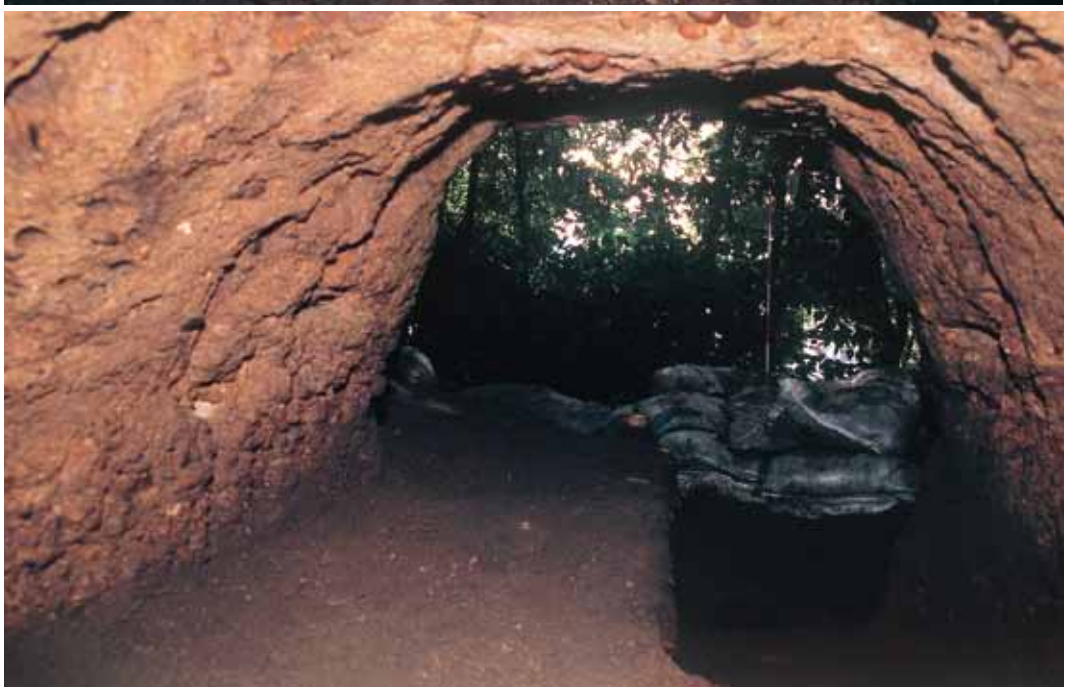
図版 20



1.Y164 玄室右側壁
（西から）



2.Y164 玄室左側壁
（西から）



3.Y164 玄門部
（内から、東から）



1.Y164 羨門部
（外から、西から）



2.Y180 墓道
（西から）



3.Y180 墓道堆積状況
（南から）

図版 22



1.Y219 墓道
（西から）



2.Y219 墓道堆積状況
（北から）



3.Y199 羨道左側壁
遺物出土状況
（東から）



1.Y199 羨門部
（東から）



2. 北側丘陵南端西側
斜面横穴墓分布状
況（南から）



3. 南側丘陵北端西側
斜面横穴墓分布状
況（北から）

図版 24


8-1


8-2


8-3 8-6 8-7


8-8 8-9 8-10 8-11


8-12


17-1


17-2


17-3


17-4




17-5


17-6


17-7


17-8


17-9


17-10


17-11


17-12


17-13 18-23


17-14


17-17


17-18


17-19


17-20


17-21


17-22


18-23


17-7 18-24

出土遺物 1


18-27


18-28


18-31・32


18-33


18-34


19-36


19-37


19-38

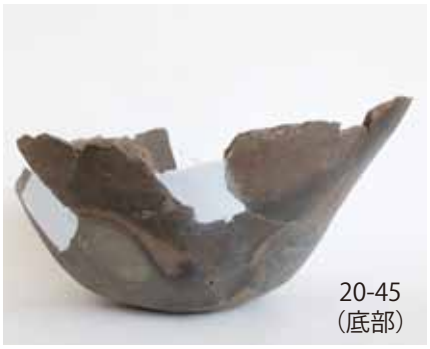

19-39


19-41


19-42
（底部）


20-43


20-44


20-45
（底部）


21-1


21-2

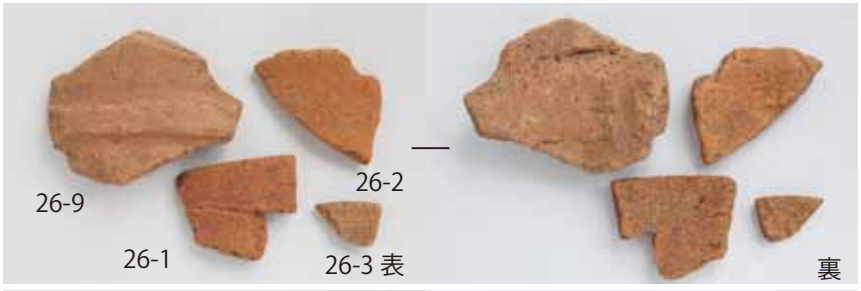

21-3


21-4

出土遺物 2

図版 26


21-5




21-6








22-9


26-11


26-12


27-1


27-3


22-10


27-2


35-1


22-11


27-5



出土遺物 3


35-9


35-10


35-14


35-23


35-24


35-25


36-1

48-1・2


表
36-2


裏


42-4


42-5


42-6


48-3
48-4


49-1


49-3


49-6


49-7


49-9


49-10


49-13


55-1

出土遺物 4

図版 28


55-2


55-3


55-4


55-5


55-6


55-7


55-8


55-9


55-10


55-11


55-12


57-1




57-2


57-3


58-10


57-4


57-5


58-4




58-6


58-12


58-13

出土遺物 5

報　告　書　抄　録

ふりがな	じょうやまよこあなぐん
書名	城山横穴群
副書名	福岡県田川郡福智町所在横穴群の発掘調査報告
シリーズ名	福智町文化財調査報告書
シリーズ番号	第３集
編著者名	井上勇也（編集）・岩橋由季・岡寺良・加藤和歳
編集機関	福智町教育委員会
所在地	福岡県田川郡福智町赤池 970 番地３　ＴＥＬ 0947-28-2046　ＦＡＸ 0947-28-4565
発行年月日	2014 年３月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘要因
じょうやま 城山 よこあなぐん 横穴群	ふくおかけん 福岡県 たがわぐん 田川郡 ふくちまち 福智町 かなだ 金田 715-1 他	40610	870002	33° 40′ 42″	130° 46′ 47″	20081105 ～ 20081128 20090701 ～ 20100326 20120123 ～ 20120330 20120510 ～ 20121004	約 20,000 ㎡	確認調査 保存目的の 重要遺跡範 囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城山横穴群	古墳 横穴墓 中世城郭	古墳時代 中世 近世	古墳 横穴墓 横穴式石室墳 中世城郭	須恵器、土師器、円筒埴輪、装身具、鉄器、輸入磁器、瓦器、石鍋、近世陶磁器	・我が国有数の規模 ・密集度を誇る横穴墓群 ・古墳時代の祭祀形態の一様相を確認 ・横穴墓間の階層差を想定することが可能 ・地域間交流を示す資料が出土

要約

城山横穴群は、横穴群が濃密に分布することで知られる遠賀川流域の諸横穴群の中でも、その地域的特性を顕著に示すものとして代表的な遺跡である。また、規模や密集度の点では全国的に見ても比肩する例は限られており、我が国を代表する横穴群として重要な価値を有している。加えて、地域間交流や階層差を想定させる重要な課題を提起しており、城山横穴群の存在が今後の当地域の歴史解明に寄与するところは大きい。

城山横穴群

福岡県田川郡福智町所在横穴群の発掘調査報告
福智町文化財調査報告書第３集

平成 26 年３月 31 日

発行　福智町教育委員会
〒 822-1101　福岡県田川郡福智町赤池 970 番地３
印刷　株式会社 三光
〒 812-0015　福岡県福岡市博多区山王一丁目 14-4